幼馴染の親友

世羅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
幼馴染の親友

【Ｎコード】
Ｎ４３５３Ｘ

【作者名】
世羅

【あらすじ】
せりかと玲人はお隣さんの幼馴染。今までいつも一緒で親たちの良好なご近所関係の為、協力し合ってきた戦友だったが、高校入学で首席の妖しい魅力を放つ超絶美少年な彼、橘忍とせりかの接近で二人の関係にも変化が？

1

彼、高坂玲人（こうさかれいじ）と産まれてからこのかた１６年のお付き合いである。

いわく、隣に住む幼馴染は眉目秀麗で、頭も良く、サッカー部のエース格でいつも黄色い声援を浴びている。

当然の事ながら、私、椎名せりかは、両親から同じ歳であるお隣の息子さんと比べられ、育って来たので色々な努力を余議なくされた。

彼は１７８ｃｍと長身ですらっとした細マッチョ！！これは幸い私も１６３ｃｍと並んでも見劣りしない。しかし、太らない様に毎日の半身浴、こっそりとビリー隊長に入隊したり、コアリズムをしたりとその時々の流行を追いながら、美容にもかなり力を入れている。

まあ、今時の高校生なら当たり前だが、私の場合それは小学生の時からの日課で、パックをしたり、日焼け止めを欠かさなかったりとそれはかなり異常な頑張りであったと今になって思う。

その甲斐あってか近所では綺麗な娘さんねと言われている様なので、親もまあまあお隣さんに見劣りしない分卑屈にならずに済む様なので、努力はある意味報われてはいると思う。

本当は、高校も別の所に行きたかったが、優劣の差が出ると近所付き合いにも影響が出そうだったので、彼と相談して県下一の公立高校に決めた。

そう。ある時期から玲人と私は共同戦線を張る様になったのだ。お互いの親同士の平和の為に勉強は二人で分からない所を教え合い、

ほぼ同じ点数を取れる所まで徹底的にやるので二人とも苦手教科が無くなった。水泳の苦手だった私を玲人が特訓してくれて今では平均よりも早く泳ぐ事が出来る。周りは二人仲良く遊びに行っていると思っていたが、その実はそんな事をして二人で助け合ってきた。

当然、一緒にいる時間が兄弟がお互いいない事も手伝って長くなる。

そうすると、どうしても出てくるのが、付き合っているのか?恋人なのかという周囲の関心がくるが、これも二人で話し合って曖昧に、付き合っているかいないか中間の態度を取りつつ、はっきりと問われた際は否定するという結果になった。

なぜ曖昧に付き合っている風にしなくてはいけないかについては、あまりにも一緒にいる時間をどう説明するかが他人に説明が出来ないからだった。

戦友と言って理解が得られないのは分かっていたし、私も彼も幼い頃から結んだ協定や影の努力をさらけ出す気は毛頭ない。

お互いの家も頻繁に行き来する為、年頃になった今は、母親達だってそれらしい事を水を向けてくるが、ここは、身内なので、はっきりきっぱりお友達、幼馴染、兄弟みたい、の域を超えない事ははっきり告げておく。身内にまで曖昧にすると将来は・・・などと、どつぼに嵌まってしまっては適わない。

今日も玲人が迎えに来てくれて、学校へと向かう。

近所のおばちゃん達に愛想よく挨拶しながら、駅へと向かう。今日も玲人は爽やかだな~と笑いたくなるが、それはお互い様らしい。

「いつも、せりの猫被りに笑いそうになるから、自然と笑顔になって助かるよ」

「玲人の言葉そのまま返させて頂きます」

「うちの母親も、せりちゃんがお嫁に来てくれたらいいのにとか言ってたぞ、今朝」

「え、、、それはさー、玲人も親にはちゃんと付き合ってないって言ってくれてるよねー?!」

「もちろん。協定通りにはっきり言ってるけど、これくらいの歳の息子は照れてホントの事をいわない、みたいな話をうのみにしてるんじゃないかな?多分」

「あー、そういう結論にいっちゃうのか〜。うちは女同士だから、そういう事はないね」

「しばらくそっちの家に行く事にするよ。せりんちはおばさん最近出掛けてるんだろう?」

「区民センターにイケメン講師が来てくれてるからって今更、英会話だよ?」

「いいんじゃない?幾つになっても海外旅行とかには役に立つよ」

「今だけブームだし楽しそうだからいいんだけど若干引くっていうか・・・」

「うちだって韓流スターのナントカのポスターやらＤＶＤとかで溢

れてるよ」

「どこのおかんも似たりよったりって訳ね。仕方ないか～」

電車で学校の最寄り駅に着いた所で玲人の親友の橘くんに後ろから声をかけられた。

「「おはよー」」

玲人と私とでハモると橘くんは柔らかい笑顔を見せた。うわぁー！！顔赤くなりそう。

だって、だって、私の片思いの男の子はこの橘忍（たちばなしのぶ）くんなのだ!!!

本人にはもちろん玲人にだって知られてない。この事を話しているのは、同じクラスの親友の森崎美久（もりさきみく）と斎賀弘美（さいがひろみ）だけだ。

玲人にバレるのだけは、絶対避けたい。何故かって、そりゃーいいようにからかわれるのが見えているからだ。玲人に同じ事が起こっても面白くて私だってそういう行動にでると思うから、分るだけに絶対、絶対に秘密なのだった。

何時から橘くんの事を好きになったのかは、多分、もう半年以上前の入学当時からだったと思う。

彼は、入学式に新入生代表で挨拶をしていた。トップ合格と言う事だ。私も玲人も自己採点でいいセン行っていたから、半分以上本気で、どっちかだと面倒だよねなんて言っていたけど心配は杞憂に終

わった。

どんだけガリ勉くんなんだと自分の事を棚に上げて彼を見てみると、すっきり通った鼻筋に、綺麗な目元に淵のない眼鏡を掛けた秀麗な容姿の持ち主であった。よどみなく読み上げる声もなかなか良い感じだ。

天は、二物も三物もおまけも与えるのね～なんて思いながら、すっかり見惚れてしまった。他の新入生も多数の女子生徒が彼に見惚れていた。

玲人もすぐ後に、『あんな奴いるんじゃ俺モテないな～』なんて言うから、『モテたいの？』と聞くと苦笑して『それは、そうでもない』と言った。玲人は本当は橘くんみたいな、いかにも人気が出そうな男子がいて良かったと思っているから、逆の言葉を言ったのだろう事は私には分かっていた。

一緒にいる私に迷惑を掛けたくないと思っているのだろう。中学迄は、皆が昔からずっと一緒にいる私達をセットとみなしていたから、あまり問題も無かったが、高校ではそうはいかないだろう。

少し離れる選択も二人で話し合ってはいた。選択肢のひとつではあるが、今迄の事を知っている友達も数人この学校に来ていたので、他人の振り（他人だけど）も不自然だし不便だから問題を保留にして様子を見る事にしていた。

しかし、カメラを抱えながら、両母親が、並んで門の前に立たせるのだから、やっぱり他人の振りは無理の様だ。

帰りも当然一緒に帰る事になる。新入生の初日から男女で並んで歩

く私達は当然目立つ。玲人が目立つから余計に目立つのよ！と心で悪態を付きながらも、秀麗な優等生の橘忍くんが、明日からの話題の中心だろうと考えると、玲人が彼の影に隠れてくれるだろうと思ったが、これがとんだ誤算になる事は、この時は予想出来なかった。

クラスは玲人が一組私が五組だった。寂しいというよりもほっとした。これで物理的には離れていられる。

玲人と別れてクラスに向かうと同中の森崎美久がいた。彼女とは中学の時から親しくしていた。

「せりか、おはよう。同じクラスに知り合いいて良かったよ」

「おはよう。私も美久がいてよかった！」

「でも高坂くんとは離れちゃったね」

「玲人？玲人は離れたってうちが隣だし、学校でまで一緒じゃなくてホッとしてるの。私も高校生になったんだから彼氏の一人や二人欲しいもん」

「そこは、一人で充分でしょう」

「物の例えよ。もちろん一人でいいのよ、良い人ならね」

「そういえば、カッコいい人見つけちゃった♪橘くんって昨日挨拶した人！高坂くんと甲乙つけがたいよね」

「あー！あの人、玲人の何倍もカッコいいひとね。しかも頭も抜群にいいなんてすごいよね」

「せりか・・・あんた高坂君見慣れ過ぎだからそんな事言うけど同レベルだと思うよ」

見慣れ過ぎは、本当だけどなんだか昨日の橘くんは、私には蝶の粉が舞う様の様に煌々と見えた。桜はもう散ってしまったけれど、桜舞う中を歩く彼の姿を見てみたかったなと乙女チックな事を思う。

一瞬の静寂が訪れて皆の視線を見ると彼に注がれていた。

知り合いが数人彼に寄って行くと、ふんわりと優しく微笑んだ。近くで見たそれは、とても綺麗な笑顔だった。

周りもざわつくが、本人は慣れているのか気にした様子は無く、自然体で笑みが絶えない。

「びっくり！五組だったのね」

声を潜めて美久に言うと「知らなかったの？」と返された。玲人と自分のしか見て無かった。

HRが始まり、皆席に着いた。担任は年配の女性教師で、少し厳しそうに見えた。

全員の自己紹介が始まり、中学と名前しか言わないから、直ぐに最後まで終わった所で、担任が言った。

「学級委員長はこちらで指名します。委員長は橘忍君お願いね」

「はい」

まあ、みんなも予想通りだなという空気が流れる。

「副委員長は椎名せりかさんお願いしますね」

「…はい」

思わず舌打ちしたくなったが、これ以外の答えは許されない。以前も学級委員にはなっていたが、雑用が多く、何故自分が・・・という気持ちが強かった。しかも彼と一緒というのが更に追い打ちをかける。彼と一緒では玲人といるより何倍も目立ちすぎる。元々、玲人の時に若干の嫉妬の混じった視線を受けていたせりかは、いくら橘がカッコよくとも観賞するのがいいのであって、彼氏は自分と性格が合って楽しい人が良いなと思っているので、彼は、せりかの中では彼氏候補にも入らない。羨ましいなら替わってあげたいが、実際に委員をやりたい者は少ないだろう。

やはり初日から委員の二人は残らされて、各教科の名簿作りをする。単純作業だが、結構量がある。黙々と仕事を進めると彼が話し掛けてきた。

「やっぱり大変だよね。でも椎名さんが仕事早いから助かった。前も委員とかやってた？」

「うん。こういうの慣れてはいても面倒よね。一学期だけとか言っても一年やる事に成るのは目にみえているしね」

「そうなんだよな。誰もやりたがらないから最初決まった人間が一年なるんだよな。部活も始まるから本当参ったよな～」

「もう部活決めてるの？」

「サッカーやってたから。ここ進学校の割にサッカー部強豪で楽しみなんだよね」

玲人も多分聞いてはいないがサッカー部に入る事になるだろうなと思う。運動部で一年生は準備などあるから、こうして委員の仕事はきついだろうと思われた。

「残れない時は、これ位の事ならやっておくからサッカー部に行っていいわよ」

「それは、悪いよ。先輩にも委員の仕事だっていうから大丈夫だよ」

「でも、いくら進学校のうちでも強豪のサッカー部にその言い訳通じないよ。一年生の初めだもの」

「…椎名さんは優しいね。それに運動部の上下関係良く分かってるみたいだけど、椎名さんこそ部活は？」

「私は入っても文化部だから大丈夫。文化部は委員の仕事やってる

先輩もいるからそういうの甘いのよ。準備もないしね」

「悪いけど出来るだけの事はするけど迷惑かけちゃうと思う。ごめん。少し落ち着いたら融通効くと思う。部長が同じサッカークラブ出身で知り合いだから」

「無理しなくてホントにいいよ。今迄もそんな感じだったし・・・」

言いながら玲人の事が心配になった。多分一組で委員の仕事に就いているだろう。副委員の子は玲人を部活に送り出してくれるのだろうか？

「あのね、私の幼馴染が多分、委員になってて、多分サッカー部に入るのね。それで遅れちゃって準備の当番とかこなせなさそうな時は、替わってあげてもらえないかしら？」

「うん。いいけど、多分が多いね」

橘くんはおかしそうにくすくす笑う。やっぱり笑顔になると彼の秀麗な顔の造りに華やかさが出て、ぐっと妖艶な雰囲気に変わる。せりかにはやはり彼の周りに煌めく粉が降るように見えた。

「それで、その椎名さんの幼馴染くんは名前は？」

「高坂玲人というの。一組なんだ」

「わかった。出来るだけフォローするよ。委員の仕事も多い時は、部活終わったら交代するからね」

「良かった。ありがとう！」

「いや、こちらこそ本当に助かるよ。椎名さんがパートナーじゃなかったら初っ端から先輩ににらまれちゃってたよ」

「新入生代表だもんね。目立ってきついよね」

「うん。実際そうなんだ。いい気になるなとかって思われてるんだろうな」

「それは、否定出来ない。そういう中でやっぱり遅れて行ったらよくないと思ったのです」

急に丁寧語でせりかに諭されると、また橘はおかしくて笑みが漏れる。せりかがそこまで心配する幼馴染がどんな奴かも興味が出てきた。このままいけばチームメイトになるわけだ。

作業が終わって職員室には橘が行ってくれた。駅までは一緒だし、送ると言われて断り切れずに彼の鞄を持って昇降口で待つ事になった。

「せり?」

薄闇の中だったが直ぐに玲人だと判った。

「玲人も委員になっちゃった?サッカー部に入るの?副委員の子は?仕事代わりにやってくれそう?」

「せり、質問多過ぎ〜。とりあえず委員になったし、サッカー部にも入る。両立大変そうだけどなんとかなるだろう。副委員の子には協力は一応頼んだ。バス通学で方向違うから先帰ってもらった」

「そうかぁー。心配し過ぎだったかも」

「じゃあ、帰ろうか？」

「まだ帰れないの。相方待ってるから」

「俺が一緒じゃマズイ？」

「ううん、むしろ待ってて。紹介したいから」

「せりのとこの委員長を？なんで？」

「サッカー部に入る人だから！チームメイトになるでしょ。玲人が委員の仕事で遅れた時とかのフォロー勝手に頼んじゃったの」

「それは、せりがそいつの仕事引き受ける前提だろう？そんな事だめだ！！」

「玲人が委員長の時の副委員の時は自分は部活行くって言って私にやらせて平気だったじゃない。それに、玲人の事が無くても困るの解るのに放っておけないの！！」

「・・・ごめん。お待たせ。なんか俺の事で揉めてるみたいだから、口挟んで悪いんだけど、なるべく椎名さんが負担にならない様に考えるから」

「お前、新入生代表の奴か？」

「そう。橘忍。よろしく。椎名さんと一緒に五組の委員の仕事する

事になって、サッカー部に入る話したら、協力してくれるっていう話になって悪いからって言ったら、幼馴染が入るからサッカー部の準備当番とか助けてくれっていう話になって・・・君が高坂？」

「一組の高坂玲人。そいつとは、家が隣で生まれたときからの付き合いだ。俺も橘のフォローするから委員の仕事も二人で話し合ってきちんとやろう。もちろんお互いのパートナーにも多少は、迷惑掛ける事にはなるけど協力すれば何とかなるだろう？」

「ああ。そうだな。出来たら俺も椎名さんに迷惑掛けたくないから、高坂と協力してやっていきたい」

「じゃあ、決まりだな。よろしく頼むな」

「玲人、そういう事なら一組の副委員の子とも友達になってタッグ組みたいから今度紹介してくれない？」

「せりが無理しなくてもいいから」

そこからは、歩きながら先にこうなる事を見越して部長さんに色々としきたりめいた事を聞いてる橘くんは、サッカー部の大体の仕事の流れと許されそうな範囲を説明して、二人で打開策を練り始めた。駅に着くころには二人はすっかり相棒と化していて、ケータイのアドレスを交換していた。橘くんはわたしのも教えて欲しいと言ったのでとりあえず私達も知っていた方が便利だろうとアドレス交換をした。

2

晴れてサッカー部に入部し、練習に行く二人を見送る。教室に残る生徒からの視線が、かなり痛い。

せりかは、橘と少し近付き過ぎた事に後悔し始めていた。

昨日は薄闇の中で、愚かにも気が付かなかったが、玲人と橘が二人連れだって歩く図は、酷いくらい絵になった。酷いというのは、せりかの心情からでた言葉だが、とても人目を惹く。一人一人でも充分に華をしょって歩いている様な二人が仲良さそうに歩く図は、それは、それは二乗されて麗しく、筋肉質な玲人に比べるとやや華奢にみえる橘は、見方を変えると、やや倒錯的にも映る。

男女限らず振りかえられる二人は飄々と足速に部室を目指す。

しかし、橘も悪目立ちでキツイと昨日洩らしていたところを見ると、こちらからは平気そうでも本人達もポーカーフェイスなだけかなと思う。玲人に比べると橘は中身は繊細そうだった。せりかに話しをする時の距離の取り方や、昨日の玲人の非難に対する対応を見ても、配慮があって大人だと思う。そう思うと玲人は天真爛漫までは言わないが、比べれば無邪気な方だ。すっかり昨日橘に懐いてしまった玲人は、放課後早々に橘を迎えに来たのが、せりかにとっての悲劇であった。玲人もせりかの紹介で橘と仲良くなったからだろうか、せりを先に呼び、彼を迎えに来た事を告げた。目立つ容姿の玲人の突然の来訪に皆がぽかんとしているところに、追い討ちの様に橘に「行って来るね」とにっこりと新婚さんのような言葉を掛けられた。無視するのもなんだと慮っての事だが、かなり要らない配慮だ。

せりなは、部活見学を約束していた美久と一緒に逃げる様に教室を出た。

「すごかったねー♪なんかもう眼福って感じ？W王子様に囲まれて羨まし～」

「そんなにいいもんじゃないの、美久は付き合い長いんだから知ってるくせに」

「いやー二人並ぶと迫力あるから、びっくりしたよ。あの二人もう友達なんだ？なんだか似合うというか、逆に似合い過ぎてちょっとっていう気もするコンビだね」

「私がうっかり紹介しちゃったの。同じサッカー部に入るって聞いたから」

「橘くんってすごいね。トップ入学でサッカー部に入るなんて、文武両道？しかもルックスが抜群だし」

「本当にそうね。たとえ本人の努力が有ったにしても、不条理を覚える人ではあるわね」

「でもせりかも仲良くなったんでしょう？」

「うん。まあね。仲良くっていっても話してみたら向こうがすごく大人な人で、玲人が懐いちゃったのよ」

「性格もいいんだ～。益々ファンが増えそう。競争率高くなりそうだから頑張らないとね」

「私はやめとく。玲人とずっと一緒で大変だったの、やっと少し解放されそうだったのに、これ以上厄介事を呼び寄せたくないもの」

「勿体ないと思うけど、せりかもなんだかやつれてるし、そう思うのもしょうがないかもね～」

「私は、普通にちょっとだけカッコ良くて優しくて可愛い感じの気の合う人がいいの！」

「なんだかせりかって、微妙に残念なトコが可愛いのよね。一見しっかりしてそうにみえるのに」

「何よー。残念な事なんてないわよ。私は普通の幸せを願ってるだけなんだから」

「じゃあ、その微妙な彼を連れて来て見せてくれるの楽しみにしてるからね」

絶対連れて来てやる！！と思うが、私だってそんなに全体に丁度いい人が簡単に見つかるとは思ってはいない。玲人や橘みたいな素敵な人達は目立つから直ぐに発見されるだけの事だ。気が合うとかは時間を掛けないとわからないしやっぱり難しいのかと思う。

家に帰り、夕食と入浴と腹筋などのいつもの自己流美容メニューをすませてから、今日の復習をしていると、部活が終わった玲人がやって来た。

「もう、始めてるんだ～。偉いね～。せりは」

「猫撫で声出すって事は分からないトコあったんでしょう？今日の分は、聞いてくれて大丈夫だよ」

「流石、せり様。いつもの事だけどホントに助かってるよ」

「お互い様！持ちつ持たれつでしょ」

「そうだけど、せりと一緒の学校にして良かったよ。やっぱり」

「そうだね。違ったら一緒に勉強出来ないもんねー」

「大学もせりと同じ所にしようかな～」

「な、何言ってるの！まだ高校入ったばかりだし、大学は将来の事も考えて選んでよね！」

「まあ専攻とかもあるから、そううまくは行かないだろうけど、出来ればって話」

「もう、玲人ってば、いつまで一緒に居る気なの？」

「何だよ。イヤなのかよ。こんなに付き合い長いのに俺、愛されてないんだな～」

まずい。玲人が拗ね憎になってる。今迄も何度かあったけど、もういい加減子供じゃないんだし、この手の拗ねかたは、無しだと思うんだけど。しかも愛されてないって言われてもね～。愛してるかと

言われればそれは違うし、逆に愛されていないのか？と言われれば愛情はあるんだけど・・・。ムズカシイ。お互いお年頃になって来たんだから？幼稚園の頃と同じ事言うのはやめようよと言いたい！！しかし言ったらもっとメンドクサイ事になるので「そんな事ないよ」と言っておく。

「とりあえず、勉強しよう。ね！」

「数学でいまいち理解しきれなかった所、教えて」

「うん。これは・・・」

説明を始めると元々飲み込みの早い玲人は一回ですぐ解るので、教えるのにそんなに手間が掛からない。その後は、他の教科の復習を二人で簡単にさらった。やはり、一人でやるより、効率もいいし頭に入る。その後、予習も半分ずつして、半分はお互いにレクチャーして、これで完璧、と二人とも満足した所で玲人が帰って行った。

なんだか今日の玲人は、幼稚園の頃、せりかが、他の男の子と遊んだ時と同じ拗ねかたをしていた。もしかすると橘くんの事が引っ掛かってるのかなと思うが、拗ねられる程親しくもないし、本来は恋人では無いんだからそんなに独占欲を持たれても困るのだが、それを彼に言うのは、築きあげて来た二人の仲の何かが壊れてしまいそうで言えなかった。

玲人は、今日帰り道で、橘がせりかの事を褒めるのを誇らしく自分

の事の様に聞いていたが、なんだか、もやもやして来た。言われなくてもせりかが、優しくて、思慮深くて、可愛いけれども気取った所がなく気さくな性格で、おまけに面倒見も良いと言う事は、最初から分かっている。他人がそれを賛辞するのは珍しい事ではないが、ああ手放しに褒められると橘は、せりかが、好きなのだろうか？と勘ぐってしまう。まだ会って間もない橘にせりかを取られてしまいそうな気がして、不安定な気持から自分でも自覚する程、子供っぽい行動に出てしまった。自己嫌悪に陥るが、せりかが、昔と一緒で、「そんなことないよ」と愛情を否定しないでいてくれる優しさが、心に残った。

橘は男の自分から見てもかなりの美丈夫で、サッカーも体格にまかせて強引なプレーをする玲人と違い、テクニックに優れていた。自在にボールを操る様は、見ていても気持ちがいい位で、レギュラー入りも受験の為に早めに引退するこの学校の三年生が、引退した後には確実だろう。それを奢った所も見えず、学年トップの成績は受験勉強を、死ぬほどしたからだと努力を隠そうともしない所が好感が持てる。俺とは全然違うと思う。毎日のせりとの勉強会が無かったら、俺の成績など知れている。お互い助け合ってはいても、サッカーに時間を取られる分、学業面では、どちらかというとせりに助けられていると思う。自分の方が助けたと思うのは主に逆上がりを出来る様にしてやったり、泳ぎのコツを教えたり、走るフォームの改善だったりと、主に体育面が多かった。それでも、せりは今でも、その事を話題にして、助かったと言ってくれるし、勉強会も二人だと効率がいいと言って玲人の負担を軽くしてくれるのだ。成績が落ちると間接的にせりにも迷惑が掛かるので部活動をしながらも精一杯頑張るが、それは水鳥のように、下で足がいくらバタついていても見えないし、見せなかった自分と努力を恥じらう事無く見せる橘とどちらが正しいという事はないだろうが、それでも玲人には、彼が眩しく見えてしまう。今迄は自惚れる訳では無いが、せりかが、

自分よりも近しい男が出来そうに成っても、それを蹴散らす自信があったし、実際そうして来た。その事はせりかは知らないし、知らせるつもりもない。それ程たいした事もせずに少しだけ付き合っている男の顔で相手を睨めば、向こうが簡単に退いてくれただけだ。そんなつまらない男達に、せりかを渡せる筈も無いと大義名分を自分の中で作って来た。橘忍は、大袈裟かもしれないが、こんな出来た人間が世の中に存在した事に玲人が軽くショックを受けた程、精巧に神が造り出したかのような美しい相貌以外の要素も完璧だった。今迄の大義名分は橘の前では跡形もない。そんな人間が傍に居れば少なからずとも好意を持つのは、時間の問題だ。既に玲人でさえ、橘忍に魅了されている。せりかが、橘と付き合えば、きっとせりかと玲人の関係も変わってしまう。玲人の中でそれを、避けられる術を持たない以上、考えれば考えるだけ、思考は深みに嵌まっていってしまうだけだった。

3

「橘くんからメールだ」

せりかが呟くと玲人は僅かに眉を寄せた。最近文化祭が近い為、打ち合わせメールがよく届く。自分の所にも同じ様に副委員の石原沙耶からメールや電話は来るが、どうも一組よりは、五組の方が力が入っているのか、連絡が1．5倍位はある気がする。

せりは悩みながら、返事を返すと満足した様に微笑んだ。

「なにやるんだ?五組は?」

「えー!内緒だよ。他のクラスはライバルでしょ」

「たいした事じゃないじゃん。うちだって隠す事何もないし、別に教えるのに聞こうとしないし」

「だってこっちの言わないのに聞いちゃったら悪いもん」

「だっても何も、随分他人行儀だな」

「子供っぽい事言わないの。文化祭の時に見に来てよ。そっちにも行くから♪」

楽しそうに、子供の様なワクワクした目で言われると、そっちの方がガキっぽいと言い返したい気分の玲人だったが、あまりしつこくして嫌われたくはない。ずっと幼い頃から一緒にいたが、やはり其処には見えない線が明確にひかれており、そうで無ければこんなに

長く居られない部分でもあった。

玲人のクラスはありきたりだが、執事&メイド喫茶という学園祭では最近一番多いのではないかと思われる催しもので、衣裳作りや喫茶のメニューなどが、女子の担当で、店の内装が男子担当という完全分業制で、部活動もある玲人には、とても有り難い、楽さ加減だった。当日、殆んど執事役をやってくれれば、内装も指示を出してくれれば、部活優先でいいと言うクラスメイトの気配りも嬉しい。実際、この進学校の中で真剣な運動部はサッカー部だけで他は同好会要素が強く、文化祭優先といった考えでいいらしい。運動部自体も入部しているやつは少数派だった。

対してせりかは、部活動は結局見学だけで入らず、帰宅部で暇なのかと思えば、今は玲人よりも忙しい。家では色々とチクチクと縫っているし、たまにミシンが出たままになっている。もともとせりかは裁縫の類が得意である為、面倒見の良さも手伝って無理しているのではないかと不安になる。帰りも結構遅く、部活動を終えた自分よりも一時間以上遅いのだから心配になる。迎えに駅まで行くと言っても、人通りも結構あるから、心配要らないと断られてしまう。経験上、ここで過干渉な事をすると、とても距離を開けられてしまう。いつもより更に遅い時だけ、メールでどのあたりか聞き出して、コンビニに買い物があるからついでに・・・と言って何気なく迎えに行くが、其処まではせりかも拒否する気持ちは無い様で、『ありかとね』とすこし照れたように礼を言う。短い期間の事だし、毎日迎えに行かせてくれた方が精神的に楽なのだが、せりかには、譲れない所らしい。言わなくても玲人には、なんとなく理由が分かる。それは『彼氏の仕事』なのだ。それを玲人にして貰うのは、嫌だと言うよりも、今迄ずっとして来た線引きから越えることが、玲人の為にも、そして、自分の為にもならないと考えている様だった。

橘からも何度か送るという申し出を断っているというのを橘本人から聞いていた。せりは、変な所で頑なで真面目だ。自分はあんなに面倒見が良いのにそれは自分では意識に無い様で、自分の事は出来る事は、頼らずに、出来ない事だけ已むを得なくお願いするといったスタンスだ。玲人は、せりかのそういう面はとても気に入っていたが、最近は頼られない事が少し、寂しく感じていた。

せりかのクラスは、実は劇をやる事になっていた。なんでそんなメンドクサイ事を・・・と内心思う。衣裳、台本、大道具、小道具、キャスト決めに、セリフ覚えとやる事が目白押しの一番手の掛かる代物だ。しかし、多数決で『シンデレラ』をやる事になった。理由は簡単だ。リアル王子様の存在が大きい。橘忍が舞台上に立てば、それはそれは見映えのする事にクラスの殆んどの者が目を付けていた。基本、賢い人間ばかりの集まりだ。何を効果的に使うかというのに長けた者が多い。其処に橘の存在は、大きく使わなければ宝の持ち腐れであると考えられていた。学年中の有名人でもあり、客寄せにも持ってこいな訳だ。橘は基本、本当に大人な人だと思う。嫌な顔一つせずに、引き受けた。橘の性格上、王子様なんてやりたくないのは、間違いない。ここ数カ月のクラス委員のお付き合いで、周囲の創る王子様キャラに関して、たまに洩らす少し困ったような言葉を聞いているせりかは、少なからず同情してしまったが、シンデレラはせりかにやって欲しいとクラスの皆に言われた時には、その同情も何処かに飛んで行ってしまった。少し躊躇いながらも断りたい旨を示すが、皆もやるからには失敗したくないし、しっかりしていて容姿も整っているせりかが適任だというのがクラスの総意で、

懇願されてはせりかも断りきれなかった。

こうしてせりかの忙しい日々が始まった。皆それぞれ得意分野に分かれて、自主的に仕事を引き受けてくれるので、クラス委員としては、なんて良いクラスだと思う。一番難しいと思われた台本作りも、元々そういう事を将来の仕事にしたいと考えているクラスメイトが、何本か案を持って来るからその中から面白く成りそうなもので行こうという安心感たっぷりの言葉をくれた。

ダンスシーンだけは大分、練習を余儀なくされた。ワルツの踊れる高校生などそう居る訳もないが、やはり、一人や二人嬢ちゃん、坊ちゃんがいて、小さい頃から嫌が応も無く叩きこまれている二人の経験者が、先生となってダンス教室をしてくれる。配役はそれを見越して運動神経の良い者が選ばれている。

最初こそ、皆、男女が身を寄せて踊るダンスに照れるわ、腰が引けるわで、見れた物では無かったが、舞台で失態を見せる事を思えばやるしかないと腹を括ったらしく、それなりに踊れる様に成るのは相当早かった。踊れる様に成ると楽しくなって来てしまい、現金なもので、あんなに最初苦戦したダンスが最近の一番の盛り上がる場へと変わって来ていた。橘が部活がある為、代役がせりかと踊ってくれるのだが、この代役はワルツの先生役の片割れの坊ちゃんが演ってくれる為、リードも巧みで本当に踊りやすい。皆から見ても優雅に見えるらしく、せりかのシンデレラ役は好評価を得ていた。これで本番に橘と上手く踊れれば、なんとか大役を果たせそうだった。

部活を終えて皆に謝りながら練習に参加する橘は、最初からワルツを踊れたのかと思う程、上手だった。それを口にすると、家でもステップを踏んでいて、毎日練習しているらしい。家族に気味悪がられていると告白すると、その場の全員が笑い崩れた。橘は天才では

なく、努力の人だとクラスの皆にも段々分かって貰えて来ている。代役の子にも昼休みに付き合って貰って、マンツーマン指導で教わっている。

皆で、一生懸命何かを創り出すと言う共同作業は、とても楽しく、特に努力を怠らないクラスの王子様が牽引役となって皆を引っ張ってくれていて、五組は一つに纏まっていた。せりかも今迄、あまり話した事のないクラスメイトとの触れ合いに心温かくなっていた。特にダンス先生の坊ちゃん、本庄綾人（ほんじょうあやと）とはよく話す様になった。本庄は、皆から坊ちゃんとあだ名で呼ばれるのに最初はムクれていたが、皆からすると親愛と感謝の入り混じった呼び名だったので、せりかがそう説明すると、仕方無く受け入れると言った。シンデレラを多分嫌でも一生懸命やろうとするせりかの言葉は本庄には、響くものがあった。橘も相当、努力型だが、せりかもそうだというのが練習を通して本庄には分かって来ていた。

見た目も頭も申し分無くて運動神経も良く、委員の仕事もそつなくこなす二人に、クラスメイトは、多少の羨望と嫉妬の入り混じった感情があったが、文化祭の準備が始まるとそんな気持ちは綺麗さっぱり消えてしまった。どれだけ二人がいつも大変な仕事をしているか、皆の面倒をさりげなくみてくれていたかを放課後に残る事で目のあたりにしたからである。しかも軽々とこなしている訳でも無いのは見てとれた。二人の（特にせりかが）鬼気迫る迫力で、面倒事を次々と片づけていく様子には頭が下がった。皆で手伝う事を決めて、出来る限りフォローしなくては申し訳ないとほぼ全員が思った。

本庄も最初はいつも完璧な二人が、ワルツに四苦八苦するのをほんの少しだけ、小気味よく思っていたが、真摯な二人を見れば直ぐに自分の考えが愚直であった事に気付いた。改めてみれば、せりかは、手を取るのも照れて頬を染めながらも、何度も、何度もステップを

踏む。自分に対しても感謝の気持ちを顕わに親愛の笑みを向けてくれる。いい意味で普通の躾の良い女の子だった。皆は、ふざけて『坊ちゃん』と本庄を呼ぶが、せりかだけは、一度もそう呼んだ事がなく、『本庄君』と呼んでくれる。直接的ではないが、ワルツが出来る事をばれてしまった所為で申し訳ないと言う様な趣旨の事を言われたので、そんな事は何でも無いと答えれば、ほっとした表情を見せた。本人はシンデレラの大役だけでも荷が重いだろうに、気遣いにも程があると少々おかしくなって笑ってしまうと、『ワルツが出来る人がいて本当に助かったと思ってとっても有り難い気持ちでいっぱいなのに笑うなんてひどい・・・』と本気でムクれられ、本庄は少々、困ってしまった。椎名せりかが義理難く、気さくでいて、それでいて思っていたよりも子供っぽいからだ。しかしまだ、高校一年の女の子だと思うと、今迄がどれだけ神聖視という名の偏見で見ていたかという事に、随分と自分が浅慮であったと思った。他のクラスメイトにしてもそう思っていると思う。

よく話す様になってからも、せりかは本庄の家の事などには決して触れてこない。最近見た映画の話だったり、女子だけでやっている衣裳作成の苦労話等をユーモアを交えながら、話してくれる。どちらかというと本庄は聞き役だ。本庄は笑いながら、話の途中で突っ込むと切り返しもとても見事でこちらを不快な気持ちにさせるという事がない。ダンスの時の初さから考えると男兄弟でもいるのかとこちらが踏み込んだ事を聞いてしまっても、多分、幼馴染の一組の高坂玲人の所為で、男子の鋭いツッコミに慣れてしまっているんだと思うと簡単に答えてくれた。自分の事は殆ど話さない割に、せりかに関しては、詳しくなってしまっていた。高坂が生まれた時からのお隣さんだという事や、彼女の母親がイケメン講師目当てに英会話に行っている話まで、話の流れで話してくれた。言ってしまってから要らぬ事まで話したかな?という後悔が少しみえたので、『他には、椎名さんの個人情報は流さないよ。他の男子にいろいろと聞

かれるけどね』と言っておくと『流石、先生』と返された。教える立場からか、彼女はたまに先生と茶化して呼ぶ。女子はどちらかというと坊ちゃんよりもそちらの方が浸透している節もある。文化祭も終わって落ち着けば、元の名字呼びになってくれるとは思っているが…。坊ちゃんよりは何倍もましな呼ばれ方ではあった。

そうして、着々と一年五組の「シンデレラ」が完成されつつあった。

4

「ラブシーンが最後に無いと劇全体が締らないんだよ！やっぱり！！」

台本と演出担当の荒井美奈絵が出来上がりつつある「一年五組版シンデレラ」に対して、声を張りあげる。

「「「「「はあ～？」」」」」

呆れた様に皆、力の抜けた答えを返す。特に当事者の二人は苦笑気味だ。

「あのね～。荒井さん。演出に力入れてくれるのは嬉しいけど、それはちょっとやり過ぎだと思うよ」

せりかが軽く注意をいれると、橘を始め、周りの者も頷いた。

「そうだよ。学園祭でそこまでやったら指導はいっちゃうんじゃね？」

「主役の二人にも悪いよ。そんな演出は」

次々と荒井を諭す言葉が出るが、流石プロ志向だけあって少しそれっぽい感じでいいから！と粘られる。

「大体、少し抱き合うふりなんてダンスとそう違わないじゃない？」

「「「「違う～！！！」」」」

踊る連中からは悲鳴が上がる。

本庄がダンスの先生として見かねて代表で物申してくれる。

「ワルツをしない人間から見ると抱き合っているのと近く見えるかもしれないけど、踊る当事者からは天と地程の違いがあるんだ。みんな、ダンスなら恋人じゃなくても手を握れるけど、それ以外でそういう事は無理だろう？女優や俳優じゃないんだから、そんなに割り切れないよ。まだ高校生なんだし」

「そうか～。ごめんね。出来あがりがどんどん良くなって来たら欲が出ちゃって。私も大分、無理目な事を言ってるのは分かってるんだ・・・」

荒井が、しょぼんと肩を竦めると皆、責めた事に段々罪悪感が湧いて来た。彼女は、そもそもよくやってくれているのだ。彼女無くしては、劇も素人ばかりで形になったかどうか分からない。

気まずくなった内のひとりが爆弾を放り投げた。

「キスシーンは？もちろんフリだけで。それで幕が降りれば、かなりめでたしめでたしっていう感じじゃない？」

「フリだって流石に見てる先生とかも分かるだろうし、それならば注意は受けないかもね」

「そうだよね。ホントにする訳じゃ無いし、そういう場面があったらすっごい素敵かも～」

女子中心にかなりの盛り上がりでキスシーン（フリ）の追加がついに決定してしまった。せりかにしたら大ショックだが、橘も口も挟めない状態でせりかを見るので、安心させるように『大丈夫、フリだけだし劇がうまくいったほうが嬉しいから』というと橘も頷いた。

しかし、あからさまな、フリなのもどうなのか？やはり一気に、冷めるのではないかという話になり、クラスの皆が、客席予定の色々な位置に立ち、照明も夜で、月夜バージョンに落として、どうしたらどの角度からみても離れて見えないか？という実験がはじまった。

せりかはやると言った手前、頑張るが冷や汗が出て来た。せめてもの救いが衣裳を着ている事だった。これが制服だったら本当にもう居たたまれない。橘の王子様の衣裳は、緋色のマントに黒のタイネクタイをしたスーツだった。物語の王子様っぽくないが、かぼちゃパンツは、似合わないからという理由でドレスもすべて現代風にする事で、浮かないようにしたが、橘の存在自体が、佇んでいるだけでも充分に目を奪われるので、あまり意味がないのではないかとせりかは思った。しかもタキシード風なスーツとマントじゃ、ドラキュラ伯爵に見える。しかし、橘が着るとそれに王冠を載せただけで充分王子様になるから摩訶不思議だった。

現実逃避すべく色々な事を考えるが、キスシーンは顔を限界まで近付けるので、もうビクビクである。橘や、本庄が、やっぱり止めたほうがいいんじゃないか？と取りなしてくれるが、見ている皆が、変な演出家スイッチが入ってしまって、「もうちょい角度右で」とか「少し手を添えると隠れて離れてるのが見えないからやってみて」と指示が色々な所から飛んでくる。それに少しずつ答えて行くうちに、全員からＯＫサインが出た。わぁーとか、おおーとか出来あがりに歓声が沸いた。

「すっごい雰囲気ぐっと締っていい絵になるよ！！やっぱりこれでいこう。立ち位置とか角度とか充分に今のを覚えこんでね！」

荒井が興奮して言うが、心の中はへなへなになっているせりかにこれを覚えている自信は全く無い。橘を頼る様に見ると、ガムテープを小さく分からない位にこっそりとその場所に貼った。それから携帯を持って来てもらい、本庄に写メールのムービーで体勢を一周まわって撮ってくれる様にリクエストしていた。流石、頼りになるなぁと変に感心する。本庄も冷やかす事も無く、黙々と作業をこなしてくれる。先生ありがとうと心の中で手を合わせる。こんな撮影、本庄で無ければ冷静にやってくれられないと思うと橘の人選にも唸らざる得ない。

「有難う。橘くんも先生も」

少し涙目になりながらお礼を言うと、二人がぎょっとしてせりかを見たが、本庄は早く涙を拭け！！とやや命令口調でハンカチを押し付け、橘は口元を押さえて顔を赤くした。

「どうかしたの？」とせりかが不思議がると「これだからお子様は！！」と本庄には珍しく悪態を吐かれた。橘は僅かに微笑んで、後で、メールで写メ送るねと優しく言っただけで質問には答えてくれなかった。何がいけなかったのか帰ったら玲人に聞いてみようとせりかは思い、それ以上聞くのをやめた。

帰ってからせりかは、恒例になっている二人の勉強会の後に、今日

の事を劇の事だけすっとばして玲人に聞いてみた。玲人は、一瞬絶句するが、その後、呆れたように溜息を吐いた。

「あのさー、違ってるの分かって聞くけど、特に意図はないんだよな？」

「意図？って何の為の意図よ」

「やっぱり微塵もないんだな。分かってくれてる本庄に相当感謝すべきだな」

「ハンカチ押し付けられたけど別に拭かなくちゃいけない程、潤んでないよ。少し熱とかあるとウルッとするじゃない？あれくらいだよ。しかもなんか達成感と緊張が解けたんで気が少し緩んだだけで、泣いちゃったわけでもないのに・・・」

「あのなー。鈍いのもいい加減にしてくれっていうか、多分俺の所為か・・・。今迄、せりの周りから男連中排除してたから、極端にそういう事に疎くて無防備にさせてるんだな～。ごめん！！」

「なんで玲人が謝るのかも訳分からない。確かに今迄、すこーし免疫薄いかもしれないけど女子校育ちじゃ無いんだし、喋ったり普通にしてきたんだよ？」

「うーん、なんて言ったらいいか分かんないから直訳しても怒らないか？」

「うん。怒らないから、はっきり私の至らない事を言って？それだけは本庄君の言い方で何と無く分かったんだよねぇ」

「一言で言うと、それは普通に見れば、男を誘っている様にみえるんだよ。せり…」

「はぁー？初心者が二人も一遍に誘えるわけ無いじゃん。ばっかじゃ無いの！！」

「だから～、無意識でやるのは無防備の馬鹿なの！それを気付いて本庄が止めてくれたんだろ。お前にそういう気が無くても男の方がグッとくるの！！」

「誰にでも来るわけ？節操ない感じ。普通、好きな人だけじゃないの？」

「高校生の男なんて大抵そんな事しか考えてねぇよ。今迄そういうの俺が排除して来たから危機感薄いかもしれないけど大抵の男ならせりはストライクゾーンだからある程度、気をつけないと駄目なんだよ」

「なんか私って、鈍くてすごく駄目な子みたい」

「みたいじゃなくて、だめだから！！」

「きつーい。でも玲人じゃ無いとこんなにはっきり教えてくれないんんだから感謝しないとね。ありがとう。橘くんと本庄くんも教えてくれなかったもん」

「それは、無理だろう。半分自分で気付くようにしてくれてる分、本庄は場馴れしてるのか、ちょっと話聞いたら普通の奴と違うよな？」

「そうだね～。悪いから、直接は聞いてないけど、噂では、結構有名な企業の御曹司って聞いたけど。でも本人あまり言われたく無さそうだから、玲人も余計な事言わないでね」

「セレブで女慣れしてるって事か・・・」

「そんな感じ悪くないし、全然チャラくないわよ。なんだか色々と面倒見も良くて育ちがいい感じで他の子よりも少し丁寧な感じ？粗野の反対で…優雅って言ったらちょっと過ぎるけどなんだか自然にジェントルな感じって言ったらわかる？」

「ああ、大体分かった。まあ、いい奴なのもわかる。せりが、結構ボケてるのを知ってて、面倒見てくれてて、なんだか俺も手を合わせてお礼言いたくなってきた」

「私なんていつも心の中で手を合わせてるよ。実際言葉でも言うけど。ハンカチのお礼と共に何か作ろうかな？」

「ああ、それ駄目―。アウト。そいつにも、またお目玉喰らうと思う。少量の買ったチョコか飴がベスト。いつも噛んでるガムとか？そういう軽―い感じのにしとけ」

「分かった。そうする。遅くまでありがとう。聞いてくれて助かった。玲人には文化祭終わったらお菓子作ってあげるけど、それはセーフ？」

「もちろん！！」

満面の笑みで玲人が答えた。せりかも気になっていた事が分かったので、内容はどうあれ気分は良かった。これで数日後の文化祭がう

まくいけば言う事なしなんだけど、といった気持ちになった。

5

文化祭当日になった。

今日は一般公開のない校内だけの公開なので模擬店も割合空いている。

せりか達のクラスの劇は、明日なので、チラシを校内で、配り終わると、後は自由時間となった。部活動などで、展示やお店を出している者は、そちらに行かなくてはならないが、せりか達は文化部にも入っていない為、模擬店を見て回る事にした。美久と弘美と三人で、一年一組のメイド&執事カフェに行ってみる。

一組のカフェは大盛況で、入るのは躊躇われたが、玲人がせりか達を見つけて声を掛けてきた。

「せりー。来てくれたんだ。奢るから、こっちにこいよ」

お友達特典で空いている目立たない席に滑り込まされる。

「これって、横入りじゃないの。大丈夫なの？」

せりかは、こういう固い所があり、理不尽な事を嫌うところがある。玲人は、ここは特別予約席だから大丈夫だと宥めた。他の子達も特別に親しい子が来た時に自分が対応する事を条件に許されている席らしい。そういうことなら、とせりかも納得して席についた。

「お帰りなさいませ。お嬢様。お飲み物は何に致しますか？」

執事姿で軽く腰をおり、多分お決まりのセリフを玲人が言うと、せりかと美久は笑い崩れた。

「似合い過ぎー！！高坂君カッコいい。一番人気なんじゃないの？」

「玲人、天職だよ。執事っていうか、ホストっぽい！」

けらけら笑いながら、褒めてるんだか貶してるんだか分からない言葉を掛ける。二人とは対照的にあまり玲人と面識のない、高校からの友達である斎賀弘美は、頬を染めて玲人に見惚れてしまっていた。

「それで、お嬢様がた？お飲み物は？」

「アイスコーヒーお願いします」

「美久と斎賀さんは？」

「うーんとオレンジジュースで」

「あ、私も！」

「かしこまりました。少々お待ちください」

玲人が去っていくと三人できゃあきゃあ騒ぎだした。

「玲人も似合うけど、女の子のメイド服もかわいいね。一回着てみたい」

「そうだね～。みんな三割増しかわいく見えるよね。執事さんも見た目重視みたいだし？」

「確かに。厳選してるみたいね。けっこうシビア・・・」

「せりかもそう思う？執事さんも衣裳カッコいいし、店も本格的。ステンドグラスとか使っててアンティークな喫茶店みたい」

「一組も頑張るよね～。明日は負けてられないね！」

かしましくお喋りしていると玲人が飲み物とショートケーキを持ってきた。

「お待たせ致しました。どうぞ」

いつもに無い玲人の気取った所作と笑顔に、せりかも楽しくなってきた。

「執事さん？ケーキは頼んでませんけど？」

おどけて言うと

「お嬢様方の為に特別に用意させて頂きました。宜しければお召し上がりください」

それらしく、恭しい態度の玲人がまたツボに入って、美久とせりかは笑い出す。弘美だけは首を傾げてお礼を言うと、玲人は、『喜んで頂けて光栄です』と微笑んだ。

「ありがとう。玲人もあっちで、呼ばれてるよ？私達は充分楽しませてもらったから」

「ああ、ゆっくりしてってくれ。俺も明日の劇見に行くから席キープしといて。結構評判になってるから混みそうなんだよ」

「王子様がねー。橘くんじゃ、宣伝しなくても人が来てくれるから助かるよね」

「せりのシンデレラも笑いに行ってやるから。後、忍も冷やかしてやれるから、今から超楽しみ！！」

「冷やかすのは、終わってからにしてよ？唯でさえ、私も橘くんも緊張してるんだから」

『わかった、わかった』と言って玲人は他のテーブルのお客さんの元に去っていった。

それにしても執事の玲人は大人気だった。せりか達がいる間もあちらのテーブル、こちらのテーブルといった感じで中々忙しい。一緒に記念写メ等も撮らされていて、笑顔で楽しそうに対応している。これがもし橘だったら相当苦行だろうと思われた。反対に玲人が王子様でも楽しくやってくれそうだと思うと玲人は、いつもポジティブだなぁと感心させられた。橘がネガティブなのでは決してない。あちらの方がごく普通の反応で、玲人の方が、ある意味特別強靭な精神の持ち主なのだろう。騒がれてもそれはそれで、相手も自分も楽しくさせられている様に見える。

玲人に皆でお礼を言ってから一組を後にした。後はタコ焼きをたべたり、綿菓子を持って、ヨーヨー釣りなどまるで、お祭りに来たみたいである。おまけに全てが安価である為、買うのになんの躊躇いもない。明日の衣裳が着れなくならないといいんだけど、と思うが楽しむ方を優先した。弘美が射的でおおきなぬいぐるみを当てて、

嬉しそうに抱えているのも微笑ましくて自然と笑顔になる。そうしているうちに同じ様に楽しんでいる橘と本庄とすれ違った。橘がせりかに声を掛けて来た。

「玲人のところ行ってやった？」

「行ったよー！笑い過ぎてお腹痛かったよ。あんなに気取った玲人初めて見たからもうおかしくて！」

「椎名さんの幼馴染の彼、スゴイ迫力あるね。カッコいいんで初めて見たから結構驚いた」

「男の人から見てもそういう事思うものなのね」

「むしろ男の側から格好良く見えるタイプだよ。体格とかも筋肉質で、でもすらっとしてて理想的だし。橘も綺麗な顔してるけど、男からすると見た目だけに関すれば高坂のが羨ましいね」

「せんせい？橘くんを目の前にして失礼じゃないかしら？なんといってもうちのクラスの王子様なんですからね！」

「ははっ。気を使ってくれなくてもいいよ。俺もサッカー部で玲人くらい体格恵まれてたらっていつも思うもん」

「私からしたら、知らない人から写真とか強請られて、平然と楽しく一緒に映っちゃう図太い神経が一番羨ましいけどね・・・」

「「「「それは確かに」」」」

皆の声が揃ったので、せりかは、噴き出してしまった。

本庄がせりかにだけ、こそっと「何か俺の事を話した？」と聞くので「この間の教えてくれなかったから玲人に聞いた時に先生の事もはなしたけど」と答えるとはぁーとタメ息をついた。

「せりがお世話になってますって彼に言われたんで、何かと思ったけど」

「引かないでね？私も他に聞ける人居なかったから聞いちゃったんだけど、玲人にも先生に感謝しろって言われて私も反省してるから」

「何こそこそ内緒話してるの？」

美久が入って来たので、玲人のことを説明してたと言ったら直ぐに納得してくれた。親し過ぎる間柄に説明が必要な事が、今迄も少なく無かったからだった。それに嘘は言っていないから後ろめたさもなくていい。

それから5人で展示物を見てまわったり、お化け屋敷に入ったりした。しかし、学生の造るお化け屋敷はやはりあまり恐く無かった。せりかと橘は内心、来年はお化け屋敷はなしだなと思った。気が早いが、委員になる可能性が高い以上、見る目が粗を探してしまうのも事実だった。

そうして文化祭1日目が終わった。

6

とうとう文化祭二日目のせりか達の劇の上演日になった。

せりかは、緊張で朝から食欲も無かった。せめてもの救いは相手役の王子様が、実際にも陰ながら憧れている王子様という一点につきた。

何をしてもそつなくこなし、面倒事も厭わない橘は、人間としてもせりかの理想形だった。あんな風に自分もなれたらいいと思う。橘の傍にいられる権利を手に入れたいと迄は、思い詰めた想いではなかったが、彼が、笑いかけてくれたり、話したり出来た時には、少しハッピーな気持ちになれる。なんだか片思いっていいなと最近のせりかは思ってしまっていた。今迄にそういう感情を持った事が無かった為、こういう恋の仕方もアリかな?と思う。なにも報われなくてもいいのだ。報われれば面倒な事も一緒に付いてくる。本人とも合わないところも出てくるだろう。せりかにとっては、今が一番の最良で幸せな状態だった。故に、いくら美久や弘美にせっ突かれても告白する気なんてさらさらない。『誰かに取られちゃうわよ』なんて美久達はいうけど、その時は、あの橘が選んだ相手なら納得出来そうだった。今迄、毎日小さな幸せとときめきをくれる存在の橘に感謝すらしていた。それは彼に特定の彼女が出来たとしても寂しくは思うと思うが、無くなってしまう思いではないと思う。

今日はそれだけ思い入れのある相手との共演なのだから、失敗は許されない。セリフもダンスも完璧に覚えた筈だったが、それでも何度も台本を見直してしまっていた。当の本人の彼は、『間違っても分からないから大丈夫だよ。俺もその時は合わせるから慌てないで落ち着いてね』と相変わらず完璧なフォローぶりだ。しかし、立場

は相手も同じ事を思えば相手にばかり甘えていられない。自分も今日は完璧でありたいと思うと余計緊張して来てしまうのだった。

家族席チケットは二枚迄で、玲人の両親の分も考えると足りなかったのだが、美久が親が来る予定がないからと二枚融通してくれた。弘美もそれを知っている為、ケーキとジュースのお礼にと玲人に二枚渡してといって渡してくれた。玲人は、もしかすると美久達が融通してくれる事を分かっていて先日過剰な御馳走をしてくれたのでは無いか思う。今時、あまり親など文化祭になど来ない。それを思えば、一番近しい二人がチケットを譲ってくれるというのを予想したとしてもおかしくはない。

皆で見に来られるのは恥かしいのだが、人生で多分、初めてで最後の主役だと思うと嬉しそうに玲人の小母さんと来る算段をしている親を止める気には成れなかった。

橘が王子様役だと知れるや否や、五組の劇は注目の的だった。橘もサッカー部の先輩達に強請られてチケットを融通してもらっていた。普段同じクラスでも無ければ見れない橘の王子姿を見たいと思うのは当然だろうと思われた。しかし、サッカー部の先輩は、もちろん橘が見たい訳ではない。橘と玲人にガードされているお姫様のせりかを見れるのを楽しみにしているのだが、鈍いせりかに分かるはずも無い事だった。

用意した席が足りず、立ち見客も多い中、「一年五組版シンデレラ」が幕を開けた。

一般的なシンデレラは、舞踏会に行きたくても、行けなくて泣いている所に、魔法使いが現れていドレスや馬車や、靴を用意してくれるが、五組版シンデレラの性格はまるで、せりかの様であった。

義理の母と義姉達とは犬猿の仲であるが、伯爵家の爵位の継承権はシンデレラに有り、実質家の中を、取り仕切るのはシンデレラであった。

「おかあさま、お義姉さま、無駄遣いはお止しになって。どうしても舞踏会に行きたいのでしたら、私の言う事に従って頂けなくてはお許しできませんわ」

地味な灰色のドレスを見に纏ったシンデレラは、きつくそう言い放った。

会場が、高飛車で気の強いシンデレラに笑いが漏れた。

「まずは、ドレスは、私が作って差し上げるから、服飾の業者などお呼びにならないでね。今の時期は高くされてしまいます。宝石類は、新たに安物など、お買いに成らずとも、伯爵家が管理しているなかでドレスに合う物をお借ししますわ」

「わかったわ。シンデレラ。あなたの創るドレスは、売っているものより素敵だもの！」

義姉達は嬉しそうに、シンデレラの言う事を聞く。義理の母も渋々、頷く。

「それから、使用人を遅くまで待たせる訳には行きませんから、十

二時までにはお城の門のところに帰ってらしてね。それより遅かったら置いて行きますから」

小姑のようなシンデレラだが、家の女主人としての威厳と慈愛に溢れていた。

其れからは何枚ものドレスに、ミシンを踏むシンデレラの奮闘場面となり、舞台上の健気なシンデレラに基本的に努力家の多い、この学校の生徒の共感を呼ぶ。

「お姉さま達の分は、出来あがったから先に行ってらして下さい。私は、後から行きます」

義姉達は、シンデレラ作の趣味の良いドレスに身を包み、まだ会った事もない王子様を思い、夢心地で出掛けていく。

シンデレラは一人残って、ミシンを踏み続ける。

そこに、お決まりの魔女が登場する。周りの噂で、継母達にいじめられて、舞踏会に行けないであろうシンデレラを助けに来たのだが、丁重にお断りされてしまう。

「わたくし、お父様にタダで人様からものを貰ってはいけないと教えられていますの。私もそれは、道理に適った事だと思っていますので、すみませんが頂けませんわ」

「でも舞踏会にいけなくなってしまいますよ」

魔法使いは必死に言い募る。実は伯爵と共に登城するシンデレラを見染めた王子からの使いだったのだ。喜んで来てくれると思ってい

た為、困って唸ってしまう。

なんだか困ってしまった魔法使いを見かねたシンデレラが、魔法使いの懇願を受け入れる形で魔法に掛かる。

魔法使いが杖を振ると、ぱぁーと今迄の灰色のドレスが紅色の美しく華やかなドレスに変わる。皆、魔法のシーンは無いと思っていた観客は急な手品のような早変わりに驚きの声を上げた。

すこしスモークをその後焚いて、大振りなイヤリングやネックレスと巻き毛のウイッグに華の髪飾りを手早く付けると観客からは、拍手が沸いた。まだ劇の中盤なのだが…。

馬車に乗る陰で、口紅やアイシャドウが施される。

お城の広間に立った、シンデレラの美しさに、フロア中の皆が見惚れるという設定だが、客席も先程の早着替えを見ている為か、キラキラのシンデレラに息を?む。

それからは、見せ場のワルツである。待ちかねた王子様が駆けより、皆でワルツを踊る。一番の見せ場である。

優雅に踊る群舞に客席からは、溜め息が漏れる。華やかでいて統制の取れた動きは圧巻であった。王子様の橘の美麗さも際立った異彩を放っており、父兄の間でも、滅多に見れない、本当に物語に出てきそうなキラキラ王子に会場がどよめいたのがはっきりと分かった。

流石の現実主義なシンデレラも美し過ぎる王子に言い寄られてアタフタしてしまう。これは演技の設定だが、演技だと分かっていても

橘の甘い言葉にアタフタしてしまうのだから、脚本がありがたい。夢見がちな女の子ではなく、現実的な子を落とす、かぐや姫のような美しさを作るのだと言って、演出の荒井から、橘には毎日の肌の手入れの指示や、眉を整えられたり、軽く舞台用に化粧まで施されていて、本当に、月に帰って行ってしまいそうな美しさと色香を湛えていた。そして、王子はシンデレラに婚約を申し込むのだが、驚いたシンデレラは、会って間もないのに、そんな事を急に言われても…と躊躇する。全くもって現実的である。普通、そんな簡単に人生決められるものではない。そこへ十二時の鐘が鳴ってしまう。なり終わらないうちに、シンデレラは門迄走って、屋敷に戻って行ってしまう。王子さまは追い掛けるが、ガラスの靴だけが、残されていて、この靴の持ち主と結婚すると言い張り、一応、皆にチャンスがある様に演出をする。結婚もドラマティックにしなければ、国の祝い事も効果が、半減になってしまうからだ。こうして、シンデレラの所まで辿り着くのは夜になってしまう。

月夜に、現れた王子に今迄の経緯を聞いたシンデレラは、王子の聡明さに惹かれて、結婚を了承する。そして最後のキスシーンである。前の時に、ぱっちり目を開けたままのせりかに、本庄が、顔が近付いたら、目を閉じる様にアドバイスしてくれていた為、せりかは顔の角度と立ち位置に気を使いながら目を閉じた。しかし、目を瞑ると平衡感覚がおかしくなる事には気が付かなかった。少し揺らめいてしまうのを如何にか橘が支えてくれる。もうすぐ幕が下りると思った所で、事故は起きた。どうしても傾いてギリギリで留まっていた唇が、かすってしまったのだ。橘もせりかも内心はパニックだが、周りには気付かれていない。元々、そう見える演出なのだから。せりかは橘に直ぐにでも謝りたい気持ちになったが、劇を最後まで演じ切った。

会場からは、割れんばかりの拍手が起こり、カーテンコールに主役

のふたりで出る事になった。二人で出て行くと興奮したお客さんから拍手と歓声が起きた。劇が成功した事を感じ、せりかと橘は深々と頭を下げて、また幕が下りた。

7

橘くんに、『ごめんなさい！！私の不注意で本当にごめんなさい』とメールを打とうとしたけれど、送信は出来なかった。直接言わなければ謝罪にならない気がしたからだった。明らかに私がよろめいた為の事故であちらも、もしかしたら初めてかもしれなかった。女の子の方だけが、そういう事にロマンを持っているわけでも無いだろうと思う。よっぽど異性との付き合いが雑な人ならともかく、橘はそういうタイプではない。玲人に相談してみようかと思うが、相手のプライバシーにも関わる以上、友達でもある玲人に話してしまうのは、やっぱり悪いだろう。やはり、二人きりになれる時に、直接謝るべきだろう。

一年五組版シンデレラは、全体の催し物部門で最高ポイントをゲットして、（投票箱が設置されているのと、お客さま動員数と先生の投票数で決まる）一年のクラスとしては異例の最優秀賞を獲得した。観客動員数の多さもさる事ながら、内容に随分の脚色があったが、それが持ち点数の高い先生方に、高い評価を得たようであった。少し、道徳的なところを説いていると思われたらしい。演出の荒井にその意図があったかは分からないが、皆がとても喜んだのは間違いなかった。副賞は驚いたのだが、生徒会が用意してくれたカチューシャだった。いくら、今流行っているからっていっても装飾の類が、商品って大丈夫なのだろうか？

気にしていると色とりどりのリボンの付いたものから、レースのものまでいろいろあって、皆で各々、好きなものを選ぶ。せりかは、茶色のシンプルな物を選んだ。男子は使わないし、どういう風にな

るのかと思ったが、姉、妹、彼女、友達、もしくは、これにあやかって好きな子に告白して渡すという選択肢を生徒会から提案されると、会場がどっと沸いた。はやし立てて、「がんばれよ～！」という声が聞こえてくる。きれいな透明な袋にリボンで可愛く包装されていて、如何にもプレゼント用だった。男の子達も誰の顔を思い浮かべながらかは、謎だが、結構真剣に女子と共に選んでいる様子は可笑しくも微笑ましくもあった。やはり、戦利品である以上、普通に買ったものよりも嬉しい。

女子は全員その場で装着して、皆で似合うとやんやと褒め合って、勝利の美酒に酔うという感情に近い気持ち良さを味わった。皆がそれぞれ、いい仕事をしたという満足感で一杯だった。

生徒会の片づけの人がちらほら見えるが、他の人達は大体帰ったが、五組の皆で、帰り難く、輪になって騒いでいるところで、それは起こった。

橘が、せりかに近づいて来て、目の前に真っ青なリボンのカチューシャを差し出した。早くもお友達にくれる気になったのか？と誰もが思ったが、その後、橘の発した言葉が、それを裏切った。

「椎名せりかさん、俺と付き合って下さい」

はぁ～？？生徒会推奨を早速、使いますか？みんなビックリです。でもその場のノリの類で済ますのが、ここは得策だとせりかは考えて、にっこりと「喜んで」とカチューシャを受け取ると、皆からは拍手が起きた。冷やかす者は誰も無く、普段から仲が良く、主役も演じ切ったツーカーの学級委員二人のノリの良い余興だと思われたようだ。せりかの軽い快諾の言葉が、そういう風に思わせる要因だった。普通は、皆の前で告白されて平然と即座に返事したりなんて

しない。慌てたり、テレたり、狼狽したりするのが多分、正しい反応だろう。余興にも盛り上がったところで、後日打ち上げをする事になり、皆で家路についた。

わらわらとクラスの皆と美久や弘美と校門まで行くと玲人が待っていた。どうやら両方の親が、近くの喫茶店で待っていて皆で食事でもしようという事に決まったらしい。二人に簡単に説明して別れて、玲人と二人で駅とは反対方向に歩き出した。それを見たクラスメイト達は、先程の二割位残った疑念も晴れたようだった。橘も近くにいたが、玲人が親しげに手を挙げて向こうもそれに応えて手を挙げた。どこから見ても、先程の事を真実、真剣なものだったと思うものは、これで限りなくゼロになった。

せりかは、自分の所為で唇がかすってしまった事を謝らなければならないが、まさかその事で、責任を感じて言いだしたことじゃないよね？と橘にしては笑えない冗談に不可解なものを感じていた。いずれにしても後日、橘と二人で、話合わなくてはならないだろう。

8

「どうしてあんな所で告白なんてするんだ？橘らしくないよ」

本庄が怒りを含んだ口調で橘を責めた。

「二人きりでしたら断られるもん」

珍しく酷く子供っぽい事を言う。

「それは、仕方無いだろう。向こうの気持ち次第の事なんだから、断られたらすっぱり諦めるしかないだろう。ストーカーか？お前は？」

「そうだよね～。でも諦めたく無いって思ったら、あの時、すっごくチャンスだと思っちゃったんだよね」

「お前みたいなやつが正々堂々と行かないなんて超意外！！大体断られるって決まっては、いないだろう？」

「またまた～、本庄だって１００％うまくいかないの分かってるくせに」

「それは・・・」

本庄は言い淀んだ。最近仲良くなったせりかの性格が分かってるだけに、おそらく丁重にお断りされてしまうだろうと思う。たとえ、この超美形で中身も言う事なしの橘であっても無理だろう。本庄の見るところ、せりかはひどくアンバランスな人間だ。人としてはし

っかりしているが、女性としては、とても幼いように思う。その落差が激しく、少し危うく見える。その上に、あの幼馴染の玲人の存在が彼女の中で大き過ぎて、恋愛関係ではないといっても、二人の中に割って入るのは困難に思えた。

「やっぱり、分かってるよね。だから、少し思いつめ過ぎて暴走しちゃったんだけど、後悔はしてないよ」

「本当に思い詰めた人間が、自分で思い詰めてるって言わないだろう！！」

「そうかなぁ～自分では、ここのところ結構キテたつもりだけど。劇の練習とかでいつもより接触時間が多いから、そうするとまた、いいところ発見！！ってなっちゃって嵌まってちゃうんだよな」

「お嬢は、確かにいい子だと思うよ。素直でかわいいし、クラスでも結構人気あるけど、お前と高坂で囲んでるのに特攻する無謀な奴なんていないんだから、もう少し余裕持ってゆっくりいけよ。じゃないと椎名さんにとって迷惑でしかなくなるよ」

「すごい高度テクニックでスル―されたもんな～」

「そうだな。校門のところに高坂が居たのも痛かったな。あれで、もう完全に無い事になったな」

少し、憐憫な目で橘を見ると、苦笑いを浮かべたので、こちらが思っているよりはショックを受けているのだろうと思った。

「これからどうする気？」

「どうしようか？相手の出方次第かな？」

「距離置かれちゃうんじゃないの？多少、警戒心持たれちゃってるだろうし」

「それは、そうだけど、あっちから近い内に二人で話す機会を作ってくれる筈だから」

「スルーされてるんだし、きっと、なるべく普通にしつつも二人きりでは話してくれないんじゃないかと思うけど」

「本当に内緒だけど、本庄にだから言うけど、実は劇のキスシーン、とちッて本当にしちゃったんだよね」

「お前、まさか！！」

「誓ってわざとじゃ無い！！どちらかというと椎名さんがよろめいたの支え切れなくてかすっちゃって、超パニックだったから。もちろん少しは嬉しかったけど、向こうには、ものすごく申し訳なさそうにされてて、めちゃくちゃ謝られそうな気配でさ！もう、悲しくなって来たってわけ！だから、そのおかげで話す機会は椎名さんから作ってくれるのは間違いないんだよ。彼女は謝罪はスルー出来ない性格してるから」

「じゃあ、天下の王子様のお手並み拝見ってトコか」

「茶化すなよ。俺だってどうしたらいいかわからないよ。断るスキルしかないし」

「うわー流石、モテル奴しか言えないセリフ来たーって感じだな」

「お前だって結構断ってんの知ってるんだからな。俺より、数多いんじゃないのか？」

「どこの情報網？コワー！俺は、落とす方のスキルもあるから心配無用なの」

「俺より大分性質悪じゃないか！落とすスキル、だったら伝授してくれ！！」

「普通仕様はあるけど、お嬢仕様は悪いがない。あれは、レアだから。悪い事言わないから、お前の為に諦めて別の人にしとけって。もう振られてるようなものなんだし。他の子ならよりどりみどりだろう？どうして椎名さんになっちゃうかな～？もしかしてあえて無理な山を登る人達みたいに、ややＭだったりするわけ？」

「キツイこと言うなよ。別にそういう趣味趣向は無いよ。しかもまだ、振られてないし。強いて言えばＯＫの返事貰ってる・・・って言ってて自分で虚しくなってきた」

「悪い。俺も言い過ぎだわ。ツッコミどころ満載なんでついつい、いつも言葉が過ぎちゃうんだけど、お嬢は全然付いて来れるからスゴイんだよ」

「謝ってるのに、傷に塩塗ってどうするんだよ！そんなの分かってるよ。いつもお前達の会話、テンポ良くて羨ましいと思って見てたから」

「乙女だね～。まあ、協力はするから。相談はいくらでも乗るし、なんなら、俺からもお嬢にお勧めしとくから」

「有難う。お前って口固いし、しんどい話も深刻にならなくて済むから実際は助かる」

「やっと分かってくれたみたいで良かったよ。お嬢の方からも相談される事多いから、うまく行くように俺も力になるから頑張れよ」

その日の夜、橘に、せりかから『お話したいことが有るので時間を作って貰えませんか？』というメールが来たので、代休日である明日に会う事になった。

9

せりかは悩みに悩んでいた。玲人に今迄は相談出来ていた事が出来ない。それだけの事で、こんなにも駄目になってしまう自分は、今迄どれほど玲人に依存して来たんだろうかと思う。今迄は、兄弟の域がこのぐらいだと思った。自分達は居ないから分からなかった事だけど、普通の兄弟がどんなものか少し周りが見える様になると、大分違う事に気付き始めていた。

少し玲人との関係も考えなくては行けない時期に来ているのかもしれないとせりかは思った。

カチューシャが二本ある。一本は、もちろん橘に貰った物だった。皆の前でなく、普通に友達としてくれたとしたら、間違いなくせりかの宝箱行きだった。今でも嬉しくない筈は無い。橘はせりかの憧憬の対象であり、たぶん初めての恋する相手だと思う。しかし、皆のいう恋愛感情と少し噛みあわない・・。

橘に対して、会いたいとか、会えないと寂しいとかは思った事は無い。ただ会えると純粋にとても嬉しい。随分、消極的で受け身な気持ちだと自分でも思う。到底、恋愛感情とは遠く思えるが、自分の中では、芽がでたばかりで、どんな花が咲くか分からないといった期待の気持ちもあるのは確かだ。時間が経てば、或いは、日差しを浴びるきっかけがあれば、大輪の花が咲く可能性がある。今迄は、その小さな芽でさえ、存在を感じた事も無かったせりかにとっては枯れて欲しくない大事な気持ちだった。自分の中だけで大事に取りだしては観て楽しんでいたいというのが本音だが、恋愛は自分一人

でするものでは無く、相手があって成り立つ最たるものだ。橘に好意を寄せられた場合、どうしたらいいのだろう?好きな人に対する気持ちとしては、大変失礼極まりないが、一番に思うのは、面倒だという事である。今迄と環境が変わってしまう事の恐れや、あの、美しい橘の隣に恋人として並ぶ事を考えただけでも、前世でどれだけの悪い事をしてしまったのかと思ってしまいそうになる位の苦行である。こんなに酷い事を思っているだなんて、知ったら、橘だって百年の恋も一遍に冷めるだろう。

友人に悩みを相談する事は決して悪い事では無いと無理やり思い返して本庄に携帯で電話を掛けた。自分はやはり、こうして誰かに頼らないと生きていけないのかと嫌になるが、本庄は、今日の出来事を良く知る人物であったし、今迄にも、同じ歳とは思えない、人生経験の豊富さを感じる人でもあり、自分との着眼点の差に唸らされてきた経緯もある。やはり、今日の橘の告白がどう映ったのかを聞いてみたい欲求に負けてしまった。

「もしもし、椎名です。今、時間大丈夫?」

「お嬢じゃん。今日の告白事件の相談?時間あるから聞くよ」

相変わらず察しが良くて、こちらが一か二位言えば、十まで分かりそうな人だと思った。

「そうなの。今日の事、先生はどう思う?やっぱり本気だよね…」

「それは、間違いなく本気だろうから、真剣に考えてやった方がいいんじゃないの?」

「でも、あの橘くんが、みんなの前で、告白なんてどう考えても納得できないよ。そんな浅慮な人じゃないでしょう」

「あれは、アイツが悪いと思うけど、みんなの前で言っちゃえばこそこそしなくて済むし、付き合う事になってもやっかみも減るから、つきあうなら悪い方には出ないと思うよ。唯、断る時は最悪だけどね。お互いに」

「じゃあ、橘くんは断られるって思わなかったって事だよね？分からなくもないけど、万が一って事もあるんだし。しかもあの人の普段の言動考えてもそんなに自信家な印象は受けないんだよね」

「逆に、自信無いから、あそこで言ったんじゃないのかな？断れなかったじゃん。現に」

「無理やり断れない状況にしたって事なの？それこそ、橘くんに似合わないよ」

「そうそう。結構、思ってるより、腹黒で策士なんじゃないの？普段の爽やか君ぶりを知ってると引くよな～？」

「もし、そうだったら、逆に安心するよ。普段のパーフェクトな方が実のところ、引いてた所あるもの。もちろん尊敬もしてるけどね」

「へぇ～！結構分かってるねぇ。流石お嬢だな。普通の女子達とは違うな。俺も、やっぱりそれは、そう思うんだよ。腹が少し黒いくらいの方が親近感湧いたよ」

「ちょっと！！勝手に腹黒認定やめてよ。橘くんは、普段が非の打ち処が無いだけで、この位の事でそこまで言うのは罪悪感を感じち

ゃうよ。少しくらい落ち度がある位の方が、こっちも安心するかな～位の気持ちなんだから」

「それで、お嬢さんは橘くんの事はどう思ってるのかな？」

「それは、たぶん、好きだと思うけど付き合ってって言われたら、断ると思う」

「好きなのに断るなんて勿体なく無い？」

「言っても軽蔑しない？」

「しないよ。大体分かる。面倒事嫌なの、ごめんなさい。平和に生きたいの。ファンみたいに観てるだけの方が楽だし、高坂との関係もギクシャクするとそれもまた面倒だし、とか思ってるんだろう？」

「すごーい！！先生実は人の心まで読めるみたい。今言った、人道的にどうなの私？って言葉そのまんま思ってる。酷過ぎで言うの躊躇ったけど」

「普段のお嬢の考え方とか、状況とか考えて、軽蔑しないか？と聞かれたら、その辺だろうとは見当が付くよ。それに相手が橘だったら、よっぽど自分が奴に相応しいとか思ってる人間でも無ければ、大体は思うんじゃないの？橘がそういう人間を選ばないとは思うけどね。好みじゃないだろう？そういう見当はずれの自信過剰な奴」

「みんなキャーキャー言ってても、いざ、付き合いましょうってなったら、意外と私みたいな反応になるって事ね。なんだか橘くんが、気の毒になって来た。でも、あれだけ綺麗な人だと隣歩くだけで勇気はいるんだよね。『なにあの女、釣り合って無いじゃん』みたい

な目で見られるしね。玲人で少し、経験済みなもんで、それより数倍かっこいい橘くんとなんて考えただけで無理そう・・・」

「へぇー意外!!何倍も橘のがかっこいいと思ってるわけだぁ〜。奴が聞いたら泣いて喜ぶね」

「美久には玲人の事は見慣れてるからだろうって。まあそういう事も有るんだろうけど、入学式の時は、真剣に驚いたよ。今日の劇にしたって、うちの母だって王子様超イケメンって騒いでて玲人が友達だって話したら、連れて来て〜!近くで見たいって玲人のお母さんと一緒に言うんだよ?」

「それは、それですごいね。高坂のお母さん迄そんなんじゃ何だか魔性な感じしてきたな。俺の方が、橘にマヒしてるのかも。毎日の様に見てるし、性格知ってると、外見はあまり気にならなくなるもんだしな」

「そうでしょう?明日、橘君と会う約束してるんだけど、そんな酷い事いえないし、断ったらそれもその後、気まずいでしょう?」

「今迄、断ってるのは、気まずくないんだ?」

「え〜?!今迄、断る事なんてしてないよ。告白されたの初めてだもん。だから困ってるんじゃない」

高坂がいたからだというのは分かるが、威力がすごい。裏で排除してきただろう事が覗える。そうなると最大のライバルも本気だという事になる。気付かないのは鈍いせりかだからだろう。人の事ながら、本庄も頭を抱えたくなって来た。

「あのさー、何も結婚してって言われてる訳じゃないんだし、好きなんだったら、思ってる面倒事も半分位だけ白状して、それでも向こうがいいっていったら付き合い方もお友達レベルからお試しでしてみたら？両想いで断るなんて勿体ないじゃん。見映えの問題はお嬢レベルなら大丈夫だから、それは俺が保証するからさ。高坂の時みたいなのは、純粋に嫉妬だから、全然無いとは言わないけど今はみんな現実的な近場の彼氏作って来てるじゃん？特にこの文化祭で増えてるし、人の事なんてあまり気にならないと思うよ。みんな少しは大人になってるし、自分の恋愛事のが忙しくて人の事迄あまり関わってこないんじゃないかな？」

聞いていると八方塞がりになりそうだったので、少し、捲し立てるように自分のポジティブ方面の意見を言ってみた。高坂については、そこは分からないのであえて触れないし、触れると迷路に入るので、あえて無視した。

「そうだよね。少しは、本心話さないと悪いよね。慣れないのを言い訳にして自分だけいい子でいたいと思っていたかもしれない。ちょっと反省しちゃう。それで、橘君がどう思うか分からないけど言ってみる事にする」

「そうだよ。一人で考えてもラチあかないから、相談するつもりで話してみれば？それから妥協点みつけてもいいんじゃないかな」

「うん。有難う。今迄、一人相撲とってたみたい。相手がある事なのは分かってたんだけど、他の友達に相談しても惚気に聞こえちゃうし、相談誰にも出来なかったんだよね」

「じゃあ、明日はうまくいくといいな？色んな意味で・・・」

「うん頑張ってみるね。どんなになっても報告するから」

せりかが、そう言って電話を終えた。本庄は少し、罪悪感が湧いて来た。一番肝心な玲人の事をすっ飛ばして話を進めたことだ。其処を突くと膠着しちゃうし、とは、思ったが、もしこれで橘とせりかがうまくいったら、玲人には相当恨まれてしまうだろう。

とにかく今の時点では、二人の問題なわけだし、友達の橘に肩入れするのは仕方がない。本庄にとって、せりかも大切な友達なのだ。珍しく男女の垣根を越えた、友人の力になりたい。将来、もしも修羅場になった時には、せりかの一番の味方でいようとそれだけは強く心に決めた。

10

話をする時間を貰いたいと言ったのは、せりかの方なので、時間と場所は橘にお任せした。お任せするとは言ったけれど、橘君のおうちの前に着いた時には、『いきなりお家ってどうなんでしょうか？先生～！！』と居ない本庄に向かって心の中で雄叫びをあげた。

嫌じゃなければ、うちに来て欲しいとメールを貰った時には、動転したが、色々と、人目を憚る話に成る事は確かなので、その配慮だろうとは思ったが、御家族だっていらっしゃるだろうし、（居なくても問題だけど）とっても緊張してきた。

一応手作りのアップルパイを多めに作って手土産にした。昨日はリンゴを煮たり、冷凍パイ生地を買ってきたりと急に忙しくなった。後は、たいして手間もなく、失敗もないので、簡単で持ち運びも楽な、せりかの一押しのお菓子だった。たまに学校で美久や弘美とも食べている。親には友達の家に、文化祭の打ち上げの打ちあわせに行って来ると伝えた。、本当の事を言って、橘だと分かったら、こっちに連れて来いと言われるのは間違いなかった。きっと玲人や玲人の小母さんまで来て落ち着いて話など出来ないだろう。

最寄り駅まで迎えに来てくれると言われたが、駅から近く、降りて右にずっと歩いて数分という、分かりやすい場所だったので、万が一分からない時は電話すると言う事にしてもらった。

橘の家は、白い三階建のお家で、玄関には綺麗な、名前は分からないが、色とりどりな花が咲いていて素敵だった。聞いた事は無かったが、きっとお母さんがガーデニングが趣味なのだろう。

少し、逡巡したが、約束の時間も来ていたので、観念してインターフォンを押した。

すぐドアを開けてくれたが、お母さんが、出て行こうとしているを止めている橘の声が聞こえて中々、出てこない。流石に諦めたのか二人で出て来ていらっしゃいと迎えてくれたけど、それまでの攻防戦が聞こえてきていたので、微妙な笑顔に成ってしまって、二人にも伝わってしまった様で、二人ともお恥ずかしいところをお見せしてと恐縮されてしまった。せりかは学校とは全然違う橘を見れてここに来た理由も忘れて、心の中で、美久や、玲人にも見せたい！！かわいい～！！と思ってしまった。お母さんも思った通り、予想を裏切らない、美女である。せりかの母と同じ位の歳とは到底思えなかった。しかし、見かけは相当美女なのだが、中身が気の良いおばちゃんで、どんどん話し掛けて来てくれる。

通されたリビングで、お土産のアップルパイを、とても喜んでくれて小さく切ったのを口に早々と入れて、「おいしい、林檎、紅玉でしょう?この酸味がいいのよね！」と褒めてくれた。とても気さくなお母さんで安心した。下のリビングで声がしたからか、階段から誰か、降りてきた。それを見て、橘は眉を顰めた。

「おっ！！シンデレラちゃんじゃん。俺、忍の兄で、一樹(いつき)です。よろしくね♪」

「椎名せりかです。よろしくお願いします。今日は、お邪魔してしまってすみません」

「イヤイヤ、来てくれてありがとうね。昨日のシンデレラ良かったよ～！超かわいかった。途中から忍見るの忘れちゃったもん」

「見て下さったんですね。お恥ずかしいです」

「俺もあの高校出身だから、後輩から弟が主役やるって聞いたから飛んでいったんだよね。こいつ全然、言わないからさ」

橘は、その言葉に苦笑いを浮かべただけで何も言わなかった。男の子がお家で王子様をやる事を自慢するのは、幼稚園迄の話だろうと思う。正直にいえば、せりかも親にシンデレラは観に来て欲しく無かった。せりかも橘の兄の不平の言葉には、微笑を返しただけだった。

おにいさんは、これから、出掛けるらしく、お母さんに私のアップルパイをラップで包んで貰っていた。

「これ、アップルパイのお礼にあげる。友達がバイトしてて、貰ったんだけどね。良かったら、忍と行ってやって？」

そう言って、八景島シーパラダイスの券を二枚くれた。結構高いものなので、遠慮しようとしたが、橘君と行くのを嫌がっている様にも取られてしまうので、笑顔でお礼を言って頂いた。

お母さんがアップルパイと紅茶を御持たせですが、と言ってお盆に載せてくれた。どうやら、これから橘くんの部屋に案内されるらしい。

お盆は、橘君が持って、三階だからと言い、先を歩いていった。小母さんに軽く頭を下げると、「ゆっくりしていってね」とにっこりと言ってくれた。

橘君の部屋は、雰囲気が、驚くほど玲人の部屋と似ていた。サッカ

ー関連の雑誌が積まれていて、本棚には参考書がびっしりでボールがネットでつるされている。六畳程の部屋に、ロフトが付いていた。

小さなテーブルが置かれていてそこに橘は、お盆を降ろして、手際良く、せりかの前に紅茶とパイを置いた。自分のも置き終えると、ふぅーと息を吐いた。どうやら緊張しているらしい。

「アップルパイありがとう。気を使わせてしまってごめんね。俺も気が付かなくて・・・母と兄も無遠慮で、なんかいろいろとごめんね」

「ううん。全然そんな事ないよ。お母さん、すっごい美人なんで驚いちゃったよ。気さくな感じで大分ほっとしたけどお兄さんも優しそう。シーパラの券ホントに貰っちゃっていいのかな?」

「貰い物なんだから気にしなくていいよ。押し付けていった様なものだし、紅茶冷めるからどうぞ。俺もアップルパイも頂くね」

「うん。じゃあ頂きます」

「この紅茶アッサム?美味しい!茶葉凝ってるんだね~」

「母は、そういうの好きみたいだね。アップルパイも美味しいね」

「ありがとう。そんなに手間掛かったものじゃないから、あまり褒められると恥かしいんだ。パイは冷凍のでホントに簡単なの」

「今日は、こっちまで来てもらってごめんね。他に思い付かなくて、

なんだかその所為でいろいろ手間掛けさせちゃったね」

「そんな事ないよ。少し緊張したけど、こっちから時間作って貰ったんだし、謝らないで。私が、橘くんに謝りにきたのに・・・」

「何を謝るの？劇の事なら、どちらかと言えば俺が、謝るべきだと思うけど。普通は男の方が、謝るものじゃないの？」

「そんな事ないよ。ホントにこめんなさい。男の人だってそんなに軽いものじゃないと思うの。あの・・・もしかして、初めてかもしれないし…やっぱり大事にしたいものじゃないかと思うんだよね。それが、あんな事故じゃ、申し訳なくて」

「椎名さんには、俺は、随分女の子に慣れて無いように見えるんだね」

「ごめんね。失礼な心配だよね。でもずっとサッカーやって来て、勉強その後、頑張ったって言ってたから、彼女とか居なかったかなーとか勝手に思っちゃってごめんなさい。高校でも時間が無いからって言って断ってるじゃない？」

「…よく知ってるね。理由まで」

「引かないで聞いて貰いたいんだけど、告白してくるっ子って全員違うクラスの子でしょう？だから、うちのクラスの子は結構、橘君情報の提供を求められるのね。みんな、答えないで適当に流してたんだけど、五組で独占する気？！とか訳分からない方向に行きそうになって、みんなで個人情報を悪いとは思ったんだけど、知ってる範囲の事は答えるようにする様になったのね。一学期の初め辺りから。そうすると逆に聞いてないんだけど、その前にいろいろと聞い

て来てた子が、振られちゃったって言ってくるのよね。報告みたいな感じなのかな?本人からすれば」

「・・・・・・・・・」

「ごめん。びっくりするよね。こんな話。でも、みんなの事責めないで貰いたいの。一緒のクラスの子は、橘君がそういう事嫌がりそうだって分かってるから、出来るだけ話さないようにしてたんだけどね。最初はホントに知らないし、知ってる事でも知らないで通してたんだけど、段々、それで通らなくなるでしょう?みんなが私のところに相談に来て、話し合ううちに、最終的に話して害に成らない事は話して、住所とかケータイとかメールアドレスみたいな困る物は、自分達も知らないで全員通す事に決めたのね。最後に橘君に知らせるかは意見が割れたんだけど、気分が悪くなるから自分だったら知りたく無いってひとが多くて知らせない事になったの。知らない方が幸せって事もあるよとか、みんな真剣に考えた結果なの。今、私が言っちゃうのもどうなのかな?と思うけど、直接聞かれた場合は、黙ってると裏切られたっていうか、話してくれたらいいのにってきっと思うと思うから、聞かれたら話すっていうのも決まってた事なの」

「ごめん。みんなに謝れるものなら謝りたい!!なんだかうちのクラスの女子ってさっぱりしてて気のいい子が多いと思ってたけど、気の所為じゃなかったんだな。そんなに迷惑掛けてたなんて知らなかったよ・・・なんか俺、歩く人災みたいだよな・・・」

「違う違う!!ホントにみんなは、橘君の事もクラスのみんなも大好きなの!!女子とかは、却って結束固まったし、男子もいい人多いから三年間このクラスだといいのにって言ってて、どっちかっていうと雨降って地固まるっていう感じで、今はみんな慣れもあって

そんなに大変な事は無いんだけど、黙ってるのが少し辛くなってきたから、話せて良かったかもって位のもので。ペラペラ話してたって橘君に誤解されちゃったらどうしようって思ってる子も多いからね。話した方がいいっていう意見の子はそういう意見の子が多かったの。だから、橘君さえ、気を悪くしないでくれたら、誰も迷惑なんて思ってないよ」

「そっか。…有難う。今度みんなにもお礼言っとく」

「みんなすごくいい子で嬉しくなっちゃうよね！今度の文化祭でも思ったけど、力の出し惜しみしないで協力してくれるし、色々、判断早いし、ワルツ踊らなくちゃならなくなった時も誰も不平不満を言わなかったのには感心したけど。でもあれは橘君のお蔭なんだよ。王子様役、一瞬も嫌な顔見せずに引き受けてくれたでしょう？そうしたら他の人達もみんな見習わなくちゃって空気になって、やれる限りの事をやるのは当たり前になったら、劇もすごくうまく行って最優秀賞まで取れたじゃない？なんだかんだ言っても橘君がみんなを引っ張って行ってくれてるんだよ。うちのクラスは」

「そんなに褒めてくれても、椎名さんは俺の事は対象外なんだよね？やっぱり玲人がいるからなのかな」

「そんな事ないよ。入学してから今迄、橘くんの事ずっと好きだったんだもの。カチューシャの告白は嬉しかったんだけど付き合うってなると今迄、付き合った人いないし、急に怖気づくっていうか、それに橘くんとってなるとやっぱり嫉妬みたいのもあると思うし、それはちょっと遠慮したい部分も正直あるんだよね。まして告白されたのなんて初めてだから、パニくっちゃって自分でもどうしていいか分からなくて」

「今迄、告白された事ないの？本当に？！」

「うん。橘君位もてると何回もあると思うけど、普通はそんなに無いんじゃないのかな？」

せりかの事を気に入っている部活の先輩も少なくない。いつも玲人と、のらりくらりとかわしているが、紹介しろと暗に言われているのは間違いない。そのせりかが、今迄に誰からも告白を受けた事が無いというのはどうにも不自然で、なんらかの力が働いていたのを感じられる。いわずもがなでは有るが、玲人が邪魔していたんだろうと思った。しかし、其処まで大事にしているせりかをフリーにさせておいて平気なのものだろうか？実際自分や本庄など、比較的親しくする異性が出来てきている。もしも、せりかが玲人の彼女だったら、もちろん告白など出来ないし、友達としてももう少し距離を開けた関係になるだろうと思う。彼氏に誤解を与える行動は出来ないだろと思われた。せりかは、自分といる事によっての弊害と自分の経験の無さをが、付き合う事の壁の様にいうが、聞いてみると一番の壁は自分の友人でもある玲人の存在だと思った。今迄もなにも考えなかった訳ではないが、この瞬間に確信に変わった。

「あのさー、今の話は、俺が椎名さんの事を思う程は、思われてないけど、好意は存在してて、でも付き合うと周りに色々変に思われたりするのが嫌で、それで初心者だし、抵抗あるって事だよね？纏めると」

「ごめんなさい。あんまりな感じだけどその通りです…」

「じゃあ、学校では一応、内緒にして、付き合いもそんなに気を張

らなくていいから、少し休日出かけたり、それも毎週とかじゃなくていいから。それからメールとか電話とか用事なくてもしても良かったりとかその辺の事でいいから、付き合って貰いたいんだけど。玲人と仲がいいのも今更、ヤキモチ焼いたりしないし・・・」

ここ迄、譲歩されて断れる人なんているんだろうか？隣を歩く苦行問題が残っているが、それは有る程度問題ないと本庄に言われてから少し気にし過ぎかと考えを改めた。どう、答えていいものか悩んで、黙っていると断り辛いのかと心配気な顔で覗きこむ橘の顔が見えた。こんな時でもこちらが気まずくないかを一番に考えてくれる橘に少しは応えたいと思う。

「とりあえず、お兄さんから貰ったシーパラの券で、水族館に行ってみない？私もずっと一緒にいたら、橘くんが思ってくれているような人間じゃないかもしれないし、色々と思い違いもあるかもだし、気が合わない所もでてくるかもしれないじゃない？とりあえず、一回お試しでお出かけしてみる事にしない？お兄さんの好意も活かせるわけだし」

せりかが、そういうと橘は、ぱぁーと顔を明るくさせた。概ね、橘の思った通りになった。付き合ってもらっても、一緒に出掛けて合わなければ、振られてしまう事だってあり得ることだったら、出掛ける機会と考えて貰える余地が残れば結果としては上々だった。

11

橘君のお母さんが、昼ごはんを一緒にと言ってくれるのを、固辞して橘家を後にした。帰りは送ってくれるという橘に、駅までならと譲歩して送って行って貰う事にした。そのまま一人で帰ってしまっては、彼のお家での立場も微妙だろうと考えたからだ。何か、駅前でファーストフードでも食べていかないかというお誘いも、お母さんが五目ごはん作ってくれてるよね？と先程の誘いの時にでた話を持ち出して断った。

ここまで、いろいろお断りすると、仮にも、お試しでも、お付き合いをする前提で、遊びにいく約束をした相手にするべき仕打ちでは無い気がするが、結局は、お母さんの昼食のお誘いを断った時点で、その他の事は必然的に断るしかなくなる。やんわりとそれを告げて、決して迷惑とかの理由での拒絶ではないと言うと、橘は安心した顔を見せた。やはり、関係がはっきりとしないうちに御家族の方と懇意になってしまう事に躊躇いがある事も一緒に付け加えた。

橘は、納得してくれた様で、駅で電車が来るまで、一緒にホームで待ってくれながら今度の出掛ける事について話し始めた。時間はあまり無かったが、その他に、打ち上げは、木曜日になりそうだという話もされた。本庄の親戚が、バーを経営しているらしく、場所を提供してくれるらしい。食べ物と飲み物は持ち込んで、片づけをしていけば、三時間位、貸してくれるという話だった。流石、どこぞの御曹司は顔が広いとは思ったが、ワルツ同様有り難い。今迄なら多分、本庄もそういう協力をしない少し冷めた感じの人だという印象だったが、いい方に変化が出て来ているように感じる。この短い時間に出来る限りの必要事項を話し合って電車が来たので、橘と別れた。一本電車を遅らせても良かったのだが、そうすると家で直ぐ

に帰ってくると思っているお母さんに多分、冷やかされてしまうだろうと思った。彼のお母さんに、お友達はよく遊びに来るのだが、女の子は珍しいから是非とも一緒にご飯を食べたいと言われた事でそう感じた。そうすると、お兄さんもあまり、彼女とかはお家に呼んではいないという事になるんだよなぁと思うと今回のお呼ばれは、結構レアな事では無いかと今更ながら、どうしようも無いが、どうしよう！という気持ちになってしまう。

ひとり、帰りの電車で赤くなったり、青くなったりしたが、彼が困るだろうだけで、直接せりかに被害が来る訳ではない。しかし、最初の玄関での親子の攻防を思うと橘は、やはり、せりかを呼んでしまった為に、いらぬ苦労を強いられたような気がする。

実際は、計画的にでは無いが、お兄さんに貰ったシーパラの券でデートする事になったり、お母さんに会ったりお部屋に入ったりした所為で、せりかの橘に対する認識が友人＋αになったのだから、橘の作戦勝ちと言える結果なのだが、せりかにはそれは微塵も考えられない事だった。本庄に、夜に報告の連絡を入れた時には、『橘はやっぱり、少し黒いから、ちょっとだけお嬢の認識を改めてね？』と優しく諭されたが、具体的な事は言わない思わせぶりな口調なので、渋々頷いたが、今日の何処に少し黒い所があったかは、せりかには欠片も思い当たる事がなかった。

帰ってきて昼食を食べた後、玲人に帰って来た事を伝えようかと思ったが、今日は、友達と遊びに行くと言っていたから、まだまだ帰っては来ないだろう。今の状況を玲人に話した方がいいのか悩む。しかし、橘は、玲人とも友人関係にある。これが全然関係ないか、もう少し、遠い関係の人だったら間違いなく相談したが、相手であ

る橘のプライバシーも関わってくる。しかも、相手に告白されてその返事を保留させてもらっている立場だ。逆だったら相談など、共通の友人にされてはたまらない。特に、玲人は過保護も過ぎるので、もう一人誘って、ダブルデートにしようとか言って、どうにかついて来そうな気配がプンプンする。記憶の彼方に近い事が、たしかあった様な気がする。そうなる事は、やはり玲人に話した事が橘にも伝わる訳だから、あまり気分のいいものでは無いだろうと思う。せりかは、この事に関しては玲人には相談しない事に決めた。

代休日が終わった火曜日、学校に行くと皆がカチューシャをしていて笑ってしまった。せりかも実は茶色のをしている。普段していなかったが、柔らかい素材のものであまり違和感が無いし、髪が下を向いても落ちて来ないので、結構便利である。

クラスで木曜の打ち上げの出欠表が早くも回っていた。どうやら幹事さんはもう決まっていて、買い出し係とかも決定しているらしい。せりかは、自分と橘でやらなくては成らないのかと思っていた為とても驚いた。元々、優勝しなくても打ち上げの予定は有って、それに幹事の名乗りを上げてくれる女子が数人いて、そこに本庄と数人の男子が力仕事も有るだろうからと加わったという話だ。話が纏まったのが、ダンスの練習中だった事もあって、踊りの仲間が多い。その中には、本庄と共に先生をしてくれた、更科真綾（さらしなまあや）もいた。本庄とは元からの知り合いの様で、主に二人で役割分担を決めていた。貸して下さるお店のオーナーさんとも真綾は知り合いの様で、勝手知ったると言った雰囲気だった。今迄、あまり二人は親しい素振りが見えなかったので少し意外だった。

美久や弘美は初めてのバーでの打ち上げにお酒は飲めないとはいえ、大分興奮気味だった。食べ物や飲み物、カラオケやダーツ、それに商品付きビンゴ大会と全体に高校生主催にしてはやけに豪華な打ち上げだと思う。確か会費は千円だったはずだが…。幹事の二人がオーナーの差し入れと担任の先生の好意だと最初に説明をしていた。少しカンパを取り付けたらしい。ちゃっかりしているというよりも、担任の顔を立たせる為だろうと思われた。これで、少し、クールな担任のイメージは、生徒思いだけど表には出さない押し付けがましく無い先生に塗り替えられただろう。いったい策士とは誰の事だろうと本庄を見ると、こちらに向かって『まあまあ』といった感じに心の声が聞こえたように薄く笑った。

せりかは、明後日の事が気になっている為、いつもよりも大人になったと錯覚して楽しめる余裕などなかった。格好だけはいつもよりも大人っぽいワンピースに海外土産のブランドのバックを合わせたものだった。カチューシャは今回、みんなの中で必須アイテムだったので、橘に貰った真っ青なリボンの付いたものをつけた。洋服に合わせた事も大きいが、皆の前で貰ったのにつけないのは、橘に悪い気がしたのと明後日はつけていかない事に対する免罪符のような気持ちからだった。二人きりで出掛けるのに青いカチューシャをつけていく勇気と気持ちはまだせりかの中には無かった。

橘の姿を探すと、絶対にお兄さんにコーデされてしまったのだろうというあり得ないチャラい大学生風だった。ジャケットを黒くしてるのに中のシャツも黒でボタンを二つあけてゴツイ革のアクセサリ

ーを腕とお揃いの物を付けている。それにジーンズとブーツを合わせて、ホスト風に成らない計算をされたチャラさだったが、元がいいと何でも似合う。皆にも大好評で写真を撮らせてと言われて必死に断っていた。大体、橘の私服では無い事は一目瞭然なので、皆、『似合うよ～』とニヤニヤするだけで嫌がる事を無理やりするような場を盛り下げる人間は居なかったが、王子様の意外な取り合わせに男女問わず、釘付けで、純粋に普段を知らない人間がみれば唯、唯、カッコいいのだが、橘の不機嫌な態度も後押しして、おかしさと面白さに拍車が掛かっていた。お兄さんナイスなチョイスである。『いい仕事してるよね』と本庄が一樹（いつき）の存在を知っているのか目の端に涙を浮かべて苦しそうにせりかのところに寄って来た。せりかも同感だった。多分、あの券を譲って貰った恩義で逆らえなかったのだろう。あれは、一人分五千円を超えた招待券だった事を思えば、お兄さんも貰ったとはいっても自分が彼女と行かずに弟の為にあげてしまうのは、随分気前がいいと思う。弟思いだとも思うが、今日のクラス全員へのサービスには頭が下がる。しかし、この飾り甲斐のある弟を持てば一回はやってみたかったのだろう。明後日、出掛ける時に橘から真相が聞けると思うが、一樹さんも人が悪過ぎる。橘が目に入る度に皆、普段とのギャップにウケそうになるのをこらえる。本人も分かっていて、もう笑うならいっそ、笑ってくれた方が楽だと公言しても笑いだせる人間は居なかった。可笑しいのだが、おかしいと思うと、似合うなぁと妙に感心してしまい、笑うところまでこないのだ。しかも『ちゃら男の橘くん』なんて多分この先も、大学生になってもありえない。人間変わって行くものだが、この種の変化はないだろうという事は察せられた。要はみんな超レアで楽しんでいるだけなのだった。

盛り上がりに盛り上がった宴会は、時間切れが来てしまいお開きと

なった。せりかは片づけに残ろうとしたが、全員で自分達の周りのごみを纏めて、気が付く子がテーブルを拭くと五分程で片付いた。流石、最優秀賞を取れたクラスの団結力に感心してしまうが、文化祭から皆の意識が変わった事でクラスの雰囲気も良くしていた。行事ってメンドクサイ事だけではなくてこういう副産物もうみ出してくれるのだなとせりかは感慨深い気持ちになった。

帰り際、そっと橘が、「カチューシャ青いのも似合うね」と言って来たので、せりかはお返しに、「一樹さんコーディネートも最高にカッコいいよ」と返すと爽やかな笑みを引っ込めてとたん渋面になった。その変わり様に本庄には何を言ったのか聞こえていないのに分かった様で、わざわざ二人のところに寄ってきて馬鹿ウケしていた。「先生、今日のせっかくの装いが台無しな馬鹿笑い止めた方がいいよ」とせりかに突っ込まれていたが、余計にツボに入ったらしく、橘にもたれて崩れそうになって笑っていた。いつまで笑っている気だろうと思ったが、更科が戸締り等の確認に本庄を呼びにきたので、やっと去って行ってくれた。

楽しかった打ち上げはこうして幕を閉じた。

12

金曜日になると、とうとう明日だ、とそんなに深刻になるような事では無い筈なのに、せりかの中には大きな問題として心の中に横たわっていた。やはり自分は男の子に慣れていないのだなと今迄、思ってもいなかった事を思った。玲人がいつもいて一緒に行動していたから、こんなに自分が免疫不足だと思わなかった。要するに、ビビっているのだ。なんだか改めて自己分析すると恥かしい。

こういう時に喋れる相手は、一人しかいない。もう、最近は人生の師としても仰いでもいいのではないかと思っている本庄綾人（ほんじょうあやと）だ。

「せんせい～。明日、どうしよう？」

もう最近は弱音を思いっきり吐いてしまう。気取った言い回しをしたところで、彼には無意味だ。

「どうしようって行くしかないでしょ。逃げるなんてお嬢がするとも思えないし、着て行く服の事でも悩んでんなら相談のるよ？」

「ああー！！そこ忘れてた。人生初のデートなのに適当な格好なのも思い出としてどうなの？って感じだよね」

本庄はまだデートする前から思い出にされかかっている友人を思い、不憫になってしまった。少しでもデートを盛り上げるべく、服選びに行こうと無理やり放課後の約束をせりかに取り付けた。

放課後、連れてこられたのは、ショップでは無く、更科と表札の掛かった大きな屋敷だった。本庄は、なんの躊躇いも無く上がり込み、

お手伝いさんらしき人に挨拶してから階段を上って、あるドアを空けた。

そこには、予想通り、更科真綾がいた。急に来てノックもせずに入って来たのだから、さぞ驚いているだろうと様子を見ると嬉々としてせりかを迎えた。よくみると広い部屋の中は、色々な服が散らばっている。

「いらっしゃい。お待ちしてましたわ」

「え、えっと何も聞いてないんだけど」

「だって聞いたら、お嬢、逃げるじゃん？」

「逃げるって何から？」

「真綾から」

「なんで、更科さんから私が逃げなくちゃならないのか説明してくれる？」

「今から、お嬢は真綾の着せ替え人形になるから・・・？かな」

「悪いけどちょっと更科さんは待っててね。本庄くんと先に話をつけるから。それで、とりあえず、更科さんと本庄君はどういった関係で、何故、私が急に連れてこられたのかしら？！」

「真綾は、従兄妹兼婚約者。叔母が母の妹なんだ。それで、生まれた時からの婚約者。同じ綾の字を使ってるのも一応約束の記念か証みたいなものだって聞いてる」

「この間の打ち上げから少しは親しいのかと思ってたけど、この儚げな美少女掴まえて、いきなり婚約者って…私からみたら軽く犯罪者に見えるんですけど、相手の了承得てるんでしょうね？」

「儚げって、そりゃあ、それこそ詐欺だわ！真綾は中学迄、超箱入りのトコ行ってたから今の環境でボロが出ないように大人しくしてるだけで、どんな想像してるか分からないけど結構いい性格してるし、病弱でもないよ」

「それで、再度お聞きしますけど、どうして私が更科さんちに連れて来られてるの？」

「それは、真綾がずっとお嬢と仲良くしたがってて、俺ばっかずるいって言うからいい機会かと思って。まあクラスメイトだし、俺の従兄妹を今更だけど紹介しようかなっと言う訳なんだけど」

「それで、この服の山は、更科さんが私の明日のデートのために用意してくれたって事なの？」

「そうそう！！真綾がいっつもせりかちゃんかわいいから、こういうの着せて見たい！とか髪巻いたら、超似合うんじゃ！とかいってるから、絶好の機会かと思って電話しといたんだよ。とにかく後は、女子二人で着替えてみてよ。俺はあっちの居間でお茶のんでるから。出来たら見せて？」

「・・・・・・・」

せりかはなんと言っていいか分からない程呆れてしまったが、二人になった以上、とにかく、真綾と向き合った。

「明日、橘君と八景島に行くんだよね？そうするとスカートじゃなくてパンツで上にかわいいチュニックを合わせた方がいいかな？あそこ乗り物もあるもんね」

「本庄くんから聞いたのね。もう、橘君にも悪いと思わないのかしら？」

「絶対、他には言うなって言われてるし、微妙な事情も少し聞いてるから。私の事は今迄あまり知らないだろうけど、綾人の身内だから信用して貰えないかな？」

「うん。本庄君にはお世話になりっぱなしだから、こんな文句言える筋合いもないんだけどね。でも、婚約者ってそれは、恋人ではないんだよね？」

「うん。つい最近迄は、結婚するつもりも無かったんだけど・・・綾人が、今更だけど付き合ってくれってこの間、文化祭の後言われて・・・」

そう言って真綾は頬を赤く染めた。これ以上突っ込んで聞けないけど、なんで急に？何故、心境の変化があったんだろうか？

「椎名さんにはいいづらいんだけど、綾人曰く、とんびに油揚げさらわれたら困るからって告白されたの。どう見ても、椎名さんに橘君が告白したことと関係あるわよね？」

「私や、更科さんが油揚げで、橘君がとんびって事？そりゃあ、随分口が悪いわ！」

「そうよね！私も、あまりにもな告白に断りかけそうになったわよ！でもずっとなんとも思われて無いと思ってて諦めてたから嬉しい方が勝っちゃって、悔しいけど受けちゃったって訳。何年もこっちの事、焦らしといて、本当にムカつくったらないわ」

そう言いながらも真綾は幸せそうだった。しかし、本庄は、せりかの事を玲人の油揚げで、橘の事をそれをさらおうとしている、とんびに見えているのかと思うと何だかそれって何処から如何突っ込んでいいのか分からない内容だった。客観的にそう見えるかもしれなくても本庄がそう思うとは思わなかった。

「綾人は、本当は、結婚はするつもりだったけど、後悔しないように私にも誰かと付き合ってみた方が良かったんじゃないかって言ってるの。その上で、綾人を私が選ぶなら婚約もそのままにするつもりだったらしいの。何も政略結婚じゃないし、本人達が断っちゃえば何とでもなる軽いものだったの。唯、うちの親が他所にやりたくないって生まれた時に親ばか発言した所為で、それなら身内にってくらいの馬鹿馬鹿しい話なんだもの」

「うちも、隣の玲人の家に嫁に行かす気満々だから、それはすごく分かるわ」

「でも、橘君と付き合うかもしれないんでしょう？」

「本庄くんからするととんびに成るみたいだけど…。玲人とは今迄、そういう事考えた事ないの。血も繋がってないのに一緒の時間が長過ぎて兄弟みたいな感じで。橘君は、初めての片思いの相手なの。

相手から告白されてるのに変なんだけど、今迄、恋愛ってした事ないからすごくどきどきしたり、トキメくって感情を初めて感じたら、もう片思いが楽しくて！でもなんだか、橘君にも言われたんだけど、どうしてもその人と居たい、みたいな一般的な強い感情迄はまだ無いみたいなんだけど、橘君がそれでもいいって言ってくれて、とりあえず、お試しなお出掛けをしてみる事になったの。何様？って思われるよね？あの橘君を相手に」

「抽象的な例えだけど、例えばピアノを習い出したばかりで楽しくなって来たところに、急に君は才能あるからもっと有名な先生に習うべきだとか言われて、そこに連れて行かれちゃったみたいな気分ってことだよね？出来ればもう少し、自分のペースで楽しみたかったって事なんだよね？」

「分かって貰える人が居るとは思わなかったけどドンピシャ！更科さんって流石先生と血縁なの感じるわ～。少し言っただけで大体分かっちゃうんだね」

「そんな事はないと思うけど、綾人はエスパーかと思う時あるわよ。ちょっと怖いくらい何でもお見通しなんだもの」

「それは、私は其処までは思った事はないから、更科さんの事は多分よく知ってる所為じゃないかしら？元々、すごくカンが良い人なんだとは思うけど。それに、何だかんだと言いながらも面倒見もいいから、つい私も頼ってしまっているから、更科さんが気を悪くしていないといいんだけど」

「それは、大体付き合えるようになった切っ掛けが、椎名さんなんだもの。いい加減で適当な感じだった綾人が二人の事、気にかけてるのも珍しい事なの。元々、あまり他人に興味持たない人だったし。

それが最近私にも微妙に違くなったっていうか優しくなった気がするの。だから、全然気にしないから綾人の事も仲良くして欲しいの。それについでに私とも♪」

真綾はそう言って可愛らしく首を傾けた。せりかは『もちろん』と頷くと真綾は嬉しそうに微笑んだが、その顔が少し本庄とやはり似ているなぁと改めて思った。

それからは色々文字通りお人形となって色々着せ替えられて、薄くメイク迄され、髪をホットカーラーで軽く巻いた上に緩く纏め髪にされて、ふんわりと女の子らしい感じに仕上がった。鏡の中のせりかは明らかに女子度アップした姿が映し出されていた。

「綾人に見せに行こうよ！びっくりするよ。すっごくせりかちゃんかわいいもん。早くも心変わりされちゃうかも。ふふっ」

随分な過激発言を軽い調子で言う真綾は、とてもかわいらしくて、何年も真綾の事を想っていた本庄が、心変わりする事は万に一つも無いだろうから言える冗談だが、其れ位いいよ！と誉められているというのはよく分かった。

居間には、テレビを見ながら、ケーキを食べている本庄が居たが、待ちくたびれたといった感じが一切なく、爽やかに笑いかけて来たのには、流石、育ちがいいってこういう事なのね！としか言いようが無かった。

「お嬢、超綺麗じゃん。元々、可愛いけどいつもより、倍くらいいいって!!明日、楽しみだな〜。橘にデートバトンタッチして貰いたいくらい」

「真綾さんの前で何言ってるの?妬かせようとしても無駄だと思うわよ!」

「ははっ。流石お嬢、負けるね。やっぱり」

「こんな別人で行ったら詐欺じゃないかしら?」

「そんな事ないよ。真綾の腕はいいけど、お嬢の素がいいからだし、前、釣り合わないみたいな事気にしてたじゃん?これで自分が気に成らなくなるなら余計に良くない?橘は、ある意味大変だろうけどね」

「どういうこと?」

「うーんと、ナンパに気を付けてって事。出来たらあまり一人にならない方がいいかもね」

「大丈夫だと思うけど、先生の言葉は重く受け止めます」

「明日、とにかく楽しんできなよ。友達っていう選択になっても仕方がないし、友達だったら楽しんじゃいけない事も無いでしょう?もちろん付き合うって事になれたら、それはもっと楽しくなるとは思うけど、これぱっかりは、理屈じゃないから感性で感じて結論だすしかないよ」

「うん。有難う。なんか気持ちが軽くなった。真綾さんもありがと

ね」

「ううん。せりかちゃんが家に来てくれるなんてすっごく嬉しいもの。またいつでも来てね？」

「とりあえず、服とかカーラーとか返しに来るね。その時、色々報告するからね」

「うん！！待ってるね。教えてくれるのね。嬉しい！」

「それから、せんせい？私達は油揚げじゃ、ありませんからね！」

そう言って軽く片目を瞑ると、本庄は、苦笑して真綾を軽く睨んだ。

13

せりかは朝からとても忙しかった。まずは軽くシャワーを浴び、半乾きになった髪を綺麗にブローする。髪と肌の手入れは怠った事が無いので、自分的には数少ない自慢出来る艶のある髪だった。長さはセミロングだ。それをホットカーラーで昨日真綾に教わった要領で巻いていく。思っていたよりも簡単で驚いた。後ろの見えないところは如何するのかと思っていたが、別に髪を前に持って来て巻けば済むらしい。それから、試供品で貰ったというリキッドタイプのファンデーションを薄付きに塗った。UV効果もあるもので助かる。あと、整えられた眉に少し足すように眉を書き、瞼に三種類の茶色とベージュのアイシャドウを重ねて行く。すべて真綾直伝の薄化粧に見える化粧法だ。最後は、薄い色のピンクのグロスを乗せた。それから着替えた服は、黄緑色の少しだけエスニック調の長めのワンピース風チュニックに細身の白いパンツに歩きやすいオフホワイトのストラップのついた低い靴をあわせた。

カーラーをとった後、軽く固めるスプレーをする。ほんのり、チェリーの香りのするもので気に入っている。いつもは前髪を整える時位しか使わないが、まんべんなく髪全体にかけた。サイドを少し落とて巻いた髪を黒く光る素材のついたクリップで纏めて止める。結構強力なクリップなので、緩く纏めて見えるが、その実、きっちり留っている。鏡の中の自分はいつもより少しだけ大人っぽく見えた。

昨日、真綾にどんだけフリフリでピンクの洪水もどきの服を着せられるかと思っていたせりかは、このさっぱりとしたコーディネートに少し拍子抜けしてしまった。それでもその落ち着いたオリエンタルな雰囲気はせりか自身もとても気に入ったし、真綾も綾人も手放しに褒めてくれた。

母にこの格好が見つかると厄介だと思っていたが、母は今日は友達と紅葉狩行くと行って随分早くに家を出た。バスツアーだと行っていたから、多分狩るのは紅葉だけではないだろう。果物狩りもセットだろうと思われた。

待ち合わせの新杉田の駅まで来た。ここからモノレールで一本で着くところに八景島がある。せりかは以前、二度ほど行った事があったが、久しぶりの水族館はやっぱり楽しみだった。天気もいいし、気候も丁度良く気持ちがいい。少し早く着き過ぎたかと思ったが、橘はもう既に来ていた。少し離れた所から見てみると、グレーのパーカーにボトムスはカーキのジーンズで中に胸から下だけにボーダーの柄のインナーを合わせた橘は、ファッション雑誌から抜け出したかの様に素敵だった。やっぱりこの間のチャラ男風より、ナチュラルなほうが断然似合う。今日がもしもディズニーランドならあの格好にミニーちゃんの耳を着けちゃうんだけどなぁ～と思った自分が怖い。すこし、真綾に感化されてしまっているようだ。人待ち風な橘を女の子の二人組がチラチラというより、ガン見していて、よくあの視線に自然でいられるものだと感心しそうになるが、彼は玲人とは違い、そういう事に無頓着な方では無いと思い直し、小走りに橘に近寄って行った。

「ごめんね。お待たせー。橘くんも早いね」

「うん。今さっき着いた所だから、気にしないで。椎名さんを待たせなくて良かったよ。落ち着かなくて早く出て来ちゃったから」

見ていた女の子達が明らかに残念そうに去っていく。来たのが同性なら逆ナンでもする気だったのだろう。結構綺麗な子達だったし、自信もあったんだろうなとせりかは思ったが、今日は真綾のお蔭で、何と無く仮装気分なので、釣り合わないとか思われていたのではないかと言う卑屈な気持ちには成らなかった。自然と背筋も伸びて、笑顔になれる。おしゃれってやっぱり大事だなと改めて思った。

「切符、もう買ってあるからいこうか」

往復切符を渡されて、お金を渡そうとするとやんわり断られた。モノレールの中で、打ち上げの時の服はやはり、一樹さんに無理やり着せられて、代わりにバイト代が出たからと今日の軍資金をくれたらしい。何処までも弟思いだと思うが、打ち上げの日の橘を思うと純粋に、そうとばかりもいえないなと思った。やっぱり本人は、相当恥かしかったらしい。『似合ってはいたよ。とっても』というと、『生きているうちに一回くらいは、ああいうのも面白いかもしれないけど、クラスの連中の視線が痛くて打ち上げが長かった』と橘らしい答えが返ってきた。バイトも家庭教師のバイトで中3の子を教えているらしく、受ける高校の過去の問題集等をさせて、持って帰ってきて橘に採点をさせているらしいので、純粋におこづかいをくれたというよりは正統な報酬に近いらしい。要するに受験まで、またよろしくね！という裏の声が聞こえたと言うのが橘の談だった。せりかは兄弟がいないので、微妙な関係姓を興味深く聞いていた。内容は驚く物もあれば、微笑ましいものまで様々だったが、一度会っている所為もあって、光景が目に浮かぶようでとても面白かった。

八景島に着くとまずは、水族館に向かった。結構人が多く、家族連れや、カップルがやはり多かった。友達同士で来た事があったせりかは、その時、「次は彼氏と来よーね！！」と友人達と言い合った事を思い出しておかしくなった。今は叶った事になるんだろうか？

隣には、通りかかる人が目を瞠る程の美形の男の子がいる。なんだか現実感が伴わない不思議な感覚がした。

水族館の入り口で人の流れに流されそうになるのを、橘がせりかの腕を捕って、なんとか留まった。直ぐに手を離したが、なんだか気まずい。それこそ、シンデレラでは腕を組むなどワルツの時は当たり前だったのに、本庄の言う通り、全然違う事なんだと実感した。多分、橘も同じ事を思っているとなんとなくせりかは思った。しかし、せりかも、橘もどちらかというと実質を取る方である。はぐれたりしないように、腕を組む事をせりかが提案すると、橘もあっさりと受け入れた。二人は、まるでダンスを踊る時の様に、軽く腕を組んで歩き始めた。やはりこの方が、間に人が入って来なくて楽である。水槽を見ていても、ラブラブに見えるカップルへの気遣いか、家族連れ等は少し離れて見てくれるので、人に揉まれる事も無かった。グラスフィッシュを興味深く見ていると橘も実はこれが結構好きなんだと言って笑った。内臓がスケルトンで面白いのだ。しばらく見入ってしまってから、エスカレーターの海のトンネルを潜る。ここは、下からマンボウや小さな魚の群れが見えて、まるで海の中に入ってしまったかの様な気持ちになる。エスカレーターなのであっと言う間なのが残念だが、階段だったら、ずっといる人達がいて渋滞になってしまうだろうから上手い造りだと思う。

そのあと、イルカショーを見た。こう言ってはなんだが、イルカショーって水族館に行ったら見なくてはいけない気持ちにさせられてそれなりに楽しいのだが、どこの水族館も似たりよったりな気がする。水を被りそうな席は避けて、賢いイルカたちがジャンプしたり、トレーナーさんと一緒に泳いだりするのを程良く楽しんだ。ここは、白イルカもいて、それは結構珍しいと思った。しかし、せりかは実はイルカよりもペンギンがとっても好きなのだ。皆が同じ方向を向いて佇んでいるのが、神秘的で愛らしい。結構長い間、ペンギンに

見惚れていると横で、橘はせりかを見ていた。少し焦って、「ペリカンのところ、餌をあげられるんだって！」というと、ペンギンのところにもう少しいようと言われてせりかは赤くなった。お言葉に甘えてペンギンが泳ぐところとか、てこてこ歩くのに歓声を小さく上げて堪能した。やっぱりペンギンって可愛い。そのあと、ペリカンに小魚の餌をやったら結構、ペリカンって凶悪な顔に見えてきた。手が魚で生臭くなってしまったので、お手洗いに行く事にした。お手洗いに行った後、待ち合わせの場所に行くと橘が土産物屋でペンギンのぬいぐるみを見ていた。ふこふこで本物よりも可愛い。せりかは買って帰ろうかと思ったが、この後、遊園地に行く事を思えば、邪魔になってしまうだろうと思って諦めた。

昼食を取る前に、絶叫系の乗り物を乗ってからゆっくりと空いたころに食事にする事になった。こういうところは、気が合うと思う。がっつりハンバーガーなど食べた後に乗り物など乗せられては堪らない。昼食時も混んでいる時間帯はとてもではないが、ゆっくり食べれたものではない。

まずは、海上コースターに乗るが、上りが地味に怖い。落ちる瞬間よりもじりじりと直角に上っていく瞬間が一番怖いと思うのはせりかだけだろうか？お昼時で、空いていたので、続けて二回乗ってしまった。あとは、船が上下に揺れる、海賊船のようなどこの遊園地にもある乗り物だか、これが、ここのは元の高さが高くて怖い。せりかは、絶叫系は苦手な方ではないが、この高さは流石に怖かった。一番怖そうなタワーで落ちる乗り物だけは、パスさせてもらった。見てるから乗って来てもいいよと勧めたが、怖そうだからやめてお

くと言われた。きっと気を使ってくれたのだろう。バイキングに乗っている時も少しも怖そうでは無かった。後は、結構、ほのぼの系の乗り物を乗ったあと、昼食を食べる事にした。結構、遊園地にしては落ち着くレストランが多い。ブュッフェレストランの店を選んだら、海の見えるテラス席に案内された。もうお昼とお茶の時間の中間の為、とても空いている。パスタやフルーツやデザート等、種類も豊富なのに適当な値段である。御機嫌で、好きな物をお皿に載せて取ってきてから、入れ違いに行った橘を待って、飲み物を飲みながら心地よい気持ちになっていた。

「大丈夫?色々、連れまわしてしまって、疲れてない?」

「大丈夫。有難う。すごい楽しいよ。天気も良くて良かったよねー!風も気持ちいいし」

「そうだね。気持ちいいね。あの、今更だけど、今日の格好可愛いね。いつもとイメージ違うからなんだか余計落ち着かないけど、良く似合ってるよ」

「今更~?!って、うそうそ!!有難う。お友達の協力を得て、橘君に見合うべく、頑張ってみました」

「髪型変わるだけでも女の子は随分変わるね。最初会った時言いたかったんだけど、なんて褒めるのがいいのか分からなくて、少し大人っぽく見えたしね」

「あんまり褒められると、更科さんと先生が後から恩着せて来そう

で、怖いから」

「それ、やってくれたのあの二人なの？！」

「うん。そうなの。なんだか訳分からないうちに、真綾さんとは友達だし、本庄君は、飄々としてて協力してくれてるつもりなのか、唯、遊んでるだけかよくわからないし、今日の報告もお礼にする約束して来ちゃったの。「超楽しかった！！」って報告で許してくれるのかなぁ？あの二人の話は聞いてるだけで、こっちが恥かしくなるからあまり突っ込めないし、服貸してくれたり、面倒みてもらっちゃってるから色々、聞かれるのは必至だなぁ」

「あの二人、とうとう上手く行ったんだね」

「あ、うん。最近らしいけど、そういう素振りも真綾さんからしたら、無かったらしいから。よく知ってたね。先生が何か相談してたの？」

「まあ、そんなトコかなぁ。出来れば更科さんと親しくして欲しいって言われてた。本庄曰く俺がいると男避けになるらしい。見た目と結構ギャップがあって驚いたでしょう？」

「ああ、そうね。儚げな美少女っていったら、せんせいに詐欺だって笑われたわ。本人は、さっぱりしてて面白い子よね。私の事を何故だか、妙に気に入ってくれてるらしいのよね」

「そうそう、いつも俺にも椎名さん情報を聞いてきて、男だったらヤバイ感じだった。自分で声掛ければいいのにっていっても、其処は普通の女子の掟がまだよく分からないからとか言うから、少しウケたけど、やっと声掛けれたんだね」

「先生に無理やりお家に連れて行かれたから、声掛けられた感じではないけど、もう、がっちり友達にはなったわね。先生の従兄妹で婚約者で彼女でしょう？友達の友達はみんな友達の感覚に近いけど、可愛いのに、女の子にしては、はっきりした物言いをする子は嫌いでは無いしね」

「椎名さんらしいね。ちなみに男だったらどういうタイプがいいの？俺が聞くのも微妙だけど・・・」

「前に美久に聞かれた時に答えたのは、「普通にちょっとだけカッコ良くて優しくて可愛い感じの気の合う人がいい」って答えたら「せりかって残念な子ね」って言われちゃったの。意味は自分でも分かっているの。そんな人が見つかる確率なんて、とっても低いし、その人が自分に好意を持ってくれるかってなると更に確率落ちるものね」

「…俺は当てはまってないのかな？ある程度は好意を持ってくれてはいるんだよね？」

「はっきりいうと、さっき言ったタイプからは大きく外れてると思うわ。悪い意味では無いんだけど、この事を言ったのは橘くんの話になった時だったんだもの。相手にも失礼な言い方だけど自分に見合う人の方が楽かなって思ってしまうものなのよ。橘君に告白して来る子達は、みんなすごく美人で、モデルさんみたいな子達じゃない？とてもじゃないけどあんなに自分に自信無いし、実際、私みたいに告白されてもしり込みしちゃう子の方が多いと思うわ。橘君にとっては理不尽な話だと思うけど。橘君は、橘君の近くにいて惹かれない子はいないんじゃないかと思う位、理想的過ぎるのよ。見た目だけの話じゃなくて、私も橘くんみたいになれたらいいなってい

つも思ってるし、決してレベルダウンして欲しいとかは思ってないのよ?なんだか今日も一緒に歩いて居た時思ったんだけど、ふわふわしてしまって現実じゃないみたいに思ってしまう感じなの。本人にこういう本音を言うのも本当は止めるべきなのかもしれないけど、思っている事をちゃんと言うのが誠意だと私は思っているから、気を悪くしたら、もう少し、自分を見直すから、橘君もはっきりと不快に思う事は言って欲しいと思ってるの」

「不快では無いけど、かなりショックかもしれない。其処まで言われる程、自分が彼氏なのは無理って思われてるとは思わなかったから」

「たぶん、もう少し、大人になるとこんな見栄っ張りに近い気持ちは無くなると思う。それくらい馬鹿馬鹿しい事を思っているし、言っているのも分かるんだけど」

「椎名さんが思う程、俺は立派な人間じゃないし、清廉潔白でもないよ。前にキスした時、初めてだったら悪いって謝られたけど、殆んどなんとも思わない兄貴の女友達と興味本位でつきあったりしてたから、気にされるほど綺麗な訳じゃない。椎名さんとっていうのには意味は大きいけど、却って悪い事をしてしまったと思ってるんだ。わざとじゃ勿論ないけど相手が違う人だったら多分、もっと頑張って避けたかもしれないと思うから」

「あれは、頑張って避けちゃったら、せっかくみんなで頑張った劇が終わっちゃうでしょう?!ギリギリ頑張ってくれたの私にだって分かったよ。全面的に私がバランス崩した所為だし!それに、自分基準で初めてなのかなって決めつけたのだって、男の子にはすっごく失礼な話じゃない?あの後、反省したの。余計な事言っちゃったって。だから、過去のお付き合いした女性が十人単位で出てきても、

橘くんならありかなぁと思うよ。年上にもモテそうだもん。うちの母や玲人のお母さんだって騒ぐくらいだし」

「流石に十人単位では居ないけど、数ははっきりは言わないけど数人いたうちの一人がストーカーになっちゃった人が居たんだ。刺されそうになったところを警戒してた警官に助けられて、中2の時だったかな?結局半径１００M以内には寄らないって念書を書いて貰って告訴とかはしなかったんだ。結局いい加減な付き合いをしてた俺が悪いのに、俺が中学生ってだけで全面的に被害者だとみんな思ってるから、兄貴にもすごく謝られちゃって、それから絶対うちに女の友達連れてこなくなったし。俺は、反省したのもあって家族にも迷惑かけたし、勉強位頑張ろうかなって思っただけなんだけど、やっぱりそれから少し女の人が恐くなって、それは家族も道とか歩いてても自然と避けちゃうから分かるみたいで、胸が痛かったみたい。特に兄貴が。だから今回、初めて自分から家に椎名さんを連れていったから、みんな浮かれちゃって、こんなに過剰に世話焼きな訳。ちょっとブラコンかと思われるでしょう?やり過ぎで」

橘くんは静かに笑ったけど、そんな事があったら、お兄さんも協力しようと思ってしまうのは当然だと思った。聞いた内容が重い割には話しかたや表情が軽くしていて、深刻にならないように話してくれていた。

「ブラコンとかは、思ってないよ。そもそも如何いうのが普通なのか、あまり分からないしね。橘君みたいな弟さんならお兄さんもいろいろ構いたくなるんだろうなー位にしか思って無かったけど、そういう事があると慎重になるものなんじゃないの?私が橘君のストーカーにならない保証なんて無いんだよ?」

「椎名さんみたいなかわいいストーカーなんて居ないよ!逆に今は、

相手が付きまとった気持ちが分かって、悪い事したと思ってるもん。相手の事好きなのに、全然向き合ってくれなかったら辛いだろうし。俺もあの時、今の気持ちが分かれば、せめて向き合って、それでも合わないなら、納得いくまで話して断ったのにって思うから」

「それは、私とも納得いくまで話したいって事だよね。正直、私の事を其処まで思ってくれるのが、不可解なんだよね。何か特別橘君の気に入るような事した覚え無いし、そういう要素も自分に有るとは思えない。別に自分を卑下してるわけじゃ無いし、謙遜でもないんだけど、今迄、告白すらされた事無かったから、どうしたら、好かれるのかな？みたいな疑問がどうしても拭えないんだよね。付き合うのもピンとこないの。こんな子供っぽい私の何処がいいわけ？」

「それは、言ったら、細かいとこから全部好きだよ。それこそ、指の先から髪の先まで」

それは、とてもセクシャルな意味を含んだ言葉だというのが分かる言い方でせりかは瞬時に真っ赤になった。そんなせりかを見て橘は少し嬉しそうだった。先生が橘は少し黒いから認識を改めたほうがいいと言ったのを初めて現実に分かる思いがした。しかし、あまりにもせりかが橘を神聖視しているので、わざと今迄の話や、こういう態度を取らせてしまっているのかもしれないと思うと、自分の偏見の所為で、相手に辛い事を思い出させて、その上で人間らしい部分を見せようとする橘が、痛々しく見えた。

「分かったから、もう少し、猶予を貰ってもいい？後、玲人に相談してもいい？もちろん橘くんの今話してくれた事は言わないつもりだから」

「…いいよ。玲人は椎名さんにとっては家族同然だもんね。今迄黙ってくれていたのは、俺に気を使ってくれての事だろうし、構わないよ」

取り敢えず一応の決着を見た所で、あまり食欲も無くなってしまったのでお店を出る事にした。会計は何も言わずに橘が払ってくれたのを、お礼を言った。雰囲気が払うと言わせない空気があった。今日は何から何まで、奢られてしまって、せめておうちにお土産を持って帰ってもらおうと思い、土産物屋に入って、いるかチーズケーキなるものを自分の家の分とふたつ買った。

帰り、モノレールに揺られながら、八景島を離れていくのが、なんだか寂しく感じられた。気まずくなりそうな車内も混んでいるのをせりかを端に立たせて、負担が来ない様に庇ってくれているのが分かる。なんだか、彼にこれだけ思われて、返せる物があるのか不安になった。

新杉田駅で別れる時に、御家族にとお土産をわたすと橘はとても驚いた顔をした。

「いいの？貰っても？」

「うん。今日はいろいろとありがとう。人生初のデートが橘君で良

かったと思ってる。すごく楽しかったし、今迄と違う橘君も知れたから。お兄さんにもお礼沢山言っておいてね」

せりかは、答えを出せないうちにこう言う言い方は期待を持たせて卑怯かもしれないけれど、今日思った本当の気持ちを告げた。しかし、賢い橘はやはり甘い意味には取らなかったようで、淡く微笑んだだけだった。それからポケットから小さい紙袋をせりかの手の上にお菓子を受け取る代わりに乗せた。

「渡すのどうしようかと思ったんだけどやっぱり椎名さんの為に買ったものだから貰ってくれる？」

「空けてもいい？」

「帰ってから見てみて。じゃあ今日は本当にありがとう。気をつけてね」

そう言って反対側のホームに去って行った。

帰ってから紙袋をあけるとそれは小さなペンギンのマスコットだった。それを見て。せりかは、何故か、胸が痛くなって涙が止まらなかった。

14

せりかは更科邸に来ていた。服はクリーニングからまだ帰ってきていないが、ホットカーラーだけ返す事にしたのと約束通り、更科と本庄に初デートの報告に来たのだ。二人は唯、せりかの話す事を淡々と聞いてくれた。少し気持ちが重い事も正直に話した。やっぱりなんだかんだと本庄を頼りにしてしまう所はせりかも最近自覚していた。彼は、元来の性格なのか、せりかに対してある程度特別なのかは分からないが、とても正直に見たままを言ってくれる。しかもそれは、せりかの立場に立った場所からの見解で、いつも親身になって相談に乗ってくれる絶対的な味方であった。真綾には悪いと思うが、今一番気兼ねなくなんでも話せる友人は間違いなく本庄だった。

「お嬢は考え過ぎなんだよ。寄せられた気持ちに応えなくちゃならないって思うから重たいんだよ。相手が勝手に想って来るんだから同じだけ返せなくても仕方の無い事だし当然だと思うけど」

「それは、そうかもしれないけど、人の好意には応えたいものじゃない？もちろんそんなに博愛主義って訳じゃないよ？だけど相手に好意を持っている場合は自分はそれ程でもないとかって切り捨てられないよ」

「そこがお嬢の良い所だとは思うよ。でも男の好意なんて下心付きなんだから、そんなに思いやり見せなくてもいいんだよ。もちろん真剣な気持ちを踏みにじれって意味じゃないのは、分かるよね？」

「うん。でもどの位、待って貰ってもいいのかなぁ？はっきり即決で無理とかＯＫとか出来ない以上、相手にもその間、ツライ思いを

させるし、他に目を向けるチャンスも奪ってる気もするし」

「中途半端に返事する位なら、いくらでも待たせていいんじゃないの？待てないなら、それまでの話だし、そんなのそれこそ見切っていいんじゃ無いの？勝手に橘が思い続けても、止めても、それは向こうの意思も尊重されるべき事ではあると思うから、もし一年位このままで、違う想う人が返事貰う前だけど出来ましたって言われても仕方ないよね？その時、逃がした魚が大きく見えるかもしれなくてもね」

「もともとお魚が大きいのは分かってるけどね。誰の目から見ても明らかじゃない」

「でも、例えば、真綾は、橘より俺を選んでくれるわけじゃん。少しは心動くかな～と思ってた所はあったんだ。すっごい引力あるでしょ？彼」

「やだ、綾人そんな事思ってたの？」

ビックリした真綾は今迄、話を聞くのに徹していた様だったが、流石に声をあげた。橘には男避けに親しく出来たらしてって言っていたと聞いたが、そんな、自虐的な目的が有ったとは知らなかった。

「それは、そう思うでしょう？あれだけ、顔良し頭良し性格良しでおまけに声も良いよな…あとはなんていうか唯、カッコいいとかじゃない艶があると思う。それと、何気に危うい感じがする所が逆に隙になってて、惹き寄せられる要素になってるんだよなぁ」

「…せんせいが危ない方にいかないか、真綾さんがいなかったら心配になる分析だよ。それは・・・」

「実際、そういう奴もいるんじゃないのかなぁ？男子校とかいってたらあいつマジでやばいと思う。共学来て正解じゃないの？でも橘って見てると意外と女の子苦手そうだけどね。特に自分に言い寄ってくる子とは、話すのもしんどそうだもん。最初は断るのが苦手なのかと思ったけど、断るスキルは有るって本人も言ってたし、そう思うと嫌悪感がある様に見えるんだよね。断る時悪いとか全然思ってなさそうだしね。普通はお嬢さんほどじゃなくても相手の好意に応えられない罪悪感が湧くもんでしょ。それが、全然無さげで、断り方もさっぱりしてるから…あ、俺がいる時、何回かそういう事有ったから知ってるんだけどね、相手の子は緊張してるから分からないと思うけど、言葉は普通だけど、顔見ると嫌悪感を感じてるのが分かるんだよね」

本庄はやっぱりするどいな～と感心してしまう。話の感じだと橘が何か話した訳ではなく、自分が見て感じたものから導き出された結論のようだ。

「でもせりかさんに告白してるんだから、女嫌いっていう訳でもないでしょう？それに私とも普通に話してくれるし、私はそう感じた事ないわよ。クラスの子とだって結構フレンドリーな感じだしねぇ」

「多分タイプによると思う。真綾とかお嬢とか自分に明らかな好意が無いの分かるし、クラスの連中は意外と橘の事、なんだか恋愛対象から除外してるところあるじゃん。多分なにか感じる所があるんじゃないのかな？近くにいると」

「そう言われれば、どっちかって言うと頼りにはされてるけど、うちの子達ってさっぱりしてて、橘君に言い寄ってるの見た事ないわね。はっきり好きとは言わなくてもああいうアイドルみたいな人っ

て綺麗な人が張りついてそうよね？」

「橘がそういうのイヤなのみんな分かってるんだよ。なんとなく。入学当初は結構ピリピリした神経質な奴かと思ったけど、いまではクラスでは平和そうでのんびりしてるから、ついからかったら、『俺のオアシスだな。ここは』って言ってたからかなり今の状況は気に入ってるみたい。それは廊下とか歩くと途端に、みんなが目で追って来るから仕方がないのかなとも思うけどね」

「玲人とかは、そういうの全然気にならないみたいなのよね。なんか性格図太いっていうか強靭っていうか一緒にいる私のが辛かったけど、だから橘くんの事もそういうのも面倒って言うのもあるんだよね～」

「そうだよね～！よっぽど好きか、自分ってすっごく綺麗って思ってる子じゃないと耐えられないわよね」

「そうそう！！どっちも無いからやっぱり早めに断るべきかな～？」

「うわっ！冷たっ！可哀想じゃない？あまりにも」

「綾人はそう言うけど、せりかさんは身を持ってあの一組の彼とずっといて大変だったんだから、他の人よりも現実知ってるって事よ。冷たくなんか無いわ」

「そうなんだよね～。なのに奴は涼しい顔してるからいつもムカついてたわ。やっと少しは平和になって来たかと思ったら次は橘くんでしょう？なんだか他の人に言ったら贅沢で絶対に怒られると思うけど、もうちょっとだけでいいから、目立たない人が来てくれないものかしらって思っちゃうんだよね」

「でも高坂とはそれでも離れなかった訳でしょう?耐えられないっていう事は無いと思うよ。多分」

「…玲人と離れる選択が有ったのは、高校受験の時位で、後はもうべったり一緒だから・・・諦めたのかな・・・自分の中で」

「じゃあ、せりかさんとお付き合いすると、もれなく高坂君が後ろに付いて来ちゃうんだったら、並みの人じゃそれこそ無理じゃないのかしら?橘くんは、そこは分かってくれてるんだし、かなりの高評価じゃないかしら?言い辛いけど、この先彼氏作るの、せりかさん厳しいと思うわよ」

「そういうの考えて無かったかも!そうだよね~。玲人の事気にしないでいられるのって橘くん位の人じゃないと無理ってなると私の将来暗い事になるよね?今回は、奇跡みたいなものな訳だし」

「そうね。大学生に成るまでは絶対無理よね?」

「あ、、~!大学も無理かも。玲人、一緒の大学行こうって言ってたし・・・」

「…お嬢さんさあ、高坂と別れるつもりは無い訳?この先も?」

「付き合っても無いのに別れられないよ。それに、うちって両親も仲が良くて学校一緒にした方が優劣つかなくていいんだよね。亀裂が出来ると嫌だから高校も結局一緒にしちゃったんだもん」

「…成程ね。割と思うよりもシビアな関係な訳だ。高坂とは」

「そうなの。こういうの恥かしいから言いたくないけど隣で同じ歳の子がいたら、親同士少なからず張り合うものなのよね。玲人と私が頑張ったから、今の平和な御近所関係が有ると言っても過言じゃないと思っているの」

「大人は分からなくても子供って微妙に空気読むものなんだよな～。分かるよ、そういう事が生活上結構重要だって事。俺とかも他の従兄弟達に負けるなって圧力結構あるもんなぁ」

「みんな大変なのね。私は、比べられる存在がいないから自分の好きにやってこれたけど」

「なんだか、激しく納得な感じよね。真綾さんの美徳でもあるけどマイペースでいられるのは羨ましいわ」

「そうそう。こういう競争する意識をもたないでいられるのは羨ましいところだよな。って話がずれて来てるけど、橘にも保留って言ったんだから取り敢えず保留にして高坂に言ってみなよ。何か動くかもしれないしね」

「先生は、あくまでも玲人が私の事、どうにか思ってると思っているみたいだけど、そんな事もないのよ?さっき言った通り意外とシビアな関係なのよ。人には言えないけど」

「じゃあ、賭けてもいいけど、それはお嬢には酷かなぁ?まあ、いいや。俺の見解が当ったら教えてくれる?」

「…いいわよ。これだけ相談乗って貰ってるんだもん。ある程度は報告義務も発生するってものでしょう?なんでもとは言えないけど、万が一、それっぽい感じの事があったら報告します」

「せりかさん、私も綾人から聞いてもいい？」
真綾が遠慮深く言ってきたのを微笑して頷いた。
家に帰って来たので、とりあえず帰って来たメールを玲人にすると直ぐに玲人が家にやってきた。手にお茶のペットボトルを二本持っていて、お茶が軽く汗をかいていた。
一本当然のように渡してくるので、礼を言ってキャップを空けた。
「ここんトコ、せりは出掛けてばっかりで、付き合い悪いよな。文化祭も終わったんだから、少しは時間に余裕出来るんだろう？」
「…うん。あ、あのね、話があるんだけどいいかなぁ？突然で悪いんだけど、相談に乗って貰いたい事が有るの」
「何？・・・いいよ。もちろん」
玲人は言いながら、嫌な予感がした。こういう日が、いつかが来るかもしれないと思っていたのに、全然覚悟なんて出来ていない自分

に気付いて逃げ出したくなったが、それは妥当な解決法では無い。とにかく聞いてみるしかない。

「少し前に、橘くんに付き合って欲しいって言われたのね。…でも玲人とは友達だから相談するの少し躊躇ってしまって直ぐには言えなかったんだけど、どうしたらいいかなぁと思って、取り敢えず一回デートしてみて、考えるって事になって最近出掛けたのね。でも、付き合うってなると先に面倒事の方を思っちゃうのよね。ずっと玲人と付き合ってるって思われてたから、中学の時も大変な事ってあったじゃない?それを乗り越える程、好きなのかって言われるとそうでもないし、自分がもっと綺麗で自信があったら付き合ってみたりしてもいいと思うのかな?とか考えちゃうと、相手は友達の延長で良いって言ってくれているのには、断るのもひたすら自分勝手に思えてくるし、下らない事気にする自分も嫌になるところもあって、答えられなくて保留にしてもらっているんだよね」

予想通りの話ではあったが、少し上回る内容だった。橘みたいな奴と付き合うと大変だから、止めたほうがいいと、止めるつもりだったし、賢明なせりかもそれは分かっていて、たとえ橘がせりかに惹かれるような事があっても受け入れないだろうと踏んでいたのに、一度デートしてみたりだとか、断らない選択肢を残しているのは橘の事を少なからず好きなのだという事実が玲人を打ちのめした。それに、好きな相手に友達で良いなんて筈無いのに、気軽な所から攻める辺りに橘の聡明さが覗える。これでは、せりかが落ちるのも時間の問題ではないかと思われた。

「…せりが、忍の事をどう思ってるのかが一番大事なんじゃ無いの?外野の事を全部無くしたら、付き合ってもいいと思ってる訳?」

一応相談に乗る以上、思っている事を言ってみた。せりかが、本当に橘の事が好きなんだったら、自分は諦めるより他ない。せめて懸命に相談に乗る事が玲人に、今出来る最善の事だろうと思う。

「好きだってずっと思って来たの。でも、今迄告白とかされた事が無いから分からないんだけど、相手と明らかな温度差があって、もしかして見ているだけでいいと思う程度のアイドルとか好きな俳優さんとかを思う感情に近い感じもして来て、普通、好きってもっと強い感情のような気がするの。例えば、今すぐにでも会いたいって思うとか…そういう感情は湧いて来ないんだよね。正直」

答えを聞いた玲人自身力が抜けた。こんな答えじゃせりかを諦める気になんてとてもなれない。しかし、同時に諦める必要が無い事にホッとしていた。自分からせりかを取り上げられたら、正直今迄と同じ生活が出来るか自信がない。もっと早くに動くべきだったと思うが、もう少し相手が大人になるのを待っていた。今の答えを聞いたってせりか自身、好きだと想う感情がまだ分からずにいる。橘の事も本人自身、憧れに近い感情なのでは無いかと考えているようだ。早く動いた所で、ずっと一緒にいたから勘違いしているという事で済まされて、今迄と同じ付き合いになるか、気まずくなってしまうかのどちらかだと分かっていたから動かなかっただけだ。しかし、今せりかは恋愛について考えているいい機会だ。これに便乗しない手はない。

「じゃあ、もう少し良く考えてみたら?今迄が全然、恋愛事に縁のない状態だったから分からないって事だろうし。それで、考える時に俺の事も一緒に考えてみて」

「・・・・・どう言う意味?!」

「俺は、せりの事ずっと好きだった。実際今迄、せりに言い寄りそうな奴は邪魔して来た。だから、せりが疎くなってるのは申し訳なく思うけど隣にいて同じ気持ちになってくれるまで待とうと思っていたから、忍の事、ショックだけど、せりが決める事だし、俺も言っておかないと後悔するから、相談に乗るって言いながら、余計困らせるの分かるけど、忍への気持ちと一緒にでいいから俺の事も考えて欲しい。本当にずっと、ずっと好きだった…せりがいない人生なんて考えられない。忍は友達でもいいっていってるみたいだけど、俺は、そんなんじゃ嫌だ。将来は結婚も考えて欲しい・・・」

「ちょっと待って!!いきなり飛躍し過ぎだよ。玲人はずっと一緒にいたから、他人に取られそうになって混乱してるだけだよ。玲人こそ良く考えてみた方がいいよ。幼稚園で他の子と遊んだりして怒っちゃった時と同じ感情だよ」

「ずっとその時からすきなんだから、同じ感情かもしれないのは認めるし、忍に取られそうになって焦ってるからこんな事言っている訳だから混乱もしているかもしれないけど、せりの事が好きで、俺とずっと一緒にいて貰いたいのも本気だから、よく考えて答えを出してくれ。先に言って置くけど、俺を選らんでくれなかった時は、忍との事祝福は出来ないけど、友人関係は気まずくならない様にするけど、せりとこういう風な兄弟みたいな関係は、続けられない。もちろん隣に住んでるから気は使うけど、大学に入ったら一人暮らしする。将来の事も考えたら、遠方の大学も考える。俺も気の迷いとかじゃなくて本当に本気だから」

「…分かった。良く考えてみる。でも、玲人が近くにいなくなるのは嫌だよ。それは考え直して貰えないの?それ込みで考えろってそれは脅しに近いでしょう?」

「そうだな。脅しかもしれないが、それ込みで考えてくれ。俺もそれだけ本気だし必死なんだ」

「答えを出す迄は普通にしてくれるの？今迄と同じに」

「出来る限りはそうするよ。俺も離れる覚悟もまだ出来てないし・・・」

そう言って玲人は帰って行った。

15

せりかは眠れずに月曜日の朝を迎えた。

ずっと自分の中で、好きっていう感情や恋愛ってどういう事を持って確かなものだといえるのだろうか？と考えていた。しかし、考えるうちに、玲人からの告白は断った場合、今後疎遠になるという事も含めたもので、今迄の自分達の歴史を否定された様で最初は悲しくて如何しようもなかったせりかだったが、段々玲人に怒りが湧いて来た。いくら何でもこんだけべったり生まれた時からして来て、こちらに彼氏が出来そうになったとたん、「じゃあね」は酷いのでは無いかと思えた。しかも橘を選ばず、玲人も選ばなくても同じ事だろうと思うと結局本当の究極の脅しだと思う。自分を選ばなければ許さないと言っているのと同義語だ。何て傲慢なんだろうと怒り心頭であるが、これが幼馴染の性格を知り尽くしていると（何も気が付かなかった時点でそうでもないのかもしれないが）傲慢なところも、我儘なところも、そういうところも、あったな～位で済まされてしまって、心でいくら罵詈雑言を浮かべてもなんだか虚しいだけだった。何を思っても今更過ぎる相手なのだ。それでも玲人は私に対して恋愛感情を見せた事は無かったと思う。だからいくら本庄に言われても信じる気になれなかったのだ。自分と同じ気持ちになるのを待っていたと言っていたが、自分の知っている玲人の性格を考えるとそんな気の長い事を考えていたなんて今でも其処だけは信じられない。橘のことが無かったら一生こんな事を言って来ないで、大学に入ったら綺麗系でナイスバディなお姉さんの彼女でもさっさと作って、せりもがんばれよ♪みたいな事を上から目線で言われていたんじゃないかとさえ今でも真剣に思えてくる。

昨日言った事が全て勢いだけだとは思えないが、勢いだけの部分も

あるんじゃないかとは思っている。特にまだ十六なのに、付き合うって決めたら、即結婚も考えろというのはこれからまだ、どんな人とお互い巡り会うか分からないのには早計ではないかと思う。

しかし、そう言えば、真綾は本庄との付き合いは結婚も受け入れて付き合っているのだから、其処まで先の事を決めてしまって後悔しないのだろうか?と疑問になった。しかし、本庄には未来を委ねてもいいと思う位の包容力があった。とても不謹慎だが、本庄に言われたら、玲人も橘も振り切って付き合ってもいいと思う位、せりかはやさぐれた気持ちになって来た。絶対に無い事だから思うのかもしれないが、段々と疲れてきて、なんだか全部投げ出したくなって来た。

朝いつもの様に玲人が迎えに来てくれたのを、やっぱり嬉しく思ってしまう自分の気持ちを思うと余計に玲人に怒りが湧いた。不機嫌に歩いていると玲人は全然昨日の事など無かったように、「アレの日か?」等とからかってくる。ぶちんと切れて、「そうよ!!」と言ったら流石に黙ってしまった。こちらの怒り様が半端じゃ無い事が分かったようだ。

「昨日は、急に色々と押し付けるような事言って悪かったとは思ってる。ごめん。せりの事をそんなに簡単に離れてもいいと思っているわけじゃないんだ」

「そうだよ!ずっとこっちがもう少し距離置いてって言っても、昔っからおんぶお化けみたいにべったりして来たくせに酷いよ!!」

「でもさ…」

「でも何も無い！！確かに好きな人が他の人といるの見るのツライとか思ってるのかもしれないけど、私達ってその程度の関係だったの？私に彼氏の二、三人出来た所で捨てられる様な間柄だったわけ？私が反対だったら、何があってもお祖父ちゃんとお祖母ちゃんになるまで玲人とは縁は切らないわ。絶対に」

「ごめん。お前の方が子供って思ってたけど、そうじゃないんだよな・・・俺の方が本当に如何しようもない奴なんだよな」

「分かってるなら、昨日の事許すから考え直して。そうじゃ無いと気持ちもどうか分からないのに私達結婚するしか道がなくなるじゃない！！玲人は私が玲人の事好きじゃなくてもお嫁に来てくれるならそれでもいいっていう馬鹿な考えで昨日の事言ったんじゃ、ま・さ・か、無いわよね？！」

実のところ玲人はそれでもいいと思う自虐的な思考だったが、それを今言ったら流石にせりかに殺されそうだった。というよりも逆に見捨てられそうだと思う。

「分かった。昨日の言い方は流石に極端だったと思う。せりかに酷い事言って悪かった。頭冷やして考え直すよ・・・」

「あー！！良かった！！もう、昨日ずっと考えてたら、恋愛云々は悪いけど如何でも良くなって来て玲人が縁切るって言った方が腹が立って来ちゃって！なんだかグレそうになったわよ。もう、いっそ橘君でも玲人でも無い方がいい気がしてきた。今言い寄られたら、ある程度妥協出来るから自分でもヤバイと思うわ。本庄君に言われたらまず間違いなくそっちに行きそうね！！」

真綾の事を知らない玲人にお灸をすえるつもりで昨日よぎった戯言を口にした。

「せりは、・・・あの、本庄の事が好きなのか？」

本気に取った様子で玲人が青ざめた

「彼は、とても包容力がある人だしね。昨日色々考えていたら、結婚まで何で考えられるんだろうって思ったら包容力が有るからだろうな～と思った訳」

「それって俺には其処まで考えられるほど、包容力が無いって事だよな」

「そうだよ。彼だったら、この位でガタガタ言わないわね～。婚約者の彼女、わざわざ橘君に近付けて揺らいでもいいと思うって人なのよ？最終的に色んな人を見て自分がいいと思う様なら結婚してもいいらしいわ」

ネタばらしをして、少しお仕置きを止めた。昨日考えに考えて思ったのは、本庄が特別なのかもしれないけれど、其処まで思われていたら昨日の玲人みたいな事は言い出さないだろうと思ったら、求め過ぎなのかもしれないが、自分が一番に相手に求めるものが、包容力だと気が付いた。橘や玲人のように容姿端麗で文武両道だったりしなくてもいい事に気が付いたのだ。

「…それを聞いてたら、昨日の俺の事を心が狭いって思っても仕方が無いかもしれないな」

「誰もが、本庄君みたいな考え方じゃ無い事も分かるから、仕方無

い事もあるかもしれないけど、でも私達の関係は第三者が入ってきたら、多少は変わっても切れないで繋がってるって血じゃ無いけど、そう思っているのが自分だけだと思っただけよ。あと玲人と橘くんみたいにすさまじくカッコ良くなくてもいいから、一番に包容力のある人とお付き合いはする事にしたから、二人とも悪いけど、断る事にしたから・・・あしからず」

「おい、結論それかよ!!少なくともどっちか選んでくれるかと思ったのに」

「そうね～。玲人が包容力たっぷりの大人な人になった時に、玲人にも私にも恋人がいなかったら、付き合う事もあるんじゃないかしら?ずっとお隣さんな訳だし?」

「忍は?せりの思う包容力が今の時点で足りないのか?俺にはそうは思えないけど」

「有るのかもしれないけど、テッペン見ちゃうと悪いけど、理想が高くなるからねぇ」

「ああ、本庄に比べると駄目って事か・・・」

「そうそう。他のところで、橘君や玲人の方が上のところも沢山あるとは思うけど、今の時点の私の思うてっぺんは彼だけど、自分の求めている部分が分かったっていうだけで、彼女がいる事に落胆したりはしてないわ。だって、彼女に対する彼がとても良く見えるんだもの。これで、簡単に他の人に乗り替えたら超幻滅しちゃうわ」

クラスに着いてから、メールで昼休み屋上に橘を呼びだした。

「今日は返事を貰えるってことかな？」

「ええ。その前に昨日から色々、あった事を話したいんだけど聞いて貰ってもいいかな？」

「いいよ。玲人に相談するって言われた時から少しは、覚悟が出来ているから…」

「・・・・・・橘君は玲人の気持ち知ってたの？」

「それは、分かるよ。なんでちゃんと告白して自分のものにして置かないのか不思議なくらいだったよ。玲人に言われて断るような子そうそうはいないだろうし、椎名さんを見たって玲人の事を気が付いて無いだけで好きなんじゃ無いかってずっと思ってたし」

「それは、駄目モトで告白してくれたって事？」

「ううん。気が付く前に俺の物にしちゃおうかなっていうずるい考え」

「・・・すごく違和感ある理由だけど、そういう橘君の方が好きだわ。面白くて」

「引くかと思ったのに流石、椎名さんだね。腹黒趣味なんだ？」

「ふふっ。完璧橘君より数倍いいと思う。そういうちゃっかりしたところを見るといつもがしっかり者な印象なだけに男の子に褒め言葉じゃないけど可愛いと思うわ」

「可愛いは確かに褒め言葉じゃ無いけど、椎名さんが言ってくれると誉められてる気がしてくるから不思議だね」

「私、玲人に付き合ってくれって言われた時に、自分を選んでくれなかったらこの先、縁を切るって言われて、もうぶっちん切れたのね。今迄十六年間の関係を、色恋沙汰位で切るなんて心狭くてびっくりよ！その時、自分が付き合いたい相手に何を一番求めているのか考えたの。それさえ有ったら後は有る程度許せるみたいなものを思い浮かべたら、包容力がある人だったら結婚まで考えられるかもねって真綾さんと本庄君の様子を見て思ったら、本庄君がいいなぁって思ってしまったの。玲人に結婚も考えてくれって言われたのも大きいんだけどね」

「…それは、椎名さんは本庄が好きって事になるよね？更科さんがいても」

「真綾さん含めた本庄君だから、本庄君みたいに包容力がある人だったら、橘君や玲人みたいに綺麗だったり頭良かったりしなくてもいいかなぁって言ったら分かって貰えるかな？」

「それは、究極のところに行っちゃったんだね。相変わらず突拍子も無いね」

そう言うと橘は微笑を浮かべた。

「そうなんだけど、極端な性格なのよ。こんな私とうまくやってく

れる人なんて、心が際限なく広い人だって自分で気が付いたのかもしれないわ」

「・・・今迄、有難う。椎名さんの事、悩ますだけの結果になっちゃった事、悪かったと思ってるんだ。振り回すだけ振り回してごめんね。最初から断られてるも同然だったのに、おれが長引かせて足掻いただけなんだ」

「ううん。こちらこそ本当に感謝してます。こういう状況で告白になるけど、半年間、毎日どきどきしたり、ときめいたり橘君がそういう気持ちをくれた事に感謝しているの」

「それは、光栄だけど、自分でも惜しいっていう感じなんだなぁって落ち込むなぁ。玲人はライバルだってずっと分かってたけど、本庄みたいな人がいいって言われるとキツイよな」

「フォローになってないと思うけど、私は自分で自覚してるけど、特異例だし、先生曰く、橘君は、顔良し頭良し性格良しでおまけに声も良くて艶っぽくて引力あるってべた褒めですごく橘君の事を勧めてくれたのね。あからさまでは無いけど、私が断りそうになるとポジティブな要素持ちだして来てくれて、私と橘君のことすごく考えてくれているんだなぁって思ったわ。私もその通りだと思うんだけど、相談に乗って貰ってるうちにこういう感じの人だと話易くていいなぁとか思っちゃったんだ。私も潔く失恋してくるので、御相子にして貰えないかしら?」

「うん。玲人とやけ食いでもして、気持ちを昇華するよ。でも玲人は諦めないんじゃないの?俺よりずっと年季が入ってるし、これからも近くに居る訳だから…」

「それはね、お互い大人になった時に包容力も出来て、私も成長して、心狭い人とでも大丈夫とかになった時にお互い、恋人がいなかったら付き合う事もあるかもしれないわねって言ってあるの」

「俺より生殺し状態だな。椎名さんって結構サドっ気有りそうだもんね。玲人が苦労しそうだな」

「あら、意外と腹黒の橘君にサドなんて言われるなんて光栄だわ。女王様キャラで行こうかしら？これから・・・」

「わざわざ、キャラ作らなくても地でイケるんじゃない？学校では少し猫被りみたいだから」

「ふふっ。分かる？こうやって気取らないで喋ってたらもっと楽しかったよね。八景島とか。なんだか損した気分だわ」

「そうだね。これからはお互いに地でお付き合い願いたいね。それだけで、俺のほうはもう充分だから」

「有難う。楽しくなりそうね。周りをドン引きさせないといいわね？周りの人達の為に・・・」

「黒―い空気漏れ出して五組の委員は二人とも腹黒でサドとかって笑えるよね。きっと・・・なんだか椎名さんと緊張しないで楽しく喋れるようになったら、少し世界観変わってきたかもしれない」

「私も！！これからはもっと楽しくなりそうね。まだ高校一年生なんだもの。恋愛より友達と楽しくしててもいいと思うの」

「そうだね。今度は二人じゃなくてみんなで遊びにいこうか？玲人

や本庄や森崎さんや斎賀さんも誘って」

「いいアイディアだと思うわ。橘君の提案じゃクラス全員来そうだもの。あと数カ月だけど、このクラスで良かったって本当に思う。いい出会いが沢山あってシンデレラも大成功だったし、あと好きな人とファーストキスも出来たしね」

軽く片目を瞑ると橘は驚いた顔をしたが、その後、屈託無く笑ってくれた。その顔を見て、せりかは、本当に自分の淡い初恋が終わったのだなと感じた。二度目の恋は本気だけど、既に婚約者のいる相手で失恋確実で、でもきっとその後も橘と一緒で友達付き合いしていける筈だ。恋が終わっても何もかも無くなってしまう訳ではない。ここからが新たなスタートだと思う。

事の顛末を本庄に話すと、「勘弁してよ～！！俺がすごい悪者みたいじゃん」と抗議を受けたが「好きなんだから仕方がないじゃない？」と言うと「流石はお嬢！！想定外で最高に面白いね♪」と最高の賛辞が返ってきて、せりかの失恋の痛手は大分薄くなった。もちろんその後も良き相談役でいて貰う気満々だからねと言うと「お嬢さんには敵わないよ。この中で真の無敵なのは、間違い無くお嬢だね」とからかうようでいて優しい許容の言葉をせりかにくれた。

16

「せりの事抜け駆けしただろう？忍、おまえって本当に友達甲斐の無い奴だよな」

お好み焼きを頬張りながら言われてもあまり効果は薄い。

「何の事？抜け駆けなんて人聞きが悪い事俺がする訳ないでしょう？玲人が一回でも椎名さんの事好きって言った事あったっけ？無いよね。それでも分かれってそれは言いがかりってもんだよ」

いけしゃあしゃあと言ってのける橘の方が、口では全然優勢だ。玲人では相手にならない。

「大体、せりが本庄に転んだのだってお前の事相談に乗って貰ってるうちにそういう感じになったんだろう！」

「あれは失敗したね。婚約者がいる奴だからって安心してたんだよ。途中からは、結構仲良いからなんだかヤバくならなければいいなぁとは思ったけどまさかね・・・」

「俺が、いつからせりの事想ってたと思ってるんだよー！忍はその見映えだけで充分誰でも男でも女でも付いてくるんだから、せりになんてちょっかい出さなくてもいいのにさ！！」

「あ・の・さ、本庄はお前の方がカッコいいって言ってたけど？それこそ手近で済ませないで、もっと視野を広げて見ろよ。玲人に合って、玲人の事を想ってくれる子なんて沢山いるよ。一応、玲人の為を思って言ってるんだからな。あんまり思い詰めると相手も重い

よ」

「人の事言えるのかよ！」

「失敗してるから言ってるんだよ。椎名さんはいい子過ぎて想ってくれる相手に気持ちを傾け過ぎるから、追い詰める事になるって分かったからこうして綺麗さっぱり諦める気持ちになったのに玲人が隣の家で、未練たっぷりにしてたら彼女も身動きとれないよ？少し休戦しなよ。大学生くらいになったら、玲人も本庄位いい男になるよ絶対」

「お前、俺の事本当に慰める気でいたんだな。からかわれてるか遊ばれてるとしか思って無かったけど」

「それも当たってる（笑）プラス励ます気持ちで、今日はきたんだけど？」

「お前は大丈夫なのか？かなり本気だったんだろう？わざわざそうじゃなければ、せりなんて面倒な所に行かないだろう？」

「それはもう、超本気でしたよ？全力でこんなにいったの初めてだし、だけど、気持ちが時に重い事も知ってるから真剣に相手が断ってきた以上はすっぱりあきらめるよ。玲人は俺とは微妙に先のある断られかたなんだから、とりあえず今は友達に戻った方が、絶対に玲人の為にもなるから…」

「そうだな。せり以外は今でも考えてないけど、今迄の関係で続けてみるしかないよな」

「そうそう、それに今度、本庄や更科さんとか森崎さんとか斎賀さ

んと遊びに行こうって椎名さんと言っているんだ。楽しそうでしょう？」

橘は意地の悪い笑みを浮かべながら玲人の方をみた。案の定、本庄の名前を聞いた途端に不機嫌になる。橘は玲人のこういう素直な所を好ましいと思ってはいるが、どうしても苛めたくなって来てしまう。

「本庄がいかないと椎名さんも来ないかもしれないよ？この間の暴言で玲人株大暴落だから」

「忍って本当に見た目天使なのに中身は悪魔だよな…。くやしいからせりに暴露してやろうかな？」

「椎名さんはとっくにそんなの知ってるよ。それに黒い俺の方が付き合いやすいって言われてるから隠すつもりないよ」

「・・・・せりって趣味悪いんだな。幼馴染でも分かって無い事って多いんだな」

「自分でも自分の事ってそんなに分かっているわけじゃないんだし、まして異性の友人の全てを把握しようとするのは無理ってもんだし、気持ち悪いよ。悪いけどそれが許されるのは、彼女に想われている場合以外は立派な犯罪になるから気をつけてね」

「お前の辛辣な助言、ありがたいけど、なんだかもう少しあったかく言えないものなわけ？たちばなくん？」

「ゴメンね♪こういう性格なもんで、これが精一杯の温情かな？立場は玲人と同じなんだから仕方ないよ。さあ、俺も本格的にやけ食

いしようかな」

「そうだったな。俺ばっかり振られた気持ちになってたけど、そもそも忍があまり落ちてないから、ついついその事実を忘れちまうんだよな」

「玲人は女々しいって椎名さんに吹き込んで、更に株を落としてやってもいいんだけど、落ち込まないのが彼女の為でしょう?玲人も今の態度じゃ椎名さんも落ち込ませるの分かってるの?しっかりしなよ!!」

「・・・・本庄ってすごいな。お前にも靡かないのを彼女がいるのに向こうを選ぶんだから」

「本庄はすごいけど、椎名さんもまだ恋愛したく無いから無意識に相手にならない人に惹かれるんじゃないかと思うんだ。だから玲人も本気なら熟成させるつもりで地下に気持ちを寝かせておいた方がいいと思うよ。確かなことじゃないけど椎名さんも玲人の事、多分好きになると思うよ?だって俺の時には周りが面倒だって言ったのに、玲人の時は違った訳だからその時点で答えが出てると思うよ」

「そう願うしか無いか…とにかく、もう少し包容力をつけてお前みたく相手を思いやれないといけないんだな…」

「なんだよ!気持ち悪い。俺だって椎名さんに言わせれば駄目なんだから、見習っても無駄だから」

「いや、お前の俺とせりへの気遣い聞いてるとなんで、せりに振られたのか納得させられるよ。なんでお前を振っちゃうのか分かんな

いけどな。勿体ない事するよなせりも」

「タイミングが悪かったのと後はやっぱり、根本的な気持ちの問題だと思うけどね。でも、椎名さんは今でもこれからもずっと友達だし、俺のトラウマを解消してくれた恩人だからやっぱりずっと忘れられないとは思うよ。…彼女も初恋でファーストキスの相手だって言ってくれたしね♪」

「忍…、それ冗談だよな?せりから、其処まで聞いてない!!」

「残念ながら本当。シンデレラのキスシーンで掠っただけだったけど、どうせならもうちょっと感触わかる位しとけばよかったなぁ・・・」

「あれ、してるフリじゃ無かったのかよ?」

「まあね。でも椎名さんがよろめいたの支えてたんだけど、もともとすごく無理な体勢を強いられてたから支え切れなくてね」

「わざとじゃないのか?本当に?」

「それは無意識には願望もあったかもしれないけど、そんな事はしないよ。・・・唯、相手が違ったらもっと頑張ったかもしれないけどね♪」

「忍は、俺が落ち込むのを見るのが好きだってよく分かった。…俺はせりの幼馴染なだけなんだから、それは気にしない事にする。これで妬いたりしたら、もう一生せりに相手にされないと思う」

「玲人もわかってきたじゃん!!みんなでこれからは、遊びに行っ

たりしたいのに玲人の意識が変わらないんじゃ誘えないから残念かなって思ってたんだ。これからは楽しみだな?部活も二人ともレギュラーになれたし。まだ一年だからフルでは使って貰えないけど、お前と一緒にプレー出来るの楽しいんだ。同じ年の奴もいいのが揃ってるから俺達が主力の代になった時には結構上を狙えると思ってるんだよね」

「そうだな。いろんな人達の協力があって今が有るんだから、感謝しないといけないよな。親やクラスメイトや先輩達・・・それに仕事を沢山引きうけてくれた副委員の石原さんやせりにも感謝だな」

「玲人も多少は他の子に目が向き始めたのかな?石原さんって綺麗な子だよね?」

「そんなんじゃないけど、今は周りにいる全員に『ありがとう』って言いたい気分なんだよ」

「基本的に玲人は素直で明るいし今迄挫折無さそうだもんなぁ。これからも能天気なムードメーカーでいて欲しいな」

「はぁ〜?!そんな評価されたの初めてだ。すっごい屈辱!!特にお前に言われたくない。他の奴なら鼻で笑ってやるのに!!」

「悪い意味じゃ無いよ。椎名さんもいつも言っているけど、玲人は精神が強靭で羨ましいって。俺も実はそう思ってる。サービス精神豊富なのもすごいなって思ってるよ」

「なんだよ。褒め殺しでいろいろ無かった事にする気だろう?ッ最初に話題戻ってやろうか?!」

「戻ってもいいけど時間と労力の無駄だからやめような～。褒めてるのは本心でチームとか友達うちでもムードメーカーでいて欲しいとは思ってるんだよ。これから、お互い頑張っていこうな！！椎名さんに振られた者同士、連帯感も湧いてくるってもんだろう？」

「最後の一言が余計なんだよ・・・」

17

「それでね、私も真綾さんの誕生日プレゼント一緒に本庄君と選びにいく事になったの」

「はぁ？それって好きな男の婚約者のプレゼント一緒に選ぶって事か？！それで、せりはいいわけ？」

「うん。何がいいか今から楽しみ。後、半日くらい本庄君と一緒に歩けるのも幸せ～。セラピストみたいなんだもん。せんせいって」

今でもせりかは本庄の事をせんせいと半ぶんかそれ以上の割合で呼ぶ事が多い。

「彼女に悪く無い訳？」

「真綾さんには許可貰ってるし、そのあと合流してお茶する事になってるから大丈夫。問題なしよ」

「あのさぁ、虚しくならないの？自分に振り向かない相手と一緒にいるの・・・」

「全然！！すごく楽しいし、癒されるよ。相手が本庄君だからかもしれないけど、友達で満足してるし。それに真綾さんと三人でいる時の本庄君が最高にいいんだよね。もう二人がとっても理想的な恋人像なのよ」

女って本当に分からないと玲人は思う。あまりにも普通に考えたらありえない人生観に、それぞれ人は人だと言い切れないものがあっ

たが、引き止める理由も意義も存在しない。唯、なんだかけったいだよなぁとは思う。しかし、当人が幸せだと思うなら、幸せなのだと玲人も思う。報われていなくても、こんな話を聞かされてもせりの傍にいられる現状がある事に玲人も不毛な幸福感を感じていたからだ。

「真綾さんてどういうものが好きなのかしら?今迄は何をあげてたの?」

「実は今回が初めてなんだ。何か渡すとやっぱり向こうの家にも伝わるから、婚約がはっきりしないうちは何もして来ていないんだよ。毎年激しく文句を言われるんだけど、去年までは流してきたんだ」

「婚約指輪とかは、もう少し先だよね?ペアリングとかはどうかな?」

「俺もしなくちゃいけないのは勘弁だな。あと指輪は真綾がいい気になって今から余計に我儘になられるからヤダ」

「何、その酷い言葉!真綾ちゃんが聞いたら泣くわよ」

「うん。泣くかもだけど、お嬢はしゃべらないし、俺も直接は言わないから伝わらないからいいんだ。やっぱり先が長いし、性格知ってるとやったら駄目って事あるだろう?とくに高坂とかの間には有るんじゃないの?お嬢さんも」

「・・・そうね。数え切れないほどのNGがあるわね。例え、愛があっても本庄君と更科さんだったらそれが無いっていう風には思えないから、指輪はNGなわけね。わかったわ」

「話が早いね。そういう関係の奴が近くに居ないと絶対に理解不能だから、言う気にもならないんだけどね」

「歴史が長いのよね。いいところばかりじゃお互い無いし、駄目なところが嫌かというとそういう訳でも無いんだけどね」

「そうそう！でもだからと言ってべた甘には成れないんだよ。普通のカップル見ると結構甘甘じゃん？ああいう時期は一生訪れないと思うね。それを許容出来るのは相手の事をよく知らないからだよ。それが過ぎたら絶対、少し倦怠期入ってるじゃん？お互い一番甘えさせ合う良い時期を持っちゃうと、そんなの今だけで、他にも友達やら、勉強やら趣味やらで、段々融通が利かなくなって、うまくいかなくなるのにって見てるとすごく思うよ」

「そっか～！だからラブラブだと思ってたら倦怠期入って、持ち直したと思ったら別れたりするのね。みんなは」

「多分ね。だから、あえてそういう隙は与えたくないんだよね」

「でも、機嫌が悪くなった時の機嫌取りとかは慣れてるから便利じゃ無い？」

「今迄はね。真綾も彼女になったら、やっぱり今迄と一緒の対応じゃ、満足しないみたいで手を焼かされてるんだ。後悔なんて最初からないけど、かなり気は使うね。お嬢見てると余計にね」

「私が玲人を振ったから？あんまり参考にならないと思うよ。本庄君の真綾さんに対する寛容さを見ていると私達とは比べる対象にならないわよ。玲人は今でこそ、唯の幼馴染になってくれたけど、付き合わないんならこの先会わないし、人生に関わらないように生活圏も移すって脅して来たのよ？なんだかその程度の存在だったのかと思ったら目の前が暗くなりそうだったわ。実際は怒りでブチ切れたけどね～」

「ははっ！それは相手が必死だっただけで、実際はそんな事出来ないよ。高坂だってお嬢と同じくらい、相手の事を大事に思ってるよ。なんていうか勢い余って口走っただけじゃないのかな。若気の至り？ってやつでその事は許してやればいいのに。実際それをそんなに気にしてる時点で、お嬢は高坂の事を随分気にしてるんだなって思うよ？高坂本人は分からないかもしれないけど、橘あたりは分かってるから案外あっさり身をひいたんじゃないのかな？」

「本庄君に言われると私も傷が疼くかもとかは全然思わないのね？」

「疼いてないんでしょう？だから思わないかな」

「ふふっ。なんだかそういうのって先生らしいね。一見結果論なんだけど、そういう事が有る程度の情報とか経験から予想ができて、ほぼ判断出来るっていうのってすごいよね」

「ああ、何だか癖みたいなものなのかな？うちって会社やってて行く行くは一応跡継ぎなんで、従業員の気持ちとか取引先の人の気持ちとか、予想が出来るように他人の気持ちにシンクロ出来る様に少し特殊な訓練をした事があるんだ。もちろんＳＦみたいなんじゃ無いよ？いろいろ想像力を働かせてその時の人の気持ちにトレースして行くんだけど、脳波計とか着けて貰ってるからその人が思ったっ

て言うのと科学の結果が裏切ってたりする時が結構多かったんだよね。そうすると時に、人間は自分をも騙せるというのが分かったら楽しくなっちゃって、其処からは独学で心理学から来る相手の動作や行動の意味とか、段々嵌まってっちゃったんだよね。結構おもしろいよ。後は他人を不快にさせたり怒らせたりしない様に出来るから結構便利かも。お嬢は随分規格外でかなり難しいけど最近は、悲しいかそうじゃないか位の区別はつく様になったよ」

「それなら真綾さんが欲しいものなんて簡単なんじゃないの?」

「うん。だから、お嬢を誘ったんだ。真綾がせりかちゃんファンなのは、何と無く感じてるでしょう?だから、お嬢さんが一緒に選んでくれたプレゼントと一緒にお茶する時間がプレゼントかな」

「なんだか、橘君のときじゃないけど、理由があまり分からなく慕われるのってどうしたらいいのか分からないわ」

「いいんだよ。気に入るのって理由があまり要らないものなんだよ。強いて言えば容姿かな?せりかちゃん可愛いって耳にタコ状態だから」

「女の子に好かれるのに容姿っていうのは、珍しいわね。私は真綾さんの容姿は綺麗だと思うけど、どちらかというと性格がさっぱりしてて、割とものをはっきり言う所が好きだけどね」

「それ聞いたら喜ぶけど、これ以上はっきりいうと相手に迷惑になるから、出来れば言わないでくれる?」

「分かったわNGな事柄な訳ね。分かり過ぎるのも便利だけど、なにがってはっきり言えないけど問題あるわよね?」

「相手の要求がわかるのに、あえて分からないフリをするのは結構骨が折れるよ。あっちも俺が察しが良いのは分かってるから余計にね」

「なるほど！それは結構苦しい先生が見れそうで楽しそうね」

「最近そのSっぽい発言、あまり躊躇無くなってきたね。クラスでも最近じゃ女王様っぽいよね？下僕達がお仕事もしてくれるし」

「あら、そんな事ないわ。下僕だなんて言わないで。親切なクラスメイトなのよ？」

「俺達もクラス委員の仕事、悪いから手伝う事にしたけど、クラスの熱狂的な椎名さんのファンが先にやってくれてて、体よく追い払われてるんだよね～。やっぱりああいうM嗜好の奴っているんだなって感心したよ。お嬢は意外とクールにお礼言うだけで素っ気ないしさ、あれってわざとでしょ？」

「先生がそう言うんならそうなんじゃないの？相手のニーズに応えるのも時には大事って事、先生にならわかるでしょう？」

「最近、橘と話する時何気に距離が近いのは気の所為じゃないよね？」

「ああ、あれは彼等が切なさそうにするのが堪らないって腹黒王子様が言って、あっちが勝手に距離詰めて来るのよ。私は流石にそれは鬼なんじゃないかって言ってるんだけど、王子様曰く、結構向こうも打ちひしがれながらも喜んでるから大丈夫っていうの。私は其処までの変態さん達とは思ってないけど、少しは近い事してるから

橘君にあまり強く言えないのよね。だって彼がしてる事って少し私に話す時半歩位近いだけなんだもの」

「やっぱりね～。二人でいると何だか黒い雰囲気漂ってたから気になってたけど、橘は思った以上に真っ黒だねぇ」

「そうね。一緒にいると面白くて飽きないわよ。あの見た目ですんごく黒い事言われると、噴き出しそうになるもの。でも、先生も分かっているとは思うけど計算され尽くされた言動だから、全部の人がある程度得になる？っていう試算らしいから、その上でのお楽しみなんで目を瞑る事にしているの」

「何だかすっかり悪友にされてるね。少し毒されてきたんじゃない？」

「王子様に言わせると私は元々、サドっ気があるから素質ばっちりで、実際腹黒いほうの橘くんのが付き合い易いから否定できないのよねぇ～。問題出る様になったらあっちに対処考えさせるわ。得意そうでしょ？頭良いんだから使わないと宝の持ち腐れよ！」

「あのさぁ、悪い事に使わないのは持ち腐れてないって言うか…もっと別の事に使ったらどうなの？」

「そうね。今、相談してるのが、生徒会を高学年になったら一緒に掌握しようかって話してるのよ。その時は、先生の特技も必要になるからメンバーにいれるけど良いわよね？もちろん真綾ちゃんも付けてあげるから」

「真綾をお菓子のおまけみたいに言わないでくれよ」

「あれはおまけが欲しくて買うからお菓子がおまけなのよ？」

「…それは話の論点ずれてるけど、俺を入れるにはいいけど、悪事に真綾は巻き込まないでくれ」

「悪事じゃないわよ。善行でもないけど、結局自分達も楽しめて周りにも益になるように考えてくれる人がいるから、結構楽しめるわよ？真綾さんの事はともかく先生は必須要員だから、クラス変わってもよろしくね」

「分かった。それで、プレゼント決まったの？さっきからこの辺何周もしてるけど」

「うん。私は鞄に付けられるダッフィーちゃんお揃いのにして、先生はさっきはいい気になるからやめるって言ってたけど初めてのプレゼントならやっぱり指輪をあげた方がいいと思うわ。あの辺に結構カジュアルで普段使い出来そうな感じのブルームーンストーンのがお勧めなんだけど、見にいかない？」

「…そうだな・・・今迄本当に何もしてやらなかったのを思えばそうだよな・・・」

結局、せりかのお勧めの指輪を購入した。青白く光る神秘的な石は男の本庄でも魅せられるものがあった。

その後、ピアノのレッスンを終えた真綾と合流して近くのケーキの美味しいお店に入った。二人でプレゼントを差し出すととても喜んでくれたが、椎名さんがくれたクマのなんとかとかいうお揃いのヌイグルミに負けたのははっきりと分かった。これで指輪以外だったら見向きもされなかっただろうと思うと椎名さんに感謝すべきか、

一緒に渡す事にしたのを後悔すべきか微妙な所である。

しかし真綾が嬉しそうにしてくれていれば、やはりそれで、正解だったのだと思ってしまう。が、最近の橘と椎名さんの悪だくみの計画は本庄も一味に強制的にさせられているらしい。恐いもの見たさは有るが、二人の賢いのをずるがしこいほうに傾けられると学校自体痛い事にならないか、本庄は半ば本気で心配になりつつあった。だれかストッパーになりそうな人材を早急に見つけねばと策を巡らせた。思い付く人間が直ぐにいないので取り敢えず自分がそれまではやるしか無いか…と思ったところで、悪魔な二人も本庄にその役目を押し付けるつもりなんじゃないかと思いあたって彼は眉を顰めた。

18

「ねえねえ、高坂君って椎名さんの幼馴染なんでしょう？超カッコいいよね！！」

サッカー部の三年生が引退してから少しずつ力を出せる場面が増えて橘と共にツートップの位置を確立しつつある玲人は離れたクラスのここまで呼び声が高くなって来た。

その所為かあまり一緒にいる訳でも無いのにこの手の話題が最近富に増えた。紹介して欲しいと言われたらどうしようかと内心冷や冷やしている。

「うん。まあね。橘くんとも親友なんだよ。ね？」

仕方が無いので隣の腹黒王子にこの場を収めて貰う事にした。

「親友なんだ～！！じゃあ、付き合ってる子がいるかどうかとか知ってるよね？」

彼女達は幼馴染よりも、やはり親友という言葉に食いついてくれた。ほっと胸を撫で下ろすがこれからは彼の裁断でどう持って行かれるか判らないので、まだ完全には安心しきれない。

「うん。付き合ってる子は居ないけど、実は、・・・最近椎名さんに振られたばっかりで落ちてるからあまり傷を抉んないでやって欲しいんだよね～。それからこれは皆に言わないでね。椎名さんも気まずいだろうし」

こらこら!!ナニヲ暴露ってるんじゃ!この腹黒王子は・・・!!

「えー椎名さんあんなカッコいい彼振っちゃったのー?勿体ない~」

「椎名さんは小さい頃から知ってるから恋愛対象に見れないんだよ。それに、・・・椎名さんも振られちゃったばっかりだからあんまり恋愛ごとの話題振らないであげて?結構落ち込んでるみたいで俺が慰めてるんだけど全然靡いてくれないんだよね。弱ってる時ってチャンス!!って思うじゃん?」

「えー!!橘くんって、椎名さん狙いなの?」

「弱ってる可愛い子は、みんな狙うと思うよ?最近椎名さんの周りに野郎どもが多いのは、その所為なんじゃ無いの?」

「私、周りに振られた事は話してないのに、そんな筈ないでしょ!!橘くんも周りにそんなこと触れ回らないでよ!!」

キツイ口調で咎めると聞いていた彼女達が目を丸くした。

「椎名さん、振られちゃったの本当なのね?こんなに可愛い子振るなんて何処のろくでなしな訳?信じられない!!」

「そうだよね~。椎名さんより美人なのに性格良い子なんて滅多にいないと思うけどね~」

皆口々に振られた私に同情の言葉を掛けてくれる。

「好みの問題もあると思うし、仕方が無いよ・・・」

言いながら、少し涙ぐむと皆が息を?んだ

「他に良い人いるから、大丈夫だよ!!あんまり落ち込まないでね。椎名さんはクラスのみんなのお姉さん的存在なんだから、いつもは相談に乗って貰ってばっかりだったけど、何時でも聞くから言ってね!!」

「有難う!!私も早く忘れられる様にしたいんだけど、なかなかね。うまく行かないもんだよね」

しみじみ言うと皆が肩を抱いて「元気出してね。力になるから」と言ってくれた。便乗して一緒に抱きつこうとした橘の事は、きぃーと怒って彼女達が止めてくれた。今の私はいたいけな羊にみえるんだろう。

皆が去って行った後、爽やかに労わる顔を見せながら「女優だね〜」と橘が感心したように小さく囁いた。

「本心だもの。いくらでも言えるわ。…唯、目に手をやって泣けってサインを送ってこられた時は焦ったわ。瞬き我慢して目が痛くなってやっと涙が出たのよ?私、めったに泣かないのに不自然じゃ無かったかしら?」

「目に涙が溜まって堪えてるって感じで、泣くっていうんじゃないからパーフェクトなんじゃないの?期待以上だよ。その後の返しも」

「玲人や私の事を暴露して、どういう風に持って行きたい訳?王子様?」

「うわっ！コワいから王子呼び止めて！！それって最上級椎名さんが怒ってる時しか出てこないじゃん？前に腹黒が付いてる時のが全然安心だよ。俺が意味の無い事しないの知ってるでしょう？あんまり怒らないでよ」

「それで、私が失った物の対価は何？」

「一つ目は玲人を紹介してって言われなくなる。これは流石に親友としては玲人が不憫すぎるし、かといって紹介を渋ると椎名さんの評判が落ちる。付き合ってる訳でも無いのに断るのは難しいと思うんだよね。そこで、本当の事言っちゃえば紹介出来ないのも向こうも納得！って後に、でも高坂振っちゃうのは反感買っちゃうから、椎名さんの振られた話をしちゃって何時に無く落ち込んでる所を見せれば女の子って同情のが勝つから、玲人の件は其処かに行っちゃうでしょう？其処に最近椎名さんの周りにいる下僕ちゃん達の事も、弱ってる羊を狙う狼とみなしてくれるから、それも椎名さんの事は好意的に見てくれるから良い事づくめでしょう？」

「相変わらずこっちが困ってそっちに振った事まで、色々多岐に渡って利用するわね」

「あの子達が一番適任そうだったから声かけてくるの待ってたんだよね～。よく練習見に来てて玲人のファンだって知ってたから」

「け、計画的だったわけ～？！何処まで黒いのよ！信じられない！待ってたってなにそれ・・・」

「生徒会入ろうと思ったら、今から好感度上げて置かないとね。入っちゃえばこっちのモノだけど、玲人は今、本当に注目株だから、

関係無いってはっきりさせて置かないと影響が出てくるよ。大会とかが始まったら本格的にヤバイから早めに手を打って置きたかったんだ。玲人の事で妬まれるのゴメンでしょう？」

「それで、橘くんの事で妬まれないって言える訳でも無いのに、気がある素振りは如何してなのかしら？」

「あれは、向こうも本気じゃ無いの分かってくれるよ。仮にも本気で好きな子の前で弱ってるところを狙ってるってカミングアウトする高校生がいると思う？大人なら有りな口説き方かもしれないけど、今は冗談と慰めにしか聞こえないよ」

「それもそうね。あまり本気にして行かなかったわね。ふざけて橘君が抱きつこうとしたのも止めてくれたもんね」

「そうそう。此処は、みんな馬鹿じゃ無いからホント助かるよね」

どこまで真っ黒なんだと言う発言にせりかは乾いた笑いで答えるしか無かった。

19

二年生になり、クラス変えがあった。せりかは、やはり本庄と一緒のクラスだといいなという希望はあったが、流石にそれは誰にも言えなかった。

ところが蓋をあけてみれば、本庄ばかりで無く、真綾や橘や玲人や美久や弘美まで一緒のクラスだった。少し不可解な物を感じたが、橘がせりかに説明してくれた。

「この一組は成績優秀者で構成された、進学クラスなんだよ。国立の進学率とか上がった方が学校側もいいから公立の学校でも進学クラス作るって聞いてたから、椎名さんや玲人とは同じクラスになれるだろうとは思ってたんだよね」

「そっか～。私立だけかと思ったよ。そういうアカラサマな事するのは・・・」

「公立は表立って言わないだけだよ。結局結構はっきりしたクラス割りしてるよ」

「でも、そのおかげで皆一緒のクラスになれたんだったら嬉しいね！」

「そうだね。俺もそう思うよ。特に二、三年はクラス変えが無いから良いクラスになって良かったよね！」

「そうなんだぁ～！！受験とかあるから何と無くそうかなって思ってたけど部活とかしていないから先輩とかと繋がり無くてそういう

話題入ってこなかったんだよね」

「俺は、兄貴がいるから、どっちかっていうと裏情報含めてそっちからの情報なんだけどね」

「そっかー。一樹(いつき)さん、この学校の卒業生だって言ってたものね」

二人で話し込んでいると何気に周りの注目を浴びていた。やはり隣の美少年はどうやっても周りの注目を集めてしまうらしい。それにしても元五組だった人数が多い事に驚く。かなり偏ってしまっているのではないだろうか？八クラスあるのに、三分の一位は元のクラスの面々が見えるのはどうなんだろうか？

「なんだかクラス変わった感じしないね。前のクラスの人多過ぎない？嬉しい事は嬉しいけど」

「うん。うちのクラスって優秀だったんだな～！ばっさり成績順のクラスらしいからね。兄貴の話によると」

「多分、橘君が試験前にみんなに勉強会して教えてくれてたでしょう？あれの成果なんじゃないのかな？」

「そうだと嬉しいけど元々、元五の奴らって基本的に出来のいい奴多かったよ。何故だかね・・・」

橘ははっきりは言わなかったが、学年首席の彼の入るクラスは最初から比較的優秀なクラスに成る様に組まれたクラスだったようだ。道理で何と無く出来た人間が多いと思っていた。特に女子は橘に言い寄るような子が居なかった事を思えば内申も考慮された特別なクラスだった事が覗える。

「もしかして、このクラスでも委員長になったりしないよね？」

せりかはともかく、橘は学年首席で充分可能性が有った。その橘とよく一緒にいるせりかもセットに見られるのではないかと不安になった。

「…それは、言い辛いけど多分そうなると思う。この後、生徒会もやるつもりなんだから、なって置いて損は無いから今年もよろしくね。でも、このクラスって玲人みたいに委員やってた奴ばっかりな筈だから、仕事は手伝ってくれると思うよ？元五の子達も後半は結構やってくれてたから、入学当初みたいには大変じゃないんじゃないかな？俺も一年の時より部活も融通効くからさ」

「まだ決まっても居ないのにおこがましい心配かもしれないわね…。橘君とだったら一緒にやりたいって言う子もこのクラスなら居そうだしね…静観させてもらうわ」

「ちょ、ちょっと待って！！見捨てないでよ。やり辛い子と一緒じゃ精神的消耗が激しいよ。唯でさえこの視線で少しぐったりしてるのに…頼むよ、一生のお願い！！」

「この貸しは高くつくからね！！何て言っても一生のお願いで下手したら二年分やんなきゃならないんだから」

「椎名さんのお願いは大抵の事は聞くから！！本当に頼むよ。椎名さん以外だと面倒事にならないまでも地で話せないから気を張りそうだし」

「わかったわ。なるべく推薦してもらえるように根回ししておく。

元のクラスの子に王子に泣きつかれたって言っとくわ。橘君の性格みんな知ってるから納得してくれるんじゃないかしら」

「結構怒ってるね。椎名さんから王子呼びが出てくると結構ヒヤヒヤするよ。如実だよね。呼び方で機嫌分かるからマジで恐いよ」

「いいのよ。お願い殆んど聞いてくれるのはかなり魅力的な申し出だもの。それに親友にそれだけ必死に頼まれたら断れないわ・・・親友じゃなくて悪友だったかしら?」

「出来たら、分類的には親友にして欲しいかな。悪友は否定出来ないけどね。よく本庄や玲人に椎名さんを悪の道に引き摺りこむなって言われてるからな~」

「悪の道って・・・戦隊ヒーローものじゃ無いんだから!!言い過ぎだし、二人ともずれてるわよね。玲人もまだ過保護が抜けないのかしら?そんな事橘君に言うなんて」

「本庄が言うのは気にならないんだ?」

「…意地悪な事言うのね。私がちょっと嬉しいの分かってるくせに!結局本音を言えるのは私も橘君だけみたいね。…もしかしてそれを判らせる為にわざと憎まれ口をきいたのね?」

「椎名さんが親友だって言ってくれたから、嬉しくなって調子に乗っただけ。ごめんね。嫌な事言って」

「ううん。そんな事で喜ばれると罪悪感が湧いて来そうよ?交換条件なんて無くても良いって言いたくなるけどそれは勿体ないから言わないで置くわね。・・・半ぶん狙ってたでしょう?橘君の事だか

ら」

「ははっ！！流石、付き合い長く成るとカンが良くなるよね～。でも言った事は本心だからね♪」

「分かってるわ。橘君は無駄に嘘は言わないものね。特に私には！！って自惚れてるの」

「相棒だからね♪信頼関係は大事でしょう？」

「そうね。私も橘君の信頼を裏切らないように頑張らなくちゃ」

「これからも長い付き合いになりそうだけどよろしくね。椎名さん」

ふんわりと彼が微笑むと、その妖艶な美しさに見ていた周りがどよめいた。彼の秀麗な容姿は笑顔になると知的なものから途端に色香を放つものに変わってしまう。せっかく微笑んでくれたのに、それを指摘するのは躊躇われた。笑うなというのは酷な話だし、周りがそれに慣れてくれるのを願うばかりだった。

その後のクラスの自己紹介後の委員決めはやはり、橘が皆の推薦でやる事になり、副委員は立候補したさそうにしている女子が数人いたが、根回し通りに推薦でせりかに無事決まった。

20

二年生になった初めての土曜日、私達は近くの公園へ花見に行く事になった。

私達というのは、せりかと橘と玲人と美久と弘美と本庄と真綾だ。今年は春が遅く桜の開花が例年より遅くなった為、実現出来た花見だった。

お弁当は女性陣で鶏のから揚げやらおにぎりやお稲荷さんに玉子焼きといった簡単な物を朝からせりかの家に集合して作った。皆、結構料理は得意の様で真綾が揚げを煮ながら、酢飯を桶で酢をきっているのをみた時は、こういう庶民の物も作れるのかと当たり前だが少し感心した。美久達も普通のレベルの料理は楽勝の様で、一組に入れた事自体成績がいいのは周知の事実だが、それ以外でも常識的であった事は友として嬉しかった。

男性陣は飲み物とコンビニでおでんやお菓子を買ってきてくれる事になっている。料理の準備が出来たら皆で玲人を迎えに行ってから、お目当ての近所の桜の綺麗な公園に行く予定だった。

最初に花見を提案したのはせりかだった。理由はかなり邪ではあるが、一年前に桜が散ってしまった後だったが、桜の散るなかを歩く橘を見たかったと思った事を思い出したからだった。それにあまり変わり映えしないながらも新しいクラスの親睦会を兼ねようと橘に持ちかけた。この計画は橘無しでは、華（はな）が無い！と少なくともせりかは思っていた為、真っ先に約束を取り付けた。

「他には、誰が来るの？」

「まだ誘ってないんだけど、クラスのみんなに声掛ける？それとも玲人とか美久とか弘美とか近い人だけにする？」

「桜は今週がギリギリだろうから、あまり誘う範囲を広げ過ぎない方がいいんじゃないかな？クラスの連中もまだ其処まで馴染んでないのには楽しい集まりにならないだろうし、かといって元五の奴らだけ声掛けたんじゃ気分悪いだろうから、近い人だけにしておかない？」

「そうね。確かにそうだわね」

橘と話していると些細な事の様に見えて結構大事な気遣いに気付かされて感心してしまう。貴方をお華だと思ったセクハラオヤジの様な私を許して！と心の中だけで謝るが、橘に最初に声を掛けたのは偶然にも正解だった。

そうして声を掛けたのが玲人と美久と弘美だったのだが、橘と場所の相談をしていると本庄から自分達も花見に参加させて欲しいと言って来たのでこのメンバーになった。

公園に行くと何組かもういて、朝イチから花見をしている奥様連中が、片付けをしている所だった。

「「こんにちは」」

顔見知りのせりかと玲人が声を掛けると青いシートがひかれたその場所を譲ってくれた。二人でお礼を言うと近所のおばさま方は笑ってもう終わりだったから丁度良かったと言い、一番良い場所をラッキーにもゲットしてしまった。シートはそのままにして置いてと頼

まれた。夕方から来る夜桜の方々が使う約束らしい。本当に私達は中継ぎとして丁度いい存在の様だった。

「「「「「「「「カンパーイ」」」」」」」」皆で透明なプラスチックのコップでコーラで乾杯をすると玲人たちは女性陣が作った料理を食べ始めた。

「結構みんなうまいじゃん!!意外〜!」

「高坂君、それは失礼じゃない?料理くらい一般常識の範囲じゃないかと思うけど?」

意外と気の強い真綾が反論する。対照的に弘美は褒められて少し嬉しそうに、はにかんだ。

「いや〜、せりが出来るのは知ってたけど、後、斎賀さんとかは出来そうだけど、美久と更科さんは怪しいかなって思ってたよ」

「酷—い!!高坂君、私まで〜?」

「ほら、美久だって更科さんは駄目だと思ってたんだろう?」

「う、・・・そんな事も無いけど、手とかめっちゃ綺麗だし、箸より重いモノ持たない感じなんだもの」

「でも真綾さんは手際もいいし、とても上手なんで正直私も驚いたわ」

せりかが何気に美久のうっかりな正直発言をフォローするように言うと、皆も頷いて真綾の料理の腕を褒めた。

皆に褒められると、それまで不機嫌だったのは何処へやらで、すっかり照れてしまい頬を赤くして、もじもじとして、そんなことない、みんなの方が上手だとぼそぼそと言った。そんな様子が玲人に喰って掛かった真綾とギャップがあってとっても可愛い。せりかは初めて、ギャップ萌えという言葉の意味を理解した。

「こらこら、また良からぬ事を考えてるでしょう？」

隣にいた橘にせりかの思考が透けて見えてしまったようでこそっと注意をされた。

「思うだけならいいじゃない。それに口に出せる事じゃないんだし！！」

「その、口に出せないような事を考えてるのが分かっちゃうから、放っておけないの！今は俺か本庄くらいにしかバレないけど椎名さんは意外と分かり易いから少し注意した方がいいよ」

「わかったわ。少しだけ意識して顔に出さないようにするわ」

二人でこそこそ話していると皆の視線が二人に来ている事に気がついて乾いた愛想笑いをしてしまう。

「二人で今度は何の相談してるわけ？今回の花見みたいに良い事なら別にかまわないけど・・・ね」

本庄が言うのに皆も頷く。悪い事をした覚えは無いのだが、皆から

言わせると自覚が無いだけで、プチ悪魔な所業らしい。小悪魔？と尋ねると色気が無いからそれは違うらしい。なんて失礼なんだ！！この悪友どもめ！！と心の中で毒を吐くと橘と本庄だけが微かに、溜め息を洩らした。やっぱりあの二人だけが、妙にカンがいいだけじゃないのか？という気がしてくる。

「二人って何だかいっつもじゃれてて兄弟みたいよね～」

美久に言われても兄弟が居ないので、どの辺りまでが兄弟みたいなのかは、玲人とぐらいしか比較出来ないが、この一年は橘といる方がずっと長かったし、美久もそれを見ていたからこその言葉だが、玲人は少し面白く無さそうだった。今迄の自分のポジションを取られたようで寂しいのだろう。

「じゃれてるっていうより、橘くんにいいように遊ばれてるか、便利に使われてるって気しかしないけどね～。そのかわりに駄目なところをフォローしてくれるから頭があがらないのよね」

「そんな事ないよ。椎名さんの言う事はなんでも聞くってこの間約束したばかりじゃん？」

嫌な事をみんなの前で言ってくるのは、計算の内だろうが、それって如何いう経緯でそうなったかを話して欲しかった。がくんと項垂れると本庄から同情の目を向けられたが、皆は興味深々にその言葉に食いついた。

「橘くんになんでも？ってせりかすごいわね…」

美久や弘美が感心したように言うが、委員決めの時に本当の事を二人にくらい話して置けばこんなに驚かれなかったのに！と後悔して

しまいそうだ。

真綾がせりかに更に追い討ち情報をくれた。

「噂で聞いたんだけどせりかさんの女王様キャラ?!でいいのかな?一年生の子にも話題になってて、踏まれたい?とか言われてるわよ。習い事の知り合いの子が一年にいて教えてくれたんだけど」

全体に聞き捨て成らない内容だった。

橘も本庄もこの内容には流石に驚いたようだった。

「真綾、そんな話、聞いてないけど?それにまだ新入生だって入学して何日かしか経ってないのに冗談でも踏まれたいってそれはちょっと無いんじゃないのか?」

「そうだよ。内情ともかく、椎名さんは上品で聡明そうに見えるし、女王さまには見えないんじゃないのかな?」

た・ち・ば・な・君、本音が駄々漏れなんですけど!!・・・・。

しかし、腹は立つが、彼にしては珍しい!と思う方が先に立つ。

「聞いた話では、橘くんがやっぱりすごく人目を惹いちゃうでしょう?それで最初は橘君の話題が大半だったらしいのよ。…それでいつも一緒にいる人は彼女なのか?って話になってって、でも二人って傍からみてもそういう感じが皆無っていうか、むしろ椎名さんにいつも橘くんが窘(たしな)められているように見えるらしくて・・・」

「えー!!反対だよ。今だってこそこそと注意を受けてたのは私の方なんだよ」

「そうなのよね。事実はそうなんだろうけど、橘君は私達の前でさえ、こそこそとして、尻尾を見せないから、普段は余計にせりかさんが言ってるのだけが目に映るみたいなのよ。特に遠い人達は」

「ひどーい！これも何かの橘君の計算の内なわけ～？もう絶対橘くんと一緒に歩かないからね！！」

「違うよ！悪かったよ。そんな風に見られるなんて思わなくて・・・だって長い付き合いならともかく、椎名さんがそんな風に絶対見えないと思ってたし」

「成程ね！！今みたいな会話の状態だけを見た奴らが、橘を振り回すように見える訳か…」

「そうなのよ。まして橘君って見た目完璧王子様でしょう？その上首席で、サッカー部のレギュラーだから、非の打ち処の無いところに女王様に怒られて、焦ってなだめようとする姿がツボっていうか可愛くてきゃーってなるらしいのね。それで怒るせりかさんは、あの王子様が崇める存在だから女王様って訳。普段見てると、わざとちょっとせりかさんのこと怒らせてその後、機嫌取るじゃない？私から見れば橘君の遊びに無理やり付き合わされてる様に見えるんだけど、一年生からはそう見えないみたい。後、何気に高坂君に結構冷たいのも影響しているみたいなのよ」

「それって、・・・でも私だって流石に橘君の横にいる時に玲人に来られたらどう見られるか恐いもの。そんな、超嫌な女に見られたく無いから、遠慮のない玲人には悪いけどはっきり向こう行って！もしくは私が何処か行くから二人で話してってクラス変わってから言ってたけど冷たくはしてないわよ？ねぇ？」

「・・・まあな。最初はすこーし傷付いたけど最近はせりの言い分も分かるし、今迄同じクラスで今も同じクラス委員同士の忍といる方が自然だって分かってるから」

「その、分かって無い時に見た子達がサッカー部のエースですっごく人気のある高坂君を足蹴にしてるの目撃しちゃったのよ。クラスでは気を付けてたかもしれないけど外とかだと『近寄らないで』位の事言ってたでしょう？」

「ああ、軽く暴力もあったな」

玲人が遠い目をしながらいうが数日前の話だと思う。中々、理解してくれない玲人に苛立ってデコピンをして怒って教室に先に走って戻ってしまった事があった。あれを見られていたのか・・・。取り敢えず自分の学年以外は知らない人だし、油断していた事は確かだ。

「それを見てた子達が、橘君を従えて高坂君にも靡かないせりかさんの事を女の子達の一部が『お姉さま凛々しい』みたいになっちゃって、勘違いした男子は『踏まれたい』になったという訳」

「こわーい！！寒気がしてきた。玲人の所為？橘君の所為？どっちだと思う？」

「玲人の所為なんじゃ無いの？最初から空気読めよ！お前が来たら目立って椎名さんに迷惑がかかる位最初から分かるだろうに」

「忍の所為も有るだろう？いくら面白いからってせりで遊ぶなよ！！」

「二人とも充分悪いから喧嘩するなよ。特に橘が悪いけどな。お前が事態の収拾考えて、お嬢の女王様説どうにかしてやれよ」

「判った。椎名さん本当にゴメン！！何とか打開策考えるから勘弁して」

「せり、俺も悪かった。おれも協力するから、許してくれ」

せりかに必死に頭を下げる二人を見ていたら、『事実なんだから仕方なく無い？』って言う気持ちになって来た。そこにいた人間はともかくせりか本人でさえそう感じたのだからやっぱり悪いのはせりかなのだろうと思う。

「二人ともういいよ。結局私も悪いから仕方無いよ。今の時点では二人を弄(もてあそ)んでるみたいなすごく悪い噂じゃないみたいだから、これから気を付けていけばいい事だから頭上げて？」

二人は、飼い主から許しをもらった忠犬の様に目を輝かせてせりかを見た。皆もせりかは優しいし、許すのも心がかなり広いと思う。しかし、その様子はやはりせりかを女王様の様にみせるに充分な光景だった。真綾だけは最後まで『せりかさん優しいから甘過ぎなのよ！』と言っていたが・・・。

不意に風が吹いて花弁が舞った。せりかはにんまりとして橘に写メ撮ってもいい？と聞いてみた。

「何で俺の写メなんて欲しい訳？」

「それは、一年前からの念願だったのよ。桜舞う中の橘君の姿を見たかったのよ。嫌なのは分かるけど、この間の委員の引換の言葉忘

れて無いわよね？」

「…分かった。気が済むまで撮っていいよ。でも分かってると思うけど他の人には見せたり送ったりしないよね？」

「それは勿論！相方の嫌がる事は、分かってるから最初はそんな事はしないつもりだったんだけど、ここであの権利を行使しないと使い所が無さそうじゃない？」

そう言ってせりかは花が舞うたびに何枚か写真を撮った。最後はムービーで撮っていたら、流石にムクれた顔で、もうお終いと手をせりかの方に向けた。少しバカップルみたいな様子に、『なんであの二人は付き合って無いの？』と真綾が呟くが、少し困った顔の本庄が窘めるように『人それぞれ色々なんだよ』と言った。美久や弘美は「桜舞う～」のフレーズを一年前に何回か聞いていたので、せりかに良かったね！と初恋の微かな成就を良かったと思ったが、本庄の事も聞いているので少し切ない気持ちになった。桜の下にいると日本人は感傷的になりやすいと見ていた玲人も皆の表情を見ながら思った。

初恋の思い出の欠片を手にしたせりかは、少しの橘への罪悪感と沢山の満足感で一杯だった。今日の花見を一番堪能したのは、間違い無くせりかだった。撮った写真は絵画のように美しい。少しだけ気持ちが一年前の様に橘に向かっていたら良かったのにと写真を見ながら思った。

21

「せりかちゃん、最近男子に『せりりん』って呼ばれてるわよ。何かのアニメキャラらしいんだけど名前と見た目が似てるらしいの」

石原沙耶が、親切に知らせてくれた。この子は一年の時の一組の副委員長だった子で玲人の元、相方だったので、委員の仕事を玲人が部活にどうしても行かなくてはいけない時など融通して助け合ってきた。逆の場合もこちらも手伝ってもらっていた。今は、純粋にクラス委員の私の手伝いをしてくれている。前もあったが、最初はやはり忙しい。彼女もそれを知っているので当たり前の様に手を貸してくれる。橘が部活より此方の仕事を優先しようとしたのを、沙耶と二人で追い払う様に部活に行かせた。一年の時の様に気まずさは無くとも、彼はレギュラーなのだから行かなくては多少の弊害は出て来てしまうだろうと思う。

「なんだか、玲人にデコピンしたのを見られた所為で一年生からは『女王様』って言われてるらしいから『せりりん?』くらいはどうって事ないわ。愛称で許される範囲じゃない?」

「ああ、・・・玲人君ちょっとしつこかったものね。せりかちゃんが困るの分かっても納得するまで少し子供っぽいしがみつき方だったもの。怒っても仕方が無いわ」

「玲人は基本的に人目が気にならない羨ましい性格だから、根本的には理解できないのよ。今も私が気にし過ぎって思ってる節もあるんだもの」

「私も玲人君と一緒にいると結構やっかまれたから、せりかちゃん

の気持ちはわかるわ。彼って全然気が付かないんだもの。自分以外の事にあまり目が行かない方みたいね」

「そうなのよ。ごめんね！沙耶ちゃんにもやっぱり玲人の奴、迷惑掛けてたのね。うちに帰ったらとっちめておくから！！」

「ううん！玲人君は悪気は無いんだし、無邪気で一緒にいて楽しいから、そんな事言わないでおいてね。二年になったらせりかちゃんと一緒になったから、そういう事も無くなったしね。玲人君最近すごい人気があるから、ちょっとどうしようかなって思ってたから助かったわ。流石に謂われの無い嫉妬は恐いものね」

「そうだよね。みんな一回でも私達の立場になったら、羨ましいなんて絶対言えないと思うわ！橘君と一緒に委員の仕事も泣き付かれなかったら絶対引き受けてなんか無いのに・・・」

「あの橘君が、泣き付く所、見たかったわ♪想像できないもの。出来過ぎ君って心の中で思ってたのよ。実は・・・」

「私も思ってた～！！最近はそういう所も見えるから、安心するけど、最初半年くらいは近寄りがたい感じだったもの」

「そんなに長かったの～？今の仲の良さからは、考えられないわね！」

「うん。見た目が気にならなくなる迄に結構かかったかなぁ？あのフェロモン駄々漏れで近距離で微笑まれると普通、固まるわよ！それは玲人じゃないけど其処だけは彼も自覚薄いから、なんて言っていいか分からないんだよね。彼の場合は結構注目浴びるのは、気になるみたいだし、一緒にいる私の事も気遣って対処してくれるから

玲人とは比べようも無いけどね」

「せりかちゃんって玲人君に厳しいわよね～。少し気の毒かも。あっちはあんなに懐いてるのに・・・」

「そんなこといったって同学年高校生男子に懐かれても可愛いなんて全然思えないし！ちょっとは、クラスが遠くなってお互い少し距離が出来たと思ってたのに、また同じクラスじゃない？私は玲人のお姉さんでも妹でも無いんだからある程度の距離を保って欲しいのよね。どうも未だに奴は幼稚園児の時の感覚と一緒な感じなのよ。橘君の存在に今は助けられてるけどね。彼は玲人の調教も上手いから」

「せりかちゃん、やっぱりひどーい！！」

そう言って沙耶と二人で笑った。玲人に酷い目に遭わされてる被害者同盟だからこその愚痴のいえる相手だった。本当に有り難い。おまけに仕事もこうして手伝ってくれるのだから本当にいい子と巡り合えたと感謝してしまう。

「あっ居た居た！！せりりんと石原さんお疲れ様！」

「本庄君、せりりんってやめて？何かのアニメキャラなんでしょう？」

「なんだかずっと椎名さんって呼ぶのも寂しいかと思ってたから、可愛いし、いいかなって思ったんだけど？」

ずっとお嬢とか、お嬢さんとか呼んでいた本庄だが、クラスが変わ

った途端にそういう風に人前では、めったに呼ばなくなった。せりかも本庄を先生と呼ぶ事を止めていたので、お互い変に偏見を持たれないように相手を慮っての事だったが、せりりんの定着は嫌だと思う。一部の男子が裏で言ってる分には、そのアニメが終われば多分消えて行くだろうと思う。

「却下します」

「そっか～残念！他検討するから、また考えておいてね。飲み物の差し入れ持って来たんだ～。橘からメールで頼まれたから仕事も手伝える事あったら言って？」

まだ結構涼しい為か温かい紅茶がレモンとミルクとストレートの三種類用意されていた。沙耶に先に選ばせてミルクを取ったのでせりかはレモンを貰った。本庄がストレートの紅茶を空けて飲みだしたので、温かいうちに二人も頂く事にした。

「橘が、石原さんも本当に有難うって言ってくれって言ってたから」

「ううん。委員の仕事って言っても本当はみんなでやっても良い様な事なんだもの。それにせりかちゃんとは、一年の時から一緒にやってたから仕事がしやすいのよ」

「沙耶ちゃんが同じクラスで助かったよ。そうじゃないと橘君、私に罪悪感持ってるから部活に行かないもん絶対！他の子が手伝ってくれても多分譲らなかったと思う。沙耶ちゃんは慣れてるから安心感と、後・・・少し甘えられたんだと思うよ。慣れてるから」

「メールも石原さんと一緒だから大丈夫だろうけど、一応行けたら行ってっていう内容だったから、そうなんだろうな、多分」

「橘君ってやっぱり出来過ぎ君だと思うわ。なんだか完璧よね。気遣いが・・・」

「そうかもね～。でも、それも彼の美点だからね～」

「そう、そう。橘もずっと一緒にいると結構普通の所のが多いよ。いい所は、長所だと思うぐらいの感じであまり特別視しないでやってよ」

「本庄君は友達想いなのね。少し冷めた感じのイメージあったから意外だわ」

「そうなんだよね。私も頼りにしてるんだけど、沙耶ちゃんも困った事があったら本庄君が一番頼りになるから覚えておくと便利だよ」

「おいおい、その便利屋さん発言はどうな訳？お嬢さん？」

っ！！今多分、うっかりお嬢さんって言われたけど、結局彼の中では私の呼び名はそれでせりりんにはならないんだろうなぁと思う。私もその内には多分、せんせいと呼んでしまうだろう。なんといっても人生の師匠である。最初はワルツのだったけど。

「でも何かあれば、出来る限りは力になるから言ってね？」

沙耶に優しくそう言うと沙耶の顔がほんのり赤くなった。先生、罪つくりな事しないでよね！真綾さんの事はみんなには言って無いんだから！！

軽く睨むと目だけで『ごめん』と言ってきた。せりかがお仕事を頼

むと本庄は手早く残っていた分を終わらせて職員室に運んでくれると言って、私達は早めに帰る事になった。

「せりかちゃん、さっき気付いたんだけど、もしかして本庄君の事が好きなの？」

沙耶も結構鋭いのか、私が分かりやすいのか、バレてしまったらしい。何かそれらしい事をしてしまったかなぁと思うが分からない。女のカンって奴かな？

「実はもうとっくに振られてるから黙ってて欲しいんだよね。今はもう友達だし」

「ごめん！！そーだったんだぁ！道理で、橘君や玲人くんに靡かないと思った。せりかちゃんってやっぱり趣味がいいわね。私もうっかりヨロめきそうだったわ。彼氏いるのに」

「沙耶ちゃんって彼氏いたの？知らなかった～！！どんな人か聞いてもいい？」

「うん。今は違う学校なんだけど、中学からの付き合いでサッカーしてるのよ。だから玲人くんや橘君の事、放って置けないのかもしれないわね」

「何処が良くてお付き合いしたの？」

「うーんと一番は優しい所だけど、全体的に此処がいいっていうんじゃなくて気が合う所かな？」

「そっかー！いいなぁ。わたしにも早く良い人が出来ないかなぁ」

「せりかちゃんって残念な感じよね…」

美久にも言われた事を沙耶にも言われた。なんだか私ってそんなに残念なのかなぁ？

少し落ち込んでいると慌てて沙耶がフォローしてくれた。

「周りに良い人い過ぎて目が肥えてくるから感覚マヒしちゃうわよね。そういう意味で残念って意味だから、ごめんね」

そうは言ってくれたが、遠慮の無い美久が言った意味と多分近いのだろうとは思う。沙耶は可愛いし性格も申し分無いくらい良いし、彼氏がいても全然当たり前なのだが、なんだか想い想われる関係の人がいる事をとても羨ましく思ってしまった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4353x/

幼馴染の親友

2011年10月26日09時07分発行